緋弾のアリア XIX

Aria the Scarlet Ammo

小舞曲（メヌエット）を御一緒に

赤松中学

MF文庫 J

緋弾のアリア XIX

Aria the Scarlet Ammo

小舞曲（メヌエット）を御一緒に

赤松中学

Aria
アリア

メヌエット

MF文庫J

緋弾のアリアXIX

小舞曲（メヌエット）を御一緒に

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶしあ

Contents

1弾 瑠璃色の姉妹神（シス・エムロード）

2弾 ベーカー街の星

3弾 大英帝国（サイオン）の刺客

4弾 時計台（Quadler on）の双剣双銃（Big Ben）

5弾 小舞曲（メヌエット）を御一緒に

1弾　瑠璃色の姉妹神

アリアの母親、神崎かなえさんの読みは当たった。
いたのだ。
緋緋神と同じように――
瑠瑠神、璃璃神も。
今、俺たちの前にその2つの女神が出現している。
ネバダの砂漠を汽車で突破し、空軍基地の地下深くに侵入し――俺たちは、とうとう彼女らの前へ辿り着いたのだ。
100年前の車・T型フォードの形にされた瑠瑠色金から現れた瑠瑠神は……
「――私たちは今ある全てと共にあるもの。今ある自然を変えることは、自らを傷つけることに他なりません」
霊体のような、実体を伴わない美女の形を借りて語りかけてきている。
その姿は、俺たちを警戒してか……
ジーサードが愛した、故・サラ博士の外見を模したものだ。
「従って、ジーサード。あなたの願いを叶える事はできかねます。失われた命を不自然に甦らせることは、御すべきではない、大いなる自然の破壊なのです」
ジーサードの想いを読み取ったらしい瑠瑠神は、穏やかな声で先ずそこを拒絶してきた。

絶句しているジーサードの左右から、超能力を持つ部下たち――ロカとツクモが「心が読めない」「瑠瑠粒子は出していません」と、瑠瑠神について小声で報告している。

ひんやりとしたリノリュームと鋼鉄に囲まれた、カー・ガレージで……

「……瑠瑠神、俺は……」

俺は、祈るように目を閉じたままの瑠瑠神に語りかける。

アリアの緋緋神化を止めたい、その思いを伝えようと。

だが瑠瑠神はそれも俺の脳から読み取っていたらしく、

「私はあなたの友人が持つロザリオから、見ました。ヒヒがあなた方の運命を狂わせた、その光景を。ヒヒに代わり、その罪を謝します」

と、全てを悟っているような神々しいムードで俺に語る。

「私たち色金は――意志を持つ金属。その意志は一にして全、全にして一。形を変えても、分け隔てられても、共有される心を持つものなのです」

理子が持っていたあの青い十字架には、極微量の瑠瑠色金が含有されていた。瑠瑠神はそこを通じて、事のあらましを感受していた……という意味の事を言っている、のだろう。

「私たちの心は、人間が計り知ることのできない極微小の――素粒子の世界に在ります。私たち色金は分子レベルで観測すれば鉄、ニッケル、プラチナ、金といった雑多な金属と見分けが付かないものでしょう」

科学的な自己紹介もしてくれた瑠瑠神だが、俺にはさっきの概念的な説明で十分だ。

俺なりの解釈で言えば、つまり色金とは霊体が取り憑いた金属。
その金属が分割されると、憑いた霊体も分割される。
しかしそれらは一つの意志を持ち続けて、同時に何カ所にも存在する事になる。
だから『一にして全、全にして一』というワケだ。
そして――その霊体は、超々能力者でもある。
今そこにサラの姿を投射してるように自ら超能力を使ったり、人間に憑依したり、力を分け与えたりする事ができる。
超常の中の超常みたいな存在だから、便宜上『神』と呼ぶとしても……
人と思え。そう思って、勇気を持って対話するんだ。キンジ。
「心……と言ったな。俺はアリアや猴に乗り移った緋緋神と戦った事があるが、お前とはかなり性格が違ってた。色金にはそれぞれ、異なる人格があるのか」
緋緋神へ普通に語りかけた俺に、ジーサード一味とマッシュが驚くのが分かった。
だが悲しいかな、俺は超常現象には慣れっこなんだ。神や霊が出ようと、ビビる回路は焼き切れちまってるんでね。ここは、俺に任せろ。
「はい。私――ルルと、そこの妹リリは、今あるものを変えたくない。人に守られ、人に触れられず、永遠に眠り続ける事を望んでいます」
璃璃神の方に憑依され、立ち尽くしているレキを片手で示しながら――
霊体の瑠瑠神が答える。

「ですが、ヒヒは違う。数千年前、ヒヒは私たち色金が持っていなかった『情熱』という人間の感情に魅せられてしまったのです。それからずっとヒヒは人間を嗾し、恋と戦いを引き起こし、その感情の昂ぶりに共感することに夢中になっています。そのためにヒヒはもう見過ごせないほどの数、人間の運命を破壊した。それもまた、許されざる自然の破壊なのです」

人間をも自然の一部と見做す、瑠瑠神は――

「だから……私とリリは、ヒヒを止める決意をしました。その意志は、キンジ。あなたの意志と矛盾しないものでしょう。これより私は、あなたと共に――ヒヒを潰えさせる道を行きましょう」

名指しで、俺に味方してくれるような事を言ってきた。

そいつは願ったり叶ったりだ。願ったり叶ったりだが、なんだが……

「……その、『止める』『潰えさせる』ってのはどういう意味だ」

俺は一応、そこの確認を取る。

「あなたに私の一部を運んでもらい、世界各地の緋緋色金に接近してもらいます。そしてその都度、私の換価重力圏にヒヒを捕らえ、その重力子を集め、圧壊させていくのです。ゆくゆくは、その全てを。私にはそれができる」

「よく分からん。それは人間で言うと、どういう行為にあたるんだ」

「段階的にですが、『殺す』ということです。私は今、姉を殺す決意をしたのです」

瑠瑠神と共に――レキの体を借りた璃璃神も、きろっ、と俺の方を見てくる。

……やっぱり、そう来たか。

俺はアリアの緋緋神化を止めたい。それは確かに瑠瑠神・璃璃神と一致する想いだろう。
人間を自然と見做すかどうかは別として、自然破壊がいけないってのにも同意する。
だがさっきの前提として、そして感覚的にも、俺は緋緋神・瑠瑠神・璃璃神の三姉妹を人と見なしている。何を以て人を人と見なすかは学者が考えるべき事だが、実際に接した俺からしてみれば、コイツらには人格があり、金属だが体もある。金属人だ。
そして――武偵法9条。
武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。
この条文は、殺してはならない対象を『人』としている。生物学的な人間に限ってない。そして俺の認識では、金属人も人だ。となると、緋緋神を殺すのは御法度だろう。
それに……法律がどうの以前に、緋緋神は孫やアリアを通じて接した相手だ。そいつを殺したら寝覚めが悪くなるだろうし、性別があるのか知らんがその性は女に思えた。体が無いにせよ、女を殺すのは趣味じゃない。だから。
「ダメだ。殺さない。家族殺しの片棒は担がないぞ」
俺は明確に、そこを拒否しておいた。
「では、ヒヒをどうするのですか」
この先それでも瑠瑠神を味方に付ける必要はありそうなので、俺は
「逮捕する」
そのアイデアをぶちまける。

これには皆、また驚いた目でこっちを見てきた。こっちが半ば出任せだったので思考を読み切れなかったらしい瑠瑠神も、璃璃神レキもちょっと驚いた様子だ。

「こういう時は、俺は日本の現行法を元に物を考えるようにしてるんだ。お前らみたいな非常識な奴らと一緒だと、たまに常識を忘れてしまいそうになるからな」

「誰にだって裁判を受ける権利はある。緋緋神を逮捕して、罪を償わせて、更生させる。瑠瑠神、お前たちは世界に3種類しかいない姉妹だとかさっき言ってたろ。それが1種類絶滅したら、それこそ自然破壊だ」

途中でロカが口を挟んで出鼻をくじいてきたが、それはスルーしてそう言うと

「……賛成できません。ですが、反対もできません。理解できないのです。ですから……追って相談しましょう。また緋緋神に会えば、あなたの意志も変わるかもしれない」

瑠瑠神は考えるような仕草をしつつ、そう返してきた。

やっぱり人っぽいな、こういうところ。

「じゃあ、その車の形をしてる体をちょっともらうぞ。全部は持ち出せないだろうから、どこか、部品を」

瑠瑠神の気が変わる前にと、俺は

占い車にも詳しそうなジーサードの部下・アンガスに目配せしつつ、瑠瑠色金で出来たT型フォードの1台を指してそう宣言するのだった。

マッシュがエリア51・第89A管理区全体に掛けた電子的なプロテクトが突破される前に、俺たち

は瑠瑠色金を収めた地下施設から夜の屋外へと急いで脱出する。
レキは――俺と瑠瑠神が話し終えた後すぐ、普段のレキに戻った。『風』こと璃璃神は瑠瑠神と交信するためだけにレキを使い、俺たちと関わろうとはしなかったようだ。
ジーサードの子分たちがT型フォードを部分的に解体している間に、瑠瑠神は薄くなり、いつしか消えていた。やはりこっちも、できるだけ人間とは関わり続けたくないんだな。
しかし彼女が宿る瑠瑠色金は、今や3kg以上が俺たちの手中にある。アンガスが外したギアはアトラスが持ち、大小のネジはロカがポッケに詰め、ツクモはステアリングリムを小脇に抱えて運んでいる。これだけあれば十分だろう。
瑠瑠色金が盗まれた事は、マッシュのプロテクトが解け次第すぐ露見するハズだがな。
一時的にとはいえ、その防衛責任者だったマッシュは
「……いまボクの言いたい事が、キミのIQで分かるかな？　ジーサード」
ただの砂漠の一部のように偽装されていた非常ハッチから皆で出た後、メガネの下から俺たちを窺うように見てきた。
「交渉してぇんなら、銃を突きつけるようなマネはよせ。それは美しくねえ行為だぜ」
サラ博士の幻を見せられた時は魂が抜けたようになってたジーサードも、今はもう気を取り直して――片方しかない腕を腰に当てて、胸を張っている。
マッシュはどう見ても丸腰だったので、ジーサードの発言に俺たちは「？」という顔をした。するとマッシュはニヤリと笑って「起きろ、ルウジーン」と足下に命令している。

その声に応えるように、

「LOO」

今マッシュのすぐ隣の、砂漠の地中から声がして

ずざ、ざあ。と、セルリアンブルーの髪をした少女がモグラのように出てきた。

「……！」

その存在を察知していたらしいジーサード以外、俺たち全員が身構えてしまう。

これはエリア51へ進撃中の俺たちを襲撃した、LOO。アトラスとの戦いでズタボロになり、機関車からミニ・グランドキャニオンに転落したハズの少女型ロボットだ……！

武装をほぼ失い、脚部ユニットも損傷し、もぎ取られた右腕の痕も痛々しいLOOだが、まだ戦おうと思えば戦える様子だぞ。

「たかだか37マイル半LOOをマラソンさせた事が、そんなに驚きかな？」

マッシュは超小型HMDでもあるメガネをトントンと指でつついて見せ……

「ボクは収支報告記載事項不正利用の内部告発を受け、連邦Xリストの1つ、瑠瑠色金の防衛責任も果たせなかった。この状況下では、アウトローにならざるを得ないようでね。ジーサード――キミの同盟にはインテリジェンス担当が必要そうだが、それにボクという適任者を破格の条件で雇用するチャンスだぞ。今ならこのLOOもオマケで付けよう！　ボクにはキューバに隠し財産があるから、給与面も大幅にディスカウントできる」

通販番組みたいな身振りを交えて語るマッシュと、ジーサードは――

「優等生ほど、裏じやワルだったって事か。いいぜ。ちょうど俺も情報担当が欲しかった所だ。90年代生まれの人工天才は27人で、いま生きてるのは16人。俺とお前は残り少ないクラスメートみたいなもんだしな。同期の桜のよしみで、よろしく頼むぜ」

苦笑いを返しつつ、片方しかない手で握手を交わしている。

……どっちかというと身よりを無くしてしまったマッシュとLOOを助けてやる的な、いつものお人好しジーサードって感じの顔で。

親ジーサード的な空軍キャンプまで、皆で戻るとそこで空軍のタダ酒を呷っていた元軍人のサンダース爺さんは、すっかり出来上がったご様子。自分はジーサードの親友と嘯き、家までヘリで送ってもらう話まで取り付けてたよ。マッシュもそうだがこういう時はとことん調子のいい国民性だよな。アメリカ人って。

「今回はジャマしたな。恩に着るぜ」

俺たちを出迎えた空軍准将に、ジーサードは年上に対しても上から目線で軽く敬礼。

准将は大きな体を揺すって笑い、

「感謝するのは私の方です。この程度のことでジーサード同盟に恩を売れたのですから。次の大統領が共和党から出たら、この件を電話で自慢するだけで私は出世できる」

と、砂漠の飛行場で既にプロペラを回して駐機中のAC－130を葉巻で示してくれた。

「帰りは北回りが良いでしょう。乗員を機密としてニューヨーク・ケネディ空港へ向かう空路を申

請済みです」

すげえな、このジーサードへの厚遇っぷり。アメリカじゃヒーローに協力するってのはそれだけプラスになる事なんだろうな。日本にも見習ってほしい。バスジャックとかハイジャックとか新幹線ジャックから人々を救ったヒーローに、ぜひ金一封を下さいよ。

アンガスとアトラスが操縦するAC130の中では、LOOが早くも小間使いとして働いてくれた。さすがロボットは疲れ知らずだな。ケガ人の手当てや給仕を、ルゥルゥ言いながら甲斐甲斐しくやってくれてるよ。

スペアリブを骨ごとバリバリ食うジーサードは、マッシュと何やら相談していた。

……聞くとはなしに聞こえたが、どうもサラの件らしい。

だがそれは俺はもう立ち入らないと決めた、ジーサードの問題だ。ドラゴンボールでも何でも勝手に探せばいいさ。

その話が終わるとジーサードは、

「で、兄貴はこれからどうするんだ」

LOOからもらったインスタントコーヒーを飲む俺の所へ、やってきた。

「……少し考えてたんだがな。イギリスへ行って、アリアに会うよ」

俺がそう答えたところに、オカマの黒人さん・コリンズが乙女チックに体をくねらせて割り込んでくる。

「だろうと思ったわ！　離れてる間に思いが募って、どうしても会いに行っちゃうのよね。恋人同士って」

「いや、会いたいとかそういうんじゃなくってッ。消去法なんだよ。いま所在が割れてる緋緋色金は、アリアの胸の緋弾と、猴の体に埋め込まれてるのの2つだ。だが極東戦役の休戦破りの都合もあるんで、猴とコンタクトするのはバックアップ案にしておく。ここは中央突破でアリアだ。そこで折を見て、瑠瑠色金と緋緋色金を接近させてみる」

「ロンドンで、瑠瑠神と緋緋神の決戦ってワケか」

と言うジーサードに、俺は首を横にふる。

「緋緋神は話が通じない奴だが、それを殺せる瑠瑠神と戦わせたくはない。戦いそうなら、引き離す。どうも、瑠瑠神は近づかなきゃ緋緋神を殺せないみたいな話をしてたからな」

「戦わないで、どうするってんだよ？　兄貴らしくねえなぁ」

欧米人らしく『やれやれ』のポーズを、俺はデコピンで叱る。

「アメリカじゃ戦争でカタを付けるのかもしれないがな、日本じゃ粘り強い対話と交渉でできるだけ頑張るのがお作法なんだよ。俺はその対話役を瑠瑠神にやってもらうつもりだ。緋緋神は瑠瑠神の姉とか言ってた。身内の話には、緋緋神も聞く耳を持つかもしれない」

「じゃあ、都合良く緋緋神と瑠瑠神が同時に出てくれたとしてだ。何をどう交渉させる？　兄貴はどうやる？　緋弾をアリアの心臓ごと摘出して、緋緋神を逮捕するとかほざいてたが、それだってどうやる？　牢にブチ込むのか島流しにするのか知らねぇが、刑罰だって与えるのはちっこい手錠でも掛けるのか？

ようがねえだろ。ええ？　どうすんだよ、あれもこれも」

「そこは……俺には分からん」

「だろう？　だから殺させるしかねえんだよ」

「俺には分からん。だが、あれもこれも分かるかもしれない人物がいるんだ」

「……誰だよ」

「メヌエット・ホームズ。アリアの妹だ。カナが東京で言ってたが、メヌエットは色金の事をシャーロック以上に知ってるらしい。どうも気むずかしい子らしいんだが、アリアがそこを聞き出しにかかってるハズだ。だから――アリア、緋緋神、メヌエットが揃ってるロンドンに、俺が瑠瑠神を連れて行く」

――女神たちをどうすればいいのかは、メヌエットならきっと推理できるだろう。

相変わらず雲をつかむように不確実な計画だが、解決への糸口は掴めてきた感覚がある。

五里霧中で東京を出た時よりは、ずっとな。

それらが全て、全てうまくいけば――アリアは、緋緋神の呪縛から逃れられる。色金とアリアの関係が切れれば、神崎かなえさんが色金の秘密を守って政府に監禁される必要も無くなるだろう。

そうさ。きっと何もかもがハッピーエンドになるんだ。

この道を渡りきりさえすれば、きっと。

翌朝――

ACC 130でJ・F・ケネディ空港に到着し、スーパーカーの大名行列でジーサードビルに戻ると……ジーサードは部下たちに休暇を与えた。

おめかししたロカは「ブレゲの金時計を競り落とす」と意気込んでオークション会場へ行き、アトラスはパパとママのいる実家へ大型車で豪快に帰省し、コリンズはエステへ。ツクモはかなめとヤンキースタジアムで野球観戦だとよ。

アメリカを横断してドンパチやった直後だってのに、みんな元気だよなぁ。

俺は……ジーサードと、休みを自ら返上してジーサードの手伝いをするアンガス、あとマッシュが俺のロンドン行きの準備をしてくれてる間、留守番をしながら食っちゃ寝して英気を養った。

夜も大広間でフカフカの絨毯にレキとLOOと並んで体育座りして、テレビを見ながら休憩さてもらう。休みと聞いてすぐ外出するのは休みのシロウトだね。休暇はゴロゴロするのが一番贅沢な過ごし方なんだよ。

と、ちょうど放送していた映画・300を見ていると……

「キンジさん。ロンドンへは、気を付けて行ってきてください」

俺と並んで巨大プラズマテレビに向かってはいるものの、どこか遠いところを見ているような目つきをしたレキが話しかけてきた。

「……なんだよ。お前は来ないって事か？」

「はい。私は一度、故郷へ帰ります」

こっちを向かないままそう言ってきたレキに、俺は映画鑑賞を中断して振り向く。

「風が、私を呼んでいる。ですが、これは風のお告いなりになっているのではありません。私自身もまた、風に会うべきだと感じているのです」

緋緋神、瑠瑠神。そして『風』こと、璃璃神。

レキは璃璃神に乗り移られていた時の記憶が無いようだったが、その璃璃神の宿る璃璃色金のところへ行くつもりらしい。

「風……ってのは璃璃神の事だよな。実はもう少し切羽詰まったらお前に頼もうと思ってたんだが、レキも何となく予備役をやってくれるつもりだったんだな」

武偵用語で言う、予備役とは

メインの線が切れた時、つまり俺が失敗した時に、代打として問題解決に当たる係だ。

失敗。それはつまり、俺が死んだ場合のこと。

今回の件、最悪のケースでは……緋緋神との戦闘になって俺が死亡し、瑠瑠神も敗れ、緋緋神化したアリアだけが残る可能性がある。

そうなった場合、レキと璃璃神が緋緋神アリアに立ち向かう。

そういう、筋書きだ。そうならない事を祈るけどな。

「じゃあ、応の遺言としておくが、緋緋神を殺すなよ。俺が殺されていても、だ。お前だって武偵高の生徒なんだから、武偵法を守れ。いいな？」

「……」

答えねーし。殺る気だぞこれ。こうなったら是が非でも失敗できんな、俺。

だがここで頑固者のレキと押し問答しても時間のムダだな。
この件は後で風魔あたりにハイマキを人質ならぬ犬質に取らせて、強要しよう。
「……お前の警護には、かなめに付いていくよう言っておくよ。どうも緋緋神は覇美鬼たちが出現させたがってたフシがあった。お前の動きを察知して、ヘタにその辺が妨害してきたら困るだろうからな」
「ありがとうございます」
ちゃんとお礼を言ってきたレキに、またちょっと人間味を感じつつも……
そこで俺は、ちょっと思いついた事を尋ねてみる。
「そういやお前の故郷には、璃璃色金と思われるものがあったのか？」
「はい。藻に覆われていたので私はずっと石だと思っていましたが、あれは金属だったのかもしれません」
「藻……って事は、水中にあったのか」
「ハリウス湖という、円形をした湖の底に沈んでいたものです」
これは犬棒だったかもしれないな。
俺たちは今まで、十字架、弾丸、ナイフ、車と、加工された色金しか見た事がない。
湖底に有り、藻に覆われてたとなると……人間が手を加えた可能性は低い。
色金というものの自然界での形状が、レキの証言から分かるかもしれないぞ。
「大きさとか形を覚えてるか？　ちょっと描いてみてくれよ。お前、絵が上手いし。おいＬＯＯ、

お絵かきの道具を探してこい」
と、ロボット・レキとリアルロボット・ＬＯＯにそれぞれ注文して――ＬＯＯがロカの部屋から画用紙とクレヨンをパクってきたので、それをレキに渡すと……
レキは、きゅっ。
上下座するようなポーズになって、絨毯に広げた画用紙にイラストを描き始めた。
……かきかき……かきかき……
どうやら素潜りして見たものらしい瑠璃色金を、レキが青や緑のクレヨンで描いていく。
って……す、すげえ。
藻とか、超リアルなんですけど。水の透明感もグラデーションで見事に表現してる。
とはいえ丁寧な分、描画にはちょっと時間がかかるらしい。
それを待ってる間、ちょっと俺が目をそらした瞬間――
（う、おっ……！）
見えたものに、声が出そうになった。
夜なんで、床から天井まで全面ガラス張りの窓が鏡みたいになっていて……
そこに後ろから見た、『伏せ』のポーズのレキが映っちゃってたのだ。後ろから。
武偵高の短いスカートで雌豹が這うみたいな姿勢をしてるもんだから、太ももの全てが――無駄肉ひとつない脚線美が露わになってる。その上にはスカート内に秘められている木綿のサムシングまで露わになってるようなななってるようなないようなだ。

レキはレキで、お絵かきに集中してるから俺の視線に気づいてない。

お留守番中の今、このジーサードのお家はパパもママもいないから的シチュエーション。俺は丸一日休んでたから英気が養われて、血の巡りも好調なコンディションだ。ていうか、そっち方面の英気なんか起こすんじゃねーよ俺！　それはヒス的にデンジャラスだって、何度言ったら分かるんだよ！　見るな！

「見てください」

内なる血流との戦いの最中、唐突にレキが言ったセリフに――俺は、白雪が問々見せる『座ったままの姿勢でジャンプ』をしてしまうほどテンパる。

だがそれは絵が描けたから見てくださいという意味だったらしく、事なきを得て……

咳払いを一つ放って華麗に動揺をごまかした俺は、レキのクレヨン画を拝見する。

そこに描かれた、自然のままの璃璃色金は――

（この形は……どこかで、見覚えが……）

あるような、気がする。それを考えるのに集中したいんだが、レキが俺に対面して体育座りというこれまた悩ましいポーズを取るから雑念に悩まされる。お前は俺にスカートの内部を見せたいのか？

「大きさは？」

「直径10mほど、高さは3mほどでした」

デカイな。巨岩ってとこだ。だがレキの直径という表現にもあったように、大まかには円形……潰れた円錐形をしている。中央部分だけが盛り上がっていて、帽子のような――

「笠だ」

思いついた言葉が、口を突いて出る。

傘じゃなくて、笠。昔の日本で人々が頭にかぶって雨雪を防いだ、かぶり笠に似てる。

時代劇なんかによく出てくる、市女笠みたいな感じだ。

そしてこれは……

白雪の実家・星伽神社で俺が子供の頃に見た、星伽家の家紋――『星に笠』に描かれた笠の形状と、ピッタリ一致してる。

ここまで完全に、同じ形となると……これは偶然の一致じゃないだろう。

星伽神社は、昔から緋緋色金に関わってきていた。家紋のあれは笠じゃない。自然界にあった、オリジナルの色金の形をどこかで見知って描いたものだったんだな。

まだジーサードの部下たちがほぼみんな休暇中の、次の朝。

俺たちがエリア51から奪った瑠瑠色金は、アンガスが、部を俺のバタフライ・ナイフに表面被覆処理――いわゆる電気メッキで同化させてくれた。かつて緋緋色金の影響か赤みがかっていたこのナイフは、今度は青みを帯びて仕上がっている。

俺は今日、この色金ナイフを持ってロンドンに飛ぶ予定だ。

ここ数日間の出来事をアリアに電話で報告したところだったが、アメリカじゃ通話は例外なく米国家安全保障局に盗聴されるというので――元局員のマッシュにさっそく、役買ってもらい、『瑠瑠色金を入手。本日昼過ぎロンドン着予定。返信不要』という意味の武偵秘文……暗号文のメールを、さらに電子的にも暗号化して送らせておいた。

仮住まいしていたジーサードのペントハウスで荷物をまとめていると、

「おい兄貴。兄貴はイギリスに入国できるかどうか怪しいぜ？　どうもイギリス当局から危険武偵リストのB上位等級に格付けされてるみたいなんでな」

と、例のトマトを食いながらのジーサードが不都合な情報を教えてくれた。

「準が取れてCがBになって下位が上位になったか。偉くなれて嬉し泣きしそうだ」

「というわけで、変装して民間機で密入国しろ。これが兄貴用に偽造したオランダ国籍のパスポートだ」

オランダ国籍と言うのでイヤな予感がして、渡されたパスポートを開くと……

うわぁー美人さんの写真だぁー。

「クロメーテルのパスポートじゃねーか！　何でお前も知ってんだよッ！」

「パトラが教えてくれたんだよ。って、おい、殴るなっ。オランダ人のフェイスブックに何枚も写真があったとはいえ、真正面からの顔画像を合成すんのは骨だったんだぞッ」

馬乗りになってアリア式に怒りの鉄拳を打ち下ろす俺と、その鉄拳を下から割と懸命に防ぐジーサード＝遠山家らしい、別れの儀式になったな。

ジーサードは正義の味方業務に加えて、おそらくサラの件で新たな道を求めてアジアのどこかへ向かうらしいとアンガスがコッソリ教えてくれている。

俺もこれ以上、かわいい……かわいくも無いが、弟を巻き込みたくないしな。

この兄弟コンビも、ここで一旦解消ってことだ。

元気でいろよ。ジーサード。

どうも日本でリサがパトラに喋ったらしく、『クロメーテルはケチ』というキャラ設定まで知っていたジーサード&アンガスは……イージージェットとかいう格安航空のコードシェア便でロンドンまでのチケットを取っていた。

この航空会社では全席自由席だという事を知らなかったクロメーテルさんは、我先にと乗り込む他の乗客にいい席をみんな取られて最後尾の狭いシートにご搭乗。隣には巨漢のカナダ人男性が座ってナンパのつもりなのかしつこく話しかけてくるし、喉が渇いたんで機内でお水をいただいたらこれが有料で2ドル取られたし。なんなのかしらもう。

だが決死の変装は功を奏し、ロンドン・スタンステッド空港の入国審査はスルッと通過できた。
『口がきけません筆談でお願いします』と書いたメモ紙をおずおずと見せたら、入国管理官のお兄さんも目をハートにしてOKしてくれちゃったし。
引き渡し場所で回収した武器弾薬入りキャリーバッグを引きつつ、黒いロングコートとロシア帽を身につけた、まさに黒髪のメーテルといった姿で歩いてると……女優か何かと間違えられ、白人たちから憧れの視線が突き刺さって辛い。遠山キンジだと『ネクラ』『昼行灯』と蔑まれるのに、クロメーテルだと絶世の美女扱いされるのはなぜだ。ああ、またケータイで写真撮られた。おやめになって。
俺は兄さんと同じ系統の、ヘンな属性が覚醒する前にと
割と混雑しているこのイナカの空港内で、速攻着替えた。誰にも見られんタイミングを図って、男子トイレに駆け込んでな。何でこんな思いをせにゃならんのか。
ヅラやらブーツやらをゴミ箱に押し込んでいると、ポケットのO2とかいうイギリスの通信会社の電波を掴んだらしい携帯から――松方弘樹・『華のうちに』のイントロが。電話だ。
国番号は＋44――イギリス国内から。ここのデジタル回線は堅牢らしいので、
「――アリアか？」
と、電話に出ると。
『ボクだよ』
ワトソンだ。

「なんだ、ワトソンか。お前もイギリスにいるのか？」
『なんだとはご挨拶だね。このまま帰っちゃおうかな？』
というセリフに続けて、パパンッ。
通話越しにクラクション音を鳴らしてきた。車で出迎えてくれたって意味か。
電話で言われるままに、けっこう何もない空港から広い車寄せに出ると――
その片隅に停めたオープンカーに寄りかかる、ダークブルーのスーツを着たワトソンがウィンクしてきた。
こっちは女に化けてた男で、そっちは男に化けてる女。イヤなシャッフル感だなこれ。
「また911か。好きだなーポルシェ。ライトがカエルの目玉みたいなのに」
「そこがカワイイんじゃないか。トオヤマはセンスがないなあ」
愛車をディスられたワトソンは鳴くときのカエルみたいにほっぺを膨らましたが、俺と無事に合流できて、安心といった感じだ。
「なんか混んでたぞ、空港」
「ああ、ちょっとアンラッキーだったね。近々、ロンドン市内で気球競技バルーンの世界大会が開かれるから、混雑してるんだよ。関係者が続々と入国中なんだ」
そんなヨタ話をしつつ、ワトソンの運転で高速を行く道すがら……俺がここに来る事になる前から、アリアがワトソンに救援を求めていた話を聞かせてもらった。
俺がアメリカでジーサードやレキに力を借りてたのと同じ感じだ。

どうやら……メヌエットの件も、簡単には進んでないみたいだな。

とはいえ、ワトソンはイギリス出身。人選としてはベストだ。極東戦役の関係者に協力させるとはいえ、メヌエットと話すという穏健な行為は休戦破りに該当しないだろうしな。

「ヘルプを呼んだって事は、アリアは上手くやれてないってことか」

「僕も着いたばかりなんだけど、そうらしい。まだメヌエットに会えてもいないみたいだ。その前に、厄介事に巻き込まれたみたいで……」

「何やってんだよアリアは。多少時間に余裕があるからって、グズグズして……で、そのアリアは今どこにいるんだ」

「えーっと……ちょっと、捕まっちゃったんだよ。逮捕されたワケじゃないんだけど」

「誰にだよ。アリアを捕まえて閉じ込めておけるんなら、ぜひやり方を教えてもらいたい。俺の安全保障上の理由で」

「えーっと。それが……」

「病院か？」

アリアの鬼化がバレて、新種の人間としてどこかの研究所にでも捕まったんだろうか？と、ちょっと心配だった俺がそこを探るが、

「いや、違う」

ワトソンはシナモンっぽい香りをさせて、ショートカットの頭を横に振った。

「って事は、MI6（エムアイシックス）イギリス情報局秘密情報部か。ヤツらとは東京で一戦交えちまってるか

らな。アリアを問答無用でしょっぴけるレベルとなると、００シリーズが出たか。お前が前に言ってた、ジェー……」

「――よせ、トオヤマっ！」

言いかけた俺のセリフを、ワトソンが血相を変えて遮ってくる。

「ここは日本じゃない。イギリス国内でその名前を出すな。発言するだけで危険だぞッ。特に、キミは」

ワトソンがハンドルから片手を離してまで、マジで俺の口を押さえたので……

俺も、ここは黙る。

「彼らはマーダー・ライセンス――『殺しの許可証』を持ってるんだ。国防上・外事上でイギリスに害をなすと見なした非イギリス人を、自らの判断でいつでも自由に殺害できる。そしてキミはここでは外人だ。言難癖を付ければ、いつでも彼らはキミを殺せるんだよ。法的にも、そして言いたくはないが……戦力的にも。『俺のフルネームを言ったから』という理由でキミを殺したっていいんだ。彼らはそれができる、超人の中の超人たちなんだ。そこのリスク管理は、キミ自身がしっかりしろ」

一度はヒステリア・ベルセの俺とガチで渡り合った、ワトソンに……

そこまでマジ顔で言わせる、存在か。ＭＩ６の特戦隊・００シリーズは。

ウワサじゃ聞いてたが、ヤツらが世界最強の諜報員たちって話はガチみたいだな。

それにワトソンの言う通り、ここは日本じゃない。我が国じゃ通用しない慣習や法律がまかり通

る、外国なんだ。海外慣れしてきたつもりで、俺にも油断があったかもしれん。
何事も、慣れてきた頃が一番危ないもんだからな。用心しとこう。
（しかし、アリアを捕まえた相手ってのは……）
なんか今のでウヤムヤになっちまったが、ワトソンの口ぶりからするとＭＩ６でもないみたいだ。一体、何者なんだろう。
……イヤな予感がするぜ、今回も。

北側からロンドン市内に入ると、ワトソンはグローブナー・ロードという瀟洒な通りにポルシェを停めた。
ロンドンはパリやニューヨークよりは清潔で、伝統的なヨーロッパ風の建物と現代的なビルがバランス良く建ち並ぶ街だ。
車道は日本と同じ左側通行で、ワトソンと横断歩道を渡った時の不安感も少なかった。
晴天にも恵まれて、この街の第一印象は悪くない感じだ。
ワトソンは、通りを左に折れた所にあったアリア・ガーデンズ――中規模な公園に俺を連れ込むと、バラやクチナシの花園を眺められるベンチでランチを振る舞ってくれた。
バスケットに詰めたイギリス発祥の軽食・手作りサンドイッチと、魔法瓶に入れた紅茶だ。日に日に女子力が上がってんなコイツ。
「……ありがとう。しかし手入れの行き届いた、キレイな公園だな。天気もいいし、いい気分だ

よ。しかし名前が良くないなぁ、アリア・ガーデンズって」
俺が温かいアッサムティーを飲みつつ苦笑すると、
「そこはしょうがないよ。アリアが所有してる公園だから」
ワトソンがそんな事を言うもんだから、俺は盛大に茶を吹いてしまう。
「あっ、あいつ……公園持ってんのかよっ」
「ロンドン市内には1つだけどね。時刻によってはこうやって市民に開放してるんだ」
すげー。アリアすげー。
というか『公園』を『持つ』という感覚が俺にはもう分からん。
「どんだけ金持ちなんだよ、ホームズ家……」
「いや、こんなものはアリアが将来相続すべき財産から見たらアメ玉みたいなものだよ。正当な跡継ぎとして認められれば、ロンドンに複数の不動産と、リッチモンドには邸宅をもらえて、いま持っているダートムアの領地が広がり、そこの城も持つ事になる」
……邸宅。領地。城。占い少女マンガに描かれた夢物語の世界だな。
だがワトソンはふざけてたり茶化したりしてるムードじゃない。
イギリスはそういった中世の価値観をまだ捨てきってない、伝統を守る文化の国なんだ。
だが、それは危うい。キミもアリアから少し聞いてると思うが、ホームズ家はアリアを正当な後継者としてまだ認めていないんだ。初代シャーロック・ホームズ卿が後世で探偵としてばかり語られるせいで、ホームズ家は伝統ある探偵業の大家として信用されている。だから、アリアが後継者

になると……その伝統と信用が破壊されてしまうんじゃないかと危惧する、『探偵派』がホームズ家の関係者の大勢を占めているんだ。探偵派はアリアの異母妹で推理の天才児・メヌエットを担いで、彼女に跡を継がせようとしてる」

なるほど……そいつは、伝統文化を守るイギリス人らしい動きだな。

そして実際アリアは武力にステータス全振りしてるんで、あれが跡を継いだら探偵業の老舗・ホームズ家は実際に業態を変えなきゃならなくなるんだろう。さもありなんな話だ。

「日本人のキミに気を悪くして欲しくないんだが、アリアには日本人の血が4分の3流れてる。そこをイヤがる人もいてね。メヌエットは母親がイギリス人だから、4分の1だ」

ふーん。このグローバル化する世界で、まだそんな保守的なこと言ってんのかこの国は。

俺なんて弟と妹がアメリカ人で姉がエジプト人、兄は性別すら最近ちょっと分からなくなってきてるんだぞ？

「だが、時代は革新していくものだ。アリアを正当な後継者とし、ホームズ家も変わっていくべきだという『武偵派』も少数だがいる。ボクもそれには賛同するし、キミもそうであって欲しいと思う」

チーズサンドを手に、ワトソンが俺に上目遣いで言ってくるので……

「俺も保守的なのかもしれんが、跡目は長女が継いだ方が面倒が無いと思うぜ」

ハムサンドを頬張りながら、一応の同意はしておいた。

ていうか……アリアめ。『あたしはホームズ家では「いないもの」扱いされてる』とか、悲劇の

ヒロイン気取ってたくせに。公園やら土地やらもらってんじゃねーかよ。庶民から見りゃ いないもの扱い」どころか超お嬢様だよ。

でも、まあ……それでも、貴族的にはキツイ立場に置かれてるって話なんだろうな。

その辺も、庶民の尺度で測っちゃいけないって事だ。

「ところで、メヌエットってのはどういう子なんだ？」

少し話を逸らす感じで、俺が尋ねると……

「ボクも会ってもらえてないんだが、調査はしたよ。とにかく頭が切れる推理の天才児で、シャーロック・ホームズの再来とも言われている。物静かで品があり、愛らしく、王族や各地の貴族の信頼も厚い」

「頭が良くて、おとなしくて、上品、か。アリアとは正反対だな」

と言ってしまってから、これを聞かれてたらＭＩ６より先にアリアに殺されると思って周囲を見回す俺に……

「逆を言えば、アリアほど元気いっぱいな子じゃないって事だよ。それで探偵派の人々も、万一メヌエットの健康に何かあった時はアリアを担ぎ直そうと考えてる。だからアリアは何をやっても正式に義絶される事がないんだ」

ワトソンがそんな話をしてくれた辺りで、ようやく空気が読めてきた。

貴族の『家』とは、高いブランド価値・莫大な資産・不動産を有する――会社みたいなものなんだ。そのビジネス上の関係者や被雇用者……社員たちにとっては、社の、つまり家の存続が大事。

ホームズ家に潰れてほしくないんだ。
だから重役たち――血族個々人の幸せより、どう家を存続させるかを考える。さしずめホームズ家の跡目争いは、アリア専務とメヌエット常務の派閥争いってとこだ。現当主の存在が雲の上にあって見えないのも、一流会社の社長と同じだな。
「メヌエットは貴族としての品位を守る子でもあって、人と軽々しくは会わない。まさに深窓の令嬢だよ」
「話を聞くどころか、会うのも難しい子か……」
「いや、でも――キミになら会ってくれるかもしれない」
ワトソンがそんな事を言うので、俺が「？」という顔をすると……
「家の事情はさておき、メヌエットは個人的にアリアが大好きらしいんだ。アリアに関連する事には何でも興味があるから、お姉さんの相棒とあれば会ってくれるかもしれない。とはいえ彼女はアリアのような破天荒なタイプでも、ボクのように平民のような仮の姿を持つタイプでもない。正真正銘の貴族だ。キミでもきっと、お目通りがかなうまで時間がかかる。手続きはボクがするから、キミはしばらく待っててくれ」
「分かった。この件も一筋縄じゃいかなさそうだし、待つ問、俺は少しロンドンに慣れておくよ。香港やオランダじゃ、街に不慣れで痛い目を見たからな」
実際、アリアの祖国・イギリスだって――
この目で見るまで、みんなシルクハットにステッキとか、そういうイメージだったしな。

だが見回せば、フランスやベルギーやオランダと同じ『現代のヨーロッパの国』だ。
ワトソンが前に言ってた通り、ヨーロッパにおける『国』は、日本における『県』……とは言わないまでも、関東とか東海とか関西とかの『地方』ぐらいの差異しかない。
しかしその文化は微妙に違うわけだし、油断してると足下を掬われる事は修学旅行IIやその追試で勉強済みだ。
と、ちょっとした留学気分になった俺に……
「えーっと、じゃあそろそろ行こう。その、アリアに会いに。きちんと会えるかどうかは分からないけど、行くだけ行ってみよう。ただ、会えても、取り乱してはいけないよ？」
奥歯に物が挟まったような感じで、ワトソンが言ってきた。
「？」
「キミは……前に似たシチュエーションになった時、別人のように怖くなってボクを攻め立てたからね。ただ、今回それは封印しなければいけない。絶対に」
ワトソンを、攻め立てた……？
スカイツリーでの、ヒステリア・ベルセの事を言ってるのか？
なんだ。今度こそ本格的にイヤな予感がしてきたな。
その後、ワトソンが時計をチラチラ見ながらポルシェで俺を運んだ場所は……
映画や写真なんかじゃお馴染みの観光名所――バッキンガム宮殿の前だった。

そこはエリザベス女王の住まうガチの王宮で、例の黒くて長いフカフカの帽子を被った近衛兵が銃剣付き突撃銃を捧げて周囲を守ってる。

ワトソン曰く、宮殿の敷地面積は3万㎡以上。王族が居るだけでなくスタッフも数百名住み込みで働くため、部屋数は775もある。そこに舞踏会場、音楽堂、美術館、図書館まで揃ってるというからもう何が何やらだ。

金の穂をつけた槍みたいな鉄柵の向こうに広がる庭園は、完璧に手入れされた美しさを誇っている。美意識のあまりない俺でも絵ハガキが欲しくなっちゃうレベルだ。さすがは世界有数の王宮。他の建物とは格が違うぜ。

俺は日本人の習性通り、携帯で写真を撮った後……

「おいワトソン。観光させてくれるのは上地勘も掴めてありがたいんだが、俺はアリアに会って話したい事があるんだ。どこに捕まったのか知らんが、とにかく会わせてくれよ」

さっきからするイヤな予感にせき立てられるように、そう言う。するとワトソンは、

「だから宮殿に来たんだ。トオヤマ、キミはアリアにもう会えない。だが非公式にここですれ違う事はできるかもしれないんだ。公務予定表を調べて、帰ってくる頃を見計らった。きっと、もうすぐ……」

「何なんだよ、お前。さっきから引っ張りやがって。そろそろオチを言えよ。大爆笑してやるから。知ってるんなら早く教えろ。アリアはどこにいる」

「今アリアは普段、ここにいる」

と――

ワトソンが指さしたのは、バッキンガム宮殿。

王宮だ。

「は？」

「その……アリアとキミの関係を考えると、とてもキミには言いづらい事なんだが……」

「分かった。分かった。ワトソン。お前は面白いヤツだよ。よし、じゃあ会いにいくぞ」

答えを言わないワトソンへの当てつけ気味に、半ギレの俺はふざけて王宮の鉄柵に歩み寄る。そしてそこを乗り越えるフリをしようと、柵に手足を掛けた瞬間――

ピリイィィィィィ――ッ！　と、ホイッスルの音が鳴り響いた。

「……っ……!?」

近衛兵の1人が鳴らしたその音で、衛兵たちが血相を変えてワラワラと集まってくる。

そしていきなり、1人が俺の首根っこを掴んで柵から引きずり降ろした。ほぼ同時に、2、3人が――いや、10人近くが、L85の銃床で俺をメッタ打ちにしてきたぞ……！

「トオヤマ！」

「うおッ……！」

反撃しようにも、ここで銃を抜いたらマジで殺される事が分かる。この兵士たちは――本物の殺気を持って、俺を攻撃している！

それを証明するかのように、何人かが俺の頭にL85の銃口を向けてきた。

しくじった。観光地化してるからって、やっちまった。

マジで殴られてから分かったが、ここは日本で言えば皇居。その中に冗談とはいえ侵入するような動きを見せた俺に、近衛兵たちは情け容赦をしないんだ。

コスプレみたいな格好をしてるからって、油断した。こいつらは日本で言うところの、皇宮警察。選りすぐりのエリート兵士たちなんだ。

仮に1対1だったとしても、ヒステリアモードでもない俺が勝てる相手じゃない。

そいつらが、10人がかりで俺に集中攻撃を加える所に――ワトソンが、

「よさないか！　彼は無知な外人で、ここがどこか知らなかっただけだ！　ただ、美しいから入ってみたかっただけなんだ！　友人のボクから、厳しく言い聞かせておくから！　殺すなッ！」

と、衛兵たちへ英語で叫びながら割って入ってくれている。

おかげでメッタ打ちは止んでくれたが、ボロ雑巾みたいに踏みつけられ、銃を突きつけられている俺の視界……その、すぐそばに……

ゆっくりと、金色のホイールが――

空色をした、台の車が、停車した。

イギリスの最高級車、ベントレー・アルナージだ。

車がそこで停まった事に驚いた衛兵たちは、お互いテンパった顔を見合わせてから……次々と、打ち倒した俺から足や銃床を外した。

そして揃って、大慌てで車に向かって最敬礼の姿勢を取る。

ワトソンも慌てた様子になって車に向き直り、胸に手をあてて頭を垂れた。
（何だ……誰、が……乗っている……？）
頭から流血して朦朧とする俺が、這うような姿勢のままでいると
衛兵の1人が俺の髪を掴んで引き起こし、跪くような姿勢を強要してくる。
そこから立ち上がろうとすると、俺の隣で跪いていたワトソンが制止してくる。
「とッ、トオヤマ！　跪いた姿勢を崩すなっ。顔を下げろっ。こ、この御料車は」
という、ワトソンの言葉の途中で……
車のドアが、かちゃッ、と開く。
風に乗ったクチナシの香りと共に、そこから出てきたのは、
（ア……アリア……？）
金光りするサテンのドレスを着て、似合わないヒールを履いた
アリア、だ。
「――キンジ!?」
赤紫色の瞳をまん丸に見開いてアニメ声を上げたアリアは、衛兵お構いなしで俺に肩を貸してくる。
「……アリア……お前……そんなもん着て、何、やってんだよ……」
「あんたこそ何やってんのよ、こんな所でっ……！　その、あたしは、その……ちょっと複雑な事になっちゃってるのよ、今……っ」

タコ殴りにされてタコみたいになった俺の顔面から、アリアはシルクのハンカチで血を拭う。

その向こう、ベントレーの車内から――

白いスーツを着こなし、空色のマフラーを軽く掛けた男が現れた。

キリスト教の宗教画に描かれていそうなほどの、見事な金髪碧眼。真っ白な肌。体格は良く、姿勢は正しく、普段から胸を張り肩で風を切って歩いている男だと分かる。

アリアが複雑な表情で見上げたその男に、

「誰だ、お前……」

俺は、そう呟く。すると、

「とっとっトオヤマ！　早く頭を下げるんだ！　こ、この御方は――クリーヴランド公・ハワード王子であらせられるんだぞっ！」

ワトソンが声を震わせながら、キャンキャン耳元で怒鳴ってきた。

……お、王子……？

「良い、良い。立て、ワトソン卿」

爽やかな笑顔で、歯並びのいい口元を見せた――ハワード王子……は、

「余はコーンウォール公やケンブリッジ公と違って、外国のメディアに映る事は希であるからな。遠い国の平民が知らぬのも無理はなかろうし、知られておらぬ方が気楽で良い。お前たちも、やりすぎてはならんぞ。おお、我が国を仰ぎ見に来た大切な観光客が、血と砂で汚れておるではないか」

そう言って、近衛兵たちにチッチッと指を振って見せている。
ちょっと叱られただけで、衛兵たちは真っ青。俺を引き起こして、体から砂を払うわ、血をチーフで拭くわ、さっきとは180度手のひらを返しやがった。
だが、ってことは、どうやら……
マジらしいな。こいつ、イギリスのE子様か。
若い。俺よりは年上みたいだが、大差無い歳だ。二十歳前だな。
「お前が、アリアの話にあったキンジか。改めて自己紹介しておこう。余は、イギリスである」
俺の肩を軽く叩こうとして、汚いからやめたという感じのE子の発言は
ジョークめかしていつつも、あながちジョークではない感じだ。
かつてアトラスが自分を『アメリカ(I'm USA)である』と名乗ったように、たとえばアメリカは米国民の国
だが――ここは正式名称はさておき、イギリスE・国。E家の国、なのだから。
「ふむ。日本でアリアと共に戦った男と聞き、もっと強い男を想像していたがな」
「アリア……E子、あんたが何でアリアと一緒にいるんだ」
ようやく立たせてもらえた俺が、殴られた腹を押さえながら言う。
するとE子はそれには答えず、
「汚いアメリカ英語だ」
と、俺の英語を鼻で笑ってきた。
すぐにはそれに怒れないほどに、E子の英語は俺の耳でも分かるほどキレイなイギリス英語。当

たり前だが訛りが全くない。

一方、俺の英語は『猾経』で覚えたハリウッド映画の俗な米語だ。ぐうの音も出ん。

「記念に握手でもしておきたい所だが、余は雑菌だらけの手とは握手せぬ。いずれ、国を背負って立つ大事な身なのでな。ああ、あまり寄るでない。汚れる」

初っぱなから、妙に俺に対してイヤミというかヘンな、対抗意識みたいなものを感じるぞ？　なんだよコイツ。

苛立つ俺から離れたかったのか、王子は車の方に戻っていく。

そしてベントレーに肘をついて、こっちを悠々と眺めてる。

その場に残されたアリアは、やや早口に日本語で……

「キンジ。あたしは緋緋色金の事を忘れたワケじゃないからね。自分の事だし、あんたも、生懸命やってくれてるんだもの」

「じゃあ、なんであんなヤツとドライブしてんだよっ。メヌエットの件はどうした」

俺が生来悪い目つきをより悪くして睨むと、アリアは「それは、その」と口ごもり……

ワトソンが日本語で、代わりに話してくる。

「トオヤマ。アリアはイギリスに帰国した日、ロンドン警視庁に歓迎を受けたんだ。そこに公務で偶然いらしていたハワード王子が個人的な問題で困っているアリアに、御力を貸して下さると仰った。詳細は話せないと言ったアリアに、王子は……それならご自身のお抱えとして、Rランク武偵の位を与えようとのご案を下さったんだ」

Rランク武偵――Royal Eの、武偵。

それは世界に7人しかいない、国家元首クラスの人物のお抱え武偵の事だ。

その地位は武偵業界で最高位とされるSランクよりも上の、超最高位で……

「アリア、キミはそのままハワード王子の所へ戻れっ。Rランク武偵になれば、超法規の特権が与えられる。足飛びに日本政府に働きかけて、母上を釈放だってさせられるかもしれない。色金に対しても、気に解決へ向けた動きを取れる。彼の不興を買うな、早く戻るんだっ」

ワトソンが捲し立てた通り、こいつは……

アリアがアリアなりにイギリスで掴んでた、大チャンスってワケか。

世界最高クラスの権力者の力を借りて、困難な状況から、気に大逆転を図る。ほんとにアリアは俺の想像を超えた動きをしやがるな、いつも。

「あ、あたしも最初はそう思ってたんだけど……なんか、Rランクの話まではともかく、その後ちょっとおかしな流れになってるのよ。今」

「なんとなくボクにも分かってる。だがそこはのらりくらりと躱せ。トオヤマは感づいてないみたいだが、ボクから話しておくから」

「ワトソンあんたねぇ、人ごとだからって――ああもうっ。キンジ。あたしもサボってたワケじゃないんだからね！　この話と同時進行で、メヌエットにはコンタクトをしたわ。アンジェに会ってもらったのよ」

ちっこい肩に花飾りを乗っけたアリアは、ワトソンと俺を見回しながら説明を急ぐ。

「アンジェって誰だよ」

「アンジェリカ・スター。ロンドン武偵高時代の、あたしの戦姉よ。でも、メヌエットと話した翌日から行方不明になっちゃったみたいなの」

アリアが頼りにしていた、Sランクの戦姉を……

喋っただけで、消し去ったのか。メヌエットは。

アリアが東京で言ってたが、メヌエットは高度な教唆術を持っている。人に話すだけで、相手の思考や行動を操れるのだ。

アンジェリカはメヌエットに気に入られず、それで思考をイジられて追い払われたんだ。

「アリア。アンジェリカはリバティー・メイソンが総力で探し、さっき見つけたところだ。アイスランドの危険な間欠泉に潜り込んで粘土を掘っては、熱水に天高く吹き上げられて落ちてくるのを繰り返しているらしい。『ここに眠るダイヤモンドは私のものだ！』とか言ってて、誰が止めても言うことを聞かないみたいなんだ」

何やってんだ、アンジェリカさんも。

戦姉妹は似るっていうが、バカなところは似てるとして、キンジ。この国の事を知らないあんたに教えておくわ。イギリスじゃ、王家・貴族家は全部まとめて世界最大のグループ企業みたいなもの。王子は本社の御曹司で、あたしはちっぽけな支社長の娘。王家に、貴族家は逆らえないのよ」

戦姉をアッサリ見捨てたアリアは、さっきの俺の見立てと似たようなたとえ話で状況を説明してくれる。

辞書の『天上天下唯我独尊』の項目に『アリアの事。』と載ってそうなアリアも、階級社会の国・イギリスでは――身分ってものに、逆らえないって事か。

「余は日本語を介さぬ！　以降、英語で喋れ！」

車の方から、ハワード王子が言ってきて……

「大方、余とアリアの事を話しておるのだろう。キンジ。同じ女を愛した男のよしみで、貴様に教えておいてやる。余は、アリアに――Rランク武偵としてキャリアを積ませた後、ゆくゆくは妻にするつもりでおる」

ハワード王子の発言に、ぱひゅんっ！　とツインテールを広げてビビったアリアは……

「……っ……っ……！」

王子より先に、俺の顔色を窺ってきてる。

「爵位にはやや優れぬ女だが、Rランクにして武勲を上げさせれば――周囲も納得しよう。しばらくは、体面作りだ。王家では何より、体面が大事なのでな」

今のアリアの動きが気にくわなかったのか、王子は追い打ちをかけるように言ってくる。

俺とアリアの関係について、部誤解があったようにも思えるが、なるほどな。

それで、ハワードは最初から俺を憎んでたってワケか。

（ハワードは……アリアに、目惚れしたんだな。奇特なヤツだぜ）

アリアは　見た目だけは、お人形さんみたいで可愛いからな。
それだけで気に入っちゃったんだろう。
だが王子、こんなのと結婚したら人生の墓場だぞ。世間知らずめ。
それも比喩じゃなく、リアルに墓場送りにされるんだ。
「なお、この件はホームズ家も賛成しておる。余からは以上だ。来い、アリア」
もうハワードは、アリアは自分の手駒だと言わんばかりの口ぶり。
コイツは何でも、たとえ人の相棒でも、気に入ったら横取りするそれが当たり前の人生を送ってきたんだろう。
王族っつったら、もう上には誰もいない権力者の中の権力者なんだからな。
だがそんなハワード王子に、
「あ、あのっ！」
やっとアリアは振り返って、でも俺の方をキョロキョロ見てきたりしてる。
なんだよ。
もう俺みたいな庶民で外人の、高校生とは関係無いレベルの話だろ。そんな、お前らの貴族社会がどうのこうの、結婚がどうのこうのとかいう話は。
「そこについてはそのっ。先般も申し上げました通り、あたしには婚約者がっ……」
出た。アリアの婚約者。そういや、いるらしいんだよな。ワトソンとの会話を盗聴した時に聞いたっきりだったけど。

チビで貧乳の分際で、アリアはアリアで実はモテモテじゃねーか。
なんか……そう思うと、無性に腹が立ってきたな。
別に何にってわけじゃないが、何か、何でもいいから八つ当たりしたい気分だぜ。
「その婚約は破棄せよ」
ナルシスト気味に車のバックミラーで髪型とタイをチェックしながら、ハワード王子は何でもない事のようにサラッと言う。まあそう来るだろうね。アイツの性格上。
すると、アリアは
ここでまた、俺方向への謎の振り向き。『ちょっとあんたも何か言いなさいよ！』的な目で睨んできた。
ほー。婚約破棄命令が気に入らなくて、俺に八つ当たりの先手を打ってきましたか。
じゃあ買ってやるよ。そのケンカ。
「いいじゃねーか。そんな婚約、破棄しちまえよ」
と、やたら虫の居所が悪くなっていた俺がアリアに口を尖らせて言うと……
アリアは、ガーン……！
と、音が聞こえてきそうなぐらいショックを受けた顔をした。
そこも、なんでだよ。余計腹立つな。
続けて、ぶわあぁぁ。
と、一気に両の瞳に涙を浮かべたアリアに

瞬こ(しゅん)れもよく分からない罪悪感を感じたが、知った事か。

「王子サマと結婚(けっこん)できりゃ、お前はお姫様(ひめさま)なんだろ？　玉(たま)の輿(こし)だ。よかったな！」

なんか口をつくままに、俺はアリアに変なキレ方をしてしまう。

すると、この世のオワリみたいな顔をしたアリアは、両手で顔を覆(おお)って泣き出しそうに……なり、しかし持ち前のプライドでそれを堪(こら)えた。

そして――キッ、と俺を涙ぐんだまま睨んできて、
「へー。あんたはそれでいいんだ」
俺と同じようにイヤな言い方をし、すたすたっ！
ハワードのベントレーに駆け込んで、ばんっ！　と、ドアを閉ざしてしまうのだった。
衛兵に殴る蹴るされたダメージは、まあ中程度の藺豹のシゴキってとこだ。
あちこちズキズキ痛むが、それよりも……何だか分からん胸の痛み？　の方が大きい。
あと……
俺より、後輩の方が上手くやってたな。バッキンガム宮殿への侵入。そこの負けた感も小さくないぞ。
というのは、衛兵に倒されて這ってた俺には見えてたのだ。
ベントレーの車体下に、アリアの戦妹の強襲科1年・問宮あかりが張り付いてたのが。
あれは公儀隠密・問宮林蔵――平たく言えば、オフィシャル忍者の末裔らしいからな。そういうのが得意なのかもしれん。
詳しい心情は知らないし知りたくもないが、アリアを異常に慕う問宮は……ハワードを悪い虫と見做してか、今にも殺しそうな顔をしてた。まさかマジで殺りはしないと思うが、とりあえずアリアの番犬ぐらいにはなるだろう。だからもう俺は放っておくぜ。この件。
アリアは……

王家に入れば、諸々の事件が解決できるだけじゃない。自分をのけ者にしてきた実家も見返してやれるだろう。あんなちっぽけな公園なんかじゃなくて、ややもするとイギリス、国が手に入る。

帰りのポルシェ内でワトソンに聞いたところによると、ハワードE子はイギリスのE位継承権の順位で8位。彼より高齢のE子が多い中、将来的にはありえるのだ。あれがEになって、アリアが王妃、ヘタしたら女王になる事も。イギリス終わったな。

E子は……性格はともかく外見はカッコいいし、スポーツマンで、イギリスの全女子が憧れるモテ男らしい。E家の義務・兵役も完了済みで、陸軍の爆弾処理班をやってたんだとよ。だがあの潔癖症な男が本当にそんな仕事をしてたかは疑わしいとこだね。

「……トオヤマ。辛いかもしれないが、今は静観するんだ。ボクもメヌエットの件は継続して働きかけるが、うまくすればそこだってE権で何とかしてもらえるかもしれない」

なんだか俺を慰めるようなワトソンの口調にすら、なんでか俺は無性に腹が立つ。

「辛いとかそういうんじゃない。俺は……」

クソッ。なんでこんなにイライラするんだ。天気が悪くなってきたせいか？

「そんな、そんな辛そうな顔をしないでくれ。ボクたち貴族は、E族に逆らえないんだ」

今度は同情するような声で言ってくるので、

「――違うっつってんだろ！」

俺は何の罪も無いワトソンにまで、八つ当たり気味に怒鳴ってしまう。

そして小雨が降ってきた、ピカデリー・サーカス駅そばの信号で……

「もういい。ここで降ろせ。俺はこの辺に泊まるから、メヌエットの件で動きがあったら連絡しろ」

俺は一時停車したポルシェのドアを勝手に開けて、傘も無く道に降りた。

そして振り返らず、何か半ベソで言ってくるワトソンの声には耳を貸さず、追われないようにと細い小道へ駆け込む。

何も言うな。何も言わなくていいんだ、ワトソン。

俺は見ないようにしてきた。自分の本心を。

やむをえず強敵に正対し、立ち向かい、戦ったことは何度もあるが……

アリアへの自分の本心と向き合うことからは、逃げてきたんだ。

それは体質上の理由もあるし、何より、頭で理解できているから。

去年の香港では強がってみたものの、ここロンドンで改めて分かった。身分ある立場のお前たちの苦しみも、立場も。それが、銃を振り回す事しか芸のない高校生の俺にはどうしようもない事だって事も。

だから、もう何も言わなくていいんだ。俺の本心なんか、俺に見せようとしなくていい。

俺は今まで通り、それを避けて生きるから。見ないようにして、避けて、耐えて生きるから。大なり小なり、誰にだってそういうものはあるだろ？

俺の場合は、それがアリア。あいつだったって事。それだけなんだよ。

この国の雨は、日本のようにザッと降るのではなくソボソボ霧のように降る。
なので傘もなく歩けはしたが、気がついたら服が雨水を吸って重くなっていた。馴染めそうにないな、この気候には。
俺がワトソンと離れたのは――
当局から姿をくらますため、でもあった。
ワトソンはリバティー・メイソンと繋がってる。そのそばに長期にわたって身を寄せていると、ワトソンに悪気がなくても俺の所在がロンドン警視庁に漏れる懸念もある。
奴らは、自分たちの有能なエージェント・アリアが日本に行ったきりになった原因こと俺を目のカタキにしてるからな。
しかも俺はこの国に正式に入国してないんだ。見つかったら面倒なことになる。
というわけで、俺は携帯の宿泊予約サイトで敢えて評判の悪いボロ宿――潰れそうな、誰でもいいから泊まってほしそうな宿泊所を検索する。
で、さすが大都会ロンドン、おあつらえ向きの宿はすぐ見つかった。
マーシャルトン・ロードという治安が微妙な地域で中国人のオッサンが経営してた大型アパートの10階、いわゆる屋根裏部屋だ。
日本より緯度が高いから、冬の夕方5時には真っ暗になるロンドンを歩いて渡り……
俺はエレベーターも無いその宿に着き、でっぷり太ってハゲたオッサンの案内で階段を上がらされる。

「アンタ、アメリカ人？　ずいぶんズブ濡れで来たね。ノラ犬みたいだ」
「ほっとけ。俺は国籍は教えんしパスポートも見せん。1週間ほどジャマするからな」
「ほっといてやるから、じゃあ700ポンド出しな」
700ポンド……10万円？
ユーロ建ての奨学金を空港のATMで下ろしてきてはあったが、高くないか？
「おい。確かに俺はワケありの客だが、ふっかけたら弾くぞ」
郷に入りては郷に従えで、俺は拳銃をチラつかせて凄むが――中国人は度胸がある国民性。しかもマフィアが多いこの地域に住んでいるオッサンは銃なんか見慣れてるらしく、ビビらない。
むしろ俺を嘲笑って、
「分かった、日本のヤクザだなあんた。じゃあイナカ者丸出しのあんたに教えてやるが、今ポンドは高いんだよ。疑うんなら今日の為替レートを携帯で見てみな」
そんな事を言ってくるもんだから、携帯で確かめてみると……確かに、対ユーロ価格も高騰してやがる。ツイてないな。
「シャープの携帯だ。やっぱり日本人だな。だが私が良心的だと分かったろう？」
「分かった、分かった。払うよ。ただし通報したら殺す。ヤクザを舐めんなよ」
武偵とヤクザは紙一重なので、もう俺はその体で喋りつつ――
サイフからポンド紙幣をガサガサ出して、オッサンの太った腹に押しつける。
オッサンは「もうちょっと都会的な英語を喋りな。アンタの米語、私よりヒドイよ」とさっきも

言われたような事を言い残し、俺にカギを渡すと階下へ去って行った。なるほど、それで俺を最初アメリカ人と思ったワケか。

カギが壊れてて開閉にも苦労したドアの向こう、狭い屋根裏部屋は……

ボイラー室の真っ隣。冬なのにクソ暑い。

だが窓を開けると雨が入ってくる。参ったな。

それと腹が減った。ので、俺はこのアパートの1階にあった雑貨店で……どれもこれも高い食料品の中から、ミルクとシリアルを買った。屋根裏部屋の棚にあった食器でそれを食うんだが、マズイな。なんか紙みたいな味がするんですけどコレ。

30℃はある部屋なので、パンツ一丁になって服を乾かしてたら――

携帯にメールが来た。だが携帯アドレス宛じゃなく、武偵高の校内ネットに公開されてあるメアド宛のものが転送されて来たようだ。

不審に思って見てみると、送信者はmamiyaakari@……問宮あかりだ。

『さっき見つかってたようなので報告です。アリア先輩が王子を警護する勤務時間は17時までです。今は王侯貴族と晩餐会の模様です。その後は宮殿を離れてサヴォイ・ホテルに宿泊するようです。ハワードは女性に関しても潔癖症みたいです。そこは、安心です』

文章ヘタだなーコイツ。

言葉足らずで、何が言いたいのかよく分からんのだが……

どうも、俺にアリア監視の連携を呼びかけてるみたいだな。

だがアリアがどこにいようと、それはアリアのプライベートな事だ。俺には関係ないね。
何がどう、安心なのか俺には想像もつかんが、とりあえずアリア・ストーカーの問宮が王子を殺したりする流れにはならなさそうだから、俺的にはそこが、安心だ。
しかし、アリア様はあの煌びやかな宮殿で晩餐会ですか。どうりでキラキラのドレスをお召しになってたワケだよ。こっちがパンツ一丁で、屋根裏部屋で、紙味のシリアル食ってんのに。ケッ。
（わざわざアメリカから飛んできてやったってのに、腹立つなぁ……）
腹が立つ。腹は立つ、が……
とはいえ、俺は忘れたわけじゃない。アリアを緋緋神化から助ける、その約束を。
それは先日アリアから正式に引き受けた仕事だし、3月末になっても完遂できなければ玉藻がアリアを殺しにくるんだ。玉藻を緋緋神アリアが返り討ちにしても、どうやるのか知らんがその後で緋緋神に戦争を起こされたら困る。
それに、何より……腹が立つとはいえ……
アリアが、かわいそうだしな。また人格を乗っ取られる俺にも、よく理解できる辛さだ。
それはヒステリアモード人格によく自分を乗っ取られたりしたら。
『助けて（Help me）』『あなたが必要なの（I need you）』
あの夜、あの温室でアリアはそう言った。自分が緋緋神化しつつある事を怖がって。
だがそう言われる前から、とっくに俺は決めてたんだ。今後何がどうなろうと、ずっとアリアの味方をしてやるって。パートナーになるって決めた、あの日から。

それはさっきみたいなケンカを何度しようと、変わらない。
だから、やってやるさ。将来アリアが誰のお姫様になろうとも、俺はアリアを助ける。
これからどんなに辛い事が起きようとも、決めたことは守る。男として、な。
それと……
（体は正直だな、俺よ）
ワトソンが心配していた、ヒステリア・ベルセ女を他の男に奪われた事で発動するヒステリアモードが、今日は起きないんだ。
どうやら今や俺も、心の奥底ではアリアとの絆をしっかり信じてるらしい。
きっとアイツも、パートナーと決めた俺以外の誰かのものにはならないって事を。

シーツ無しのマットレスで寝てる間に、ワトソンからもメールが来ていた。『助っ人を呼んだから、キミの滞在先を教えてほしい』との事なので、屋根裏部屋の住所を、応返信しておき――俺はひたすら、メヌエットと会う調整が済むまで待機する。
待機する間は特にすることも無いので、曇り空のロンドンを観光してばかりだ。
とはいえ俺は密入国してるので、近所を見て回るぐらいしか出来なかったけどな。
色とりどりの煉瓦家を並べていたブリュッセルやアムステルダムとは異なり、ここでは白塗りで歴史的なデザインをした大型のアパートがドーンと建ってるのが一般的だ。
それはそれでスッキリして美しい外観で、その1階に入口がたくさんあり、中はゴチャゴチャ人

り組んで造られている様子だった。ここの家の模型とかを造ったら、内部が入り組んでて面白いだろうな。あと、看板が英語なんで読めるのも助かる。

（しかし……ポンド高に加えて、この物価は困ったもんだ）

海外での物価バロメーターことマックの値段を見て分かったが、ロンドンは物価も高い。なんでマックのセットが1500円とかすんの。

だがあのシリアルはもう食いたくなかったので、俺は地元民が行くパン屋を探し当て、その日も、翌日も、大きいパンを買って朝昼晩に3分割して食うという倹約生活を送った。

そんな、待機3日目の朝……

ちょっと奮発してチーズ入りパンを買ってパン屋を出たら、曇り空の下、小1ぐらいの痩せた小汚い少年とぶつかった。

何やら指をくわえてパン屋を覗いてて、俺が出てきたのに気づかなかったみたいだ。

青い目でおびえるように俺を見上げてきた、金髪の少年は

俺が持つ紙袋から漂うチーズの香りに、Goo…と腹を鳴らした。

……腹が減ってるのか。それも、俺より。

うーん……

「まあ、出くわしたのが運の尽きか」

日本語で呟いて、俺はパンの入った袋を少年に突き出す。

少年は驚いた顔のまま俺からパンを受け取ると、喜んだり礼を言ったりする余裕もない表情で

走って路地へ駆けていく。

そして自分の弟や妹と思われるチビたちとパンを分け、物陰で急いで食べてる。

（王族がいて、貴族がいて、平民がいれば……当然、乞食もいるってワケか）

イギリスは階級社会だって話だが、この国じゃ生まれが貧しいと、生貧しいのかな。

そう考えたら可哀想になってきたな。

だが人の心配をしてる場合じゃなかった。奨学金の振り込みは明日まで無いから、俺、今日、食うものがないぞ。とはいえ、度あげたものを取り上げるのもカッコつかんし。

……しょうがない。歩くと腹が減るから、今日は寝て過ごそう。

そう決めた俺が屋根裏部屋に帰ろうと、回れ右した時。

「モーイ！　リサは、リサは、心の底から感動いたしました！　ご主人様！」

だきっ！　飛びつかれて、抱きつかれたっ。

えっ……!?

こ、これ、えっ、リサじゃねーか！　日本にいたハズの！

な、なんでお前がここに……!?」

腰を抜かして真後ろに倒れかけた俺を社交ダンスのように支えたリサは、

「ワトソン卿が『トオヤマには生活力が無いからきっとパンぐらいしか食べてないはず。支えてやってくれ』と、ロンドンへの航空券をお送り下さったのです」

ニッコニコの笑顔で、そんな事を言ってくる。

「そのパンまでも、恵まれない子供に分け与えるお姿――リサは目頭が熱くなる思いです。ああ、リサの勇者様は本当に素晴らしいお方……！　へールモーイです！」

麦わら帽子みたいな形をしたフェルトのお帽子をかぶり、パフスリーブの長袖ブラウス、ロングスカートという冬旅装束のリサは――メープルシロップみたいな甘い香りのする頭を、スリスリ。スリスリスリーッ！　抱きついた俺の胸に擦りつけてきてる。ニオイ付けするネコみたいに。

（……ワトソンは、『助っ人を呼ぶ』と言ってたが……っ）

ヨーロッパ生活に明るくて、控えめで目立たず、休戦破り的にも普段はあんまり戦力にならないからカドが立たない……リサを選んだってワケか。

だが実際、男の1人暮らしにメイドが来てくれたのは助かるかもだ。

「わ、分かったから、離せ。ヨーロッパとはいえ、道ばたなんだから。離れろって」

「うふふっ。失礼いたしました。つい、嬉しくって……」

長いまつ毛の下で潤む、タレ気味の翠玉色の目を細めたリサは、ぺこり。

命令通り俺から一歩下がってお辞儀をしつつ、スカートを抓んでちょっと広げて見せた。

その動きで、しゃらり……と、一般的なイギリス人女性より色素の薄いロングの金髪がキレイに流れて揺れる。

「ですが、メイドは常にご主人様のおそばに。英雄色を好む。いつもは正妻様、ご愛人といった女性に愛情を注がれる勇者さまから――おそばに在り続けることで愛のおこぼれをいただければ、リサは心より幸いです」

「……？」

何を言っているのか分からんリサが石畳の足下に置いてたトランクを、「応持ってやりつつ……俺が首をかしげていると、リサはそれを急いで自分で取り、

「ワトソン様のお話によれば、ご主人様はここしばらくお独りで過ごされていたとのこと。お体もお辛かったことでしょう。今宵より、お気が向き次第リサを便利な女としてお使い下さいませ。真心を込めて、ご奉仕の限りを尽くさせていただきます」

「……」

「それこそがアヴェ・デュ・アンク家に伝わる、勇者様とメイドの正しい在り方なのです。そのように致すのが、「番早く御子子を身ごもれるとか」

「連のセリフの96%は遠山式ノイズキャンセラで聞かなかった事にして、「助かった。お前がいてくれると生活面で心強いからな」と言うと

「はい。家に他の女性がいらっしゃる時は1歩退くのが正しいメイドですが、今は久々の2人きりです。このチャンスに頑張りましょうね」

俺は基本、女には1歩と言わず1億歩ずつ退いて欲しいんだが……

とも言い出せないほどに、にっこり。リサは何を頑張るつもりか天使みたいな笑顔で、俺にピッタリついてくるのだった。

ワトソンによるリサの起用は、ズバリ的中。アイツは監督の才能があるね。

まず俺の貧しい仮住まいを見たリサは、

「ご心配なく。ご主人様がどんなに落ちぶれようと、リサはついて参りますからね」

聖母のようなリサ・スマイルで微妙に失礼な事を言いつつも、日本から持ってきた米をお鍋で上手に炊飯。数十ペニーしか残ってなかった金で生卵を買い、おかかのオニギリと厚焼き卵、さらにインスタントではあるが味噌汁までもを屋根裏部屋のテーブルに並べてみせた。

「お味の方は……いかがですか？　ご主人様」

「うまい。うますぎる。日本からアメリカ経由でイギリスに来たから、久しぶりの米だ」

「お米はまだございますので、おかわりもご遠慮なく申しつけて下さいね」

心から嬉しそうに食事を出すリサ、だが……なんか、額に汗かいてるな。

ああ。分かった。暑いんだ、この部屋。

隣のボイラー室のせいで、30度とかあるからな。

俺はズボンはともかく上はシャツ一枚になったから凌げてるが、北国オランダ出身かつ冬着のリサは辛いのかもしれない。表情には出してないが。

しかもメシを食い終わったら気づいたが、汗をかいたリサから例のメープル系の、やたらいいニオイがしてるぞ。

い、いかん。この甘ったるくて、やたら色っぽい香気。

意識し始めたら、呼吸ごとにヒス的な血流メーターが微増し始めてる感もある。

なんで女って汗かいただけでこんなに場の空気を甘く、ヤバくすんの。

俺は女ぐさいのは困るんだよッ。ああ、頭がボーっとしてきた……！

とはいえリサは香水とかを使ってる様子もなく、この香りはその女体に備わった生まれつきの機能らしい。そこを叱るのも非人道的なので、

「……お前、そんな暑苦しいもん着てないで着替えろよ。ほら。着る物、持ってきてるんだろ？」

急場しのぎの俺がそう言ってトランクを指したら、これが選択肢のミスチョイ。

「んもう、ご主人様ったら。まだお昼ですよ？　ですが今まで男性1人で――お辛かったですものね。ついにそのようなお気持ちになって下さって……リサは、本当に、本当に、嬉しいです……」

と、眉尻を下げて困ってるのか、口調的には怒ってるのか、セリフ的には嬉しいのか、なんだか分からんリサは……

その謎発言に続けて、むしろカーテンを閉めるという謎の動きを見せた。

そして、もじ、もじ……と、白い頬を薄ピンクに染め、俺に振り返ってから……

正座して、床に置いてたトランクを、カチャッ。開いた。何この一連の動き。

「……それではこちらに着替えて、ご奉仕させていただきますね。端た女の肌ではございますが、手入れは整えてございます。心ゆくまでご覧下さいませ……」

――とッ、唐突に出したぞっ！

両手で左右をつまんで、赤くなった顔を隠すみたいにして、トランクから、伝家の宝刀――純白のキャットガーターをっ！

「いや、違ッ……！　着替えろとは言ったが、そこでじゃなくて！　って、おい、よせッ……！」

「……でも、お気遣いいただきました通り、暑いのです。リサは少し汗っかきなところがありますので、これ以上のお目汚しも失礼かと」

うわっ、命令に従わないし！

狭い室内では逃げ場のない俺の視界内で、ぷち、ぷち、ぬぎっ……

……ちょっ……！

リサがボタンを外して、長袖ブラウスをめくり上げてるよ！　「リサ、ふぁいと」とか、自らを勇気づけるような小声のかけ声と共にっ。

ぽよんっ……！

精緻なフリルとレースに縁取られた下着に包まれた、ヨーロピアン・サイズのバストがブラウスに引っかかって持ち上げられて、重力で定位置に戻って……

その全体像が、閲覧可能になってしまう。すっ、すげえ、白雪・中空知・望月萌級だッ。

なお今の動きで、瞬見えたが、リサの胸の下では胸と胴体の間に、ダイヤのような汗がキラキラ煌めいてた。胸がでっかいと、女はそこにも汗をかくのか。驚愕の発見だ。

ああ……ちぃ、しゅるっ、とジッパーを下ろして、スカートまで……よせっ！

っていうか、今は辛うじて下着が残ってるリサだが、さっきの発言。

キャットガーターのみを出して、『これに着替えます』。

それは股上10cmのシースルー・超マイクロミニスカートと、両太ももに巻くガーターと、その上下を繋ぐガーターベルトしか無い下着。

ショーツ、いわゆるパンツにあたる部品が無いものだ。
まさか……ぎゃあ！　そのまさかだ！　今はいているものに、リサが手を掛けたぞっ！
「脱ぐな脱ぐなそれを脱ぐなっ！　お前は裸族かっ！」
「はっ、上からの方がよろしかったでしょうか」
リサが今度は自分の胸の後ろに手を回してホックを外そうとしてるので、俺はもう限界。
「――うおおおおッ！」
久々の日本米で元気になり早くも甘ヒスまで巡ってきていた血流を活かし、カーテンの向こう側へダッシュだ。そして後先考える暇も無く窓を開け、運良く下の階で広げられていた厚布のサンルーフめがけてイギリス初公開のトオヤマ・ダイブ。盛大にバウンドして、車道に落ちた……と思ったら、たまたま通りかかったロンドン名物・2階建てバスの上に座り姿勢で乗っかってたよ。
俺はジャッキー・チェンかっての。

2弾　ベーカー街の星

リサの祖国・オランダは、位置的にもそうなんだがドイツとイギリスが混ざったような文化の国だ。

なのでロンドンでの暮らしにもメイドとしての互換性が利くらしく、ベレッタ社からの奨学金が振り込まれた翌日以降はつつがなく過ごす事ができた。

リサはとにかくキレイ好きなので部屋をピカピカに掃除してくれたし、窓に小さな留め金を付けてスキマ風を少しだけ入れるという工夫で室温も調節してくれている。お得意の料理で、栄養状態も向上した。やっぱり家には女が必要だな。

なお、服装については裸やそれに類する姿で働くことは固く禁じ、持ってきていた自作セーラーメイド服の着用を命じてある。何故こんな事をいちいち命令しなきゃならんのか。

「リサは幸せです。リサの運命、勇者様、ご主人様と今日も2人っきり。この時が永遠に続けばいいのに……」

コインランドリー店で洗濯をしてる問、リサは店内にあったボロいソファーの真っ隣に座ってきてやや重い事をウットリ呟いてる。いつの間にか俺の肩に頭を乗っけるみたいに寄りかかってきてるから、物理的にもやや重い。

しかもこの絹糸みたいな金髪が殺人的に馨しいし。甘ったるくてツバが出てきた。

とはいえ、かいがいしく働いてくれてるリサに普段は俺が寄りかかってるワケだから、寄りか

かってくるぐらいは許してやるか。
しかし……倹約のために洗濯は、気にするんだが、ランドリーの中で俺のトランクスとリサの下着が組んずほぐれつしてる光景が見えて超恥ずかしい。トラウマになりそうだ。
そんな、プチ鬱状態の俺のポケットから――ロンドンに似合わない、演歌が流れた。ワトソンから電話だ。
『トオヤマ。やっとメヌエットのアポイントメントを取り付けたよ。キミだけなら会ってくれるそうだ』
――来た。ついに動けるぞ。
『ありがとうワトソン。それと……こないだはゴメンな。なんか、お前にまで八つ当たりしちまって。反省してる』
『フフッ、気にしなくていいよ。あの時はトオヤマを、ちょっとカワイイなって思った』
カワイイのはそっちだろ。今の笑い声とかも。
そんなんじゃ女だって世間にバレるぞ、お前、早晩。
メヌエット攻略中はワトソンにリサを預かってもらう事にしたんだが、リサはギリギリまで俺のそばにいたいとか言うんで……その日の夕方、メヌエットの家へ向かう2階建てバスにも一緒に乗せたんだが、バス酔いしてやんの。
V　2で空を飛んでも平気だったジェヴォーダンの獣っ娘ちゃんが、バス酔いとはねえ。

この時々コミカルなメイドさんのおかげで、ちょっとはガス抜きできたものの――
アリアの結婚問題はともかく、色金問題は何とかしてやらないといけない絶対の仕事だ。
ここからは改めて、気を引き締めてかからないとな。
そして、解決のカギを握る人物は――
アリアの妹、メヌエットだ。
そのメヌエットは、アリアの話によれば相当な危険人物とのこと。しかし俺は危険人物には毎日のように会う生活を送ってきたんでね。主にそのお言ってた人とか。妹といえば、俺の妹だって十分危険人物だ。武偵高なんて奇特な学校に通っている時点で、俺の周囲は危険じゃない人物の方が少数派なんだよ。メヌエットがどんな子だろうと平気だね。
「それではご主人様、うっぷ、お気を付けて」
ワトソンが教えてくれた、メヌエットの住所近く――ベーカー・ストリートのバス停に降りると、リサは青い顔をしつつもスカートをちょこんと広げる例のキュートなお辞儀で見送ってくれた。
「ああ、行ってくる。ワトソンによろしくな」
そう言い残して、俺は人通りのそこそこあるベーカー・ストリートを歩く。
ここには19世紀、あのシャーロックが住んでいたアパートが未だに在る。メヌエットはそのアパートを丸々所有して住んでいるんだそうだ。というかこの通りの左右に並ぶ店は全部が全部、今やホームズ家の不動産らしい。モノポリーの大地主状態だな。

キレイに改装してはあるが、歴史的な趣を残して――そこだけ19世紀にタイムスリップしてるような、ベーカー街221番地。彫金の表札には確かに『Minuet Holmes』の名が。

（ここにいるんだな。アリアの妹、メヌエットが）

と、呼び鈴を押すと……

白地に黒いフチ取りをした木のドアが開き、これも白黒のステレオタイプなメイド服を着た2人のメイドさんが玄関の左右にいた。

ひと目で双子と分かる、俺と同い年ぐらいの金髪碧眼の白人少女だ。

遠山キンジだ。メヌエットに会いに来た」

「サシェです。ようこそ」

「エンドラです。ようこそ」

髪の短い方がサシェで、長い方がエンドラね。髪の長短で覚えとこう。

しかし……うちのリサと違って無愛想だなあ、この双子メイド。

揃って美人だけど、客人に会釈ぐらいしろよ。

と、俺が自分の無愛想さを棚に上げて見回した室内は――アンティークな内装。

華美なものを嫌うイギリス人らしい、控えめで落ち着きのある装飾で統一されていた。

そして……すぐ気がついたが、バリアフリーの家だ。推理の天才メヌエットは、お国のお偉方に助言もする有識者だそうだからな。ご高齢の客が来たりもするんだろう。

「ご面会の時間までまだ10分ほどございますが、お茶はいかがですか」
「いや、じゃあ逆にションベ……お手洗いを借してくれ。長い話になるかもなんでな」
サシェに案内されて1階のトイレに入ると、これが広くて洒落てる。床は植物を描いた陶器のタイルで、ここもバリアフリーなんだが手すりは真鍮製。味があるねえ。
面会の時間が来て、エンドラの案内で廊下を行く。
窓から見えた夕暮れ時の中庭には、円形のハーブ園がある。一部だけ花が咲いてたんで分かったが、あれは季節ごとに花が咲く――半永久的に回る1年時計になってるんだな。植物学の知識がある人間……おそらくメヌエットが造園させたものだろう。
赤紫色の壁紙には金色で柄が描かれていて、その壁には額縁に収まったシャーロックの白黒写真がある。尊敬されてるなあ、シャーロックよ。
「……っ……」
1階の奥間に入った俺が、見えた光景に言葉を失う。
そこは――まるで、博物館。いや、ヘタな博物館より豊富に物が並べられてある部屋だ。
三葉虫、アンモナイト、甲蟹の化石。その奥にはヴェロキラプトルや、プテラノドンの幼体と思われる中型恐竜の化石もあるぞ。
エンドラと共にそこを歩いていくと、蛇やイルカ、ライオンの骨格標本もある。
「ここはメヌエットお嬢様がコレクションなさった品を収蔵した、博物室です。お嬢様のお部屋は

――この先、2階にございます」

メヌエットは、化石とか骨を集めるのが趣味なんだな。

アダ名がネクラの俺が言うのも何だが、あまり明るい趣味じゃないね。

ガラス戸の棚には蜂抜きの大きな蜂の巣、蜘蛛や蝶やサソリの昆虫標本、鷹やフクロウ、ハヤブサ、キヌバネドリの剥製、珍しい貝の標本もズラリだ。

それらの自然物が……おそらく、学術的な意味を持って並べられてある。

（この光景、このムードは……）

俺はこれに、見覚えがある。感じた覚えがある、とでも言うべきだろうか。

この光景は――8月に俺が突入した、原子力潜水艦。

――イ・ウー。

あのエントランスの内装と、似ているんだ。

（メヌエット・ホームズ……シャーロック・ホームズの曾孫……）

似てる。あのシャーロックと、同じ事をしている。言い合わせたワケでもないだろうに。

博物室の片隅にあった水晶や金鉱石やらの鉱石標本を見て、俺は――

色金（イロカネ）の事を、改めて意識する。

メヌエット。お前は知っているそうだな。色金の事を、世界……。

あの『意志を持つ金属』の正体と、アリアをどうすれば救えるのか、その答えを教えてもらうぞ。

メヌエットは俺と1対1で会いたいとの事で、博物室の先にあった階段を上がる許可をエンドラに下していなかった。

なので俺は、簡易エレベーターもついていた階段を1人で上がる。

薄暗い廊下は……静かだ。聞こえるのは、木板の床を少し軋ませる自分の足音だけ。

しかしパリ以降ずっと感じてるんだが、家の中で靴を脱がないってのは落ち着かないな。

エンドラが教えてくれた、金の取っ手、黒縁の白いドア――そこを、ノックする。

「……」

返事は無いな。だが気配はする。

鍵穴は今日日珍しいキノコ型で、施錠は……されてない。ので、開ける。

薄明るい部屋の中は、散らかってる印象だった。床に物が散らばったりしてるワケじゃないんだが、テーブルの上や本棚がやや雑然としてる。

だが後世に伝わる話によれば、これは往年のシャーロックもそうだったらしい。

退色した昔の手紙がそのまま入っている、木製のレターボックス。ちょっと埃を被った蓄音機。タイプライター。振り子時計。懐古趣味だな。

焦茶色の木棚には……きちんと磨かれて鈍く輝く、立派な天眼鏡があった。

（あれは……）

ネットで見た事があるぞ。19世紀、シャーロックが犯罪捜査に使っていた虫メガネだ。

正当なホームズ家の後継者と目されて、その形見をもらってるんだな。メヌエットは。

しかし、なんというか……俗世間とあまり交流が無い、浮き世離れした人物の部屋って感じだ。

室内にある電子機器は、デスクトップのパソコンだけってか。

「――ひどいにおい」

唐突に掛けられたアニメ声に振り向くと、カーテンを半分閉ざした窓際に……

窓から外を眺める小柄な少女、メヌエットの後ろ姿があった。

彼女は唐草のような金属で縁取られた椅子に掛け、椅子ごとこっちに背を向けている。

目を引くのは……椅子の左右に付いた、大きな、車輪。

車椅子だ。

背面の下に何やら歯車や管――小型の機関のようなものが付いており、自走できそうに見えるが、押して介助するための取っ手も見える。歩ける人間が乗っているものじゃない。

俺は……

バリアフリーになっていた玄関や、広いトイレ、階段の簡易エレベーターを思い出す。

アリアの妹は、歩行障害者だったんだ。

「におい？　俺に言ってるのか」

背中を向けたまま客の俺に振り返りすらしないメヌエットに、俺は名乗る前に尋ねた。

「火薬の匂い。あなたはお姉様と同じ、日常的に銃を撃つ人物。あなたのプロフィールをお姉様は語りませんでしたが、お姉様と同じ武装探偵ですね。それは推理するまでもなく分かっていた事です

すが、確定した、と言うべきでしょうか」
まだ背を向けたままで、メヌエットが語る。
声質が、アリアに似てるな。だが年下なのにアリアより少し低い声だ。
「身長は168から172、といったところでしょう。鍛えてはいるものの、あまり筋肉質になりすぎないよう、体格を意図してまとめている。体重は63キロ前後」
……俺の身長は……170cmジャスト。体重は63kgだ。ピッタリ合ってる。
見もせずに、どうして分かった？　角度的に、そこの窓に俺は映ってないハズだ。仮にカメラか何かで見てるとしても、服の中の体格や体重まで言い当てられたのは不自然だ。
「どうやって知った。武偵は身体的な情報を公開しないものだから、事前調査は困難だ。アリアやワトソンも、そこを前もってペラペラ喋るほどのマヌケじゃない。お前は、まだ俺の情報を何も持ってないハズだぞ」
何事も最初が肝心だ。
本格的な対話に入る前に、俺は武偵流に詰問するようなムードでメヌエットを牽制する。
だが、メヌエットの口調は変わらなかった。
「それは恥ずべき質問ですわ。あなたは武装探偵。すなわち、探偵の端くれ。この程度の初歩的な推理、出来て然るべきなんですから」
……初歩的な推理、ときたか。
そいつは有名な、名探偵シャーロックの口癖だ。意図して言ったかどうかは分からんが。

「どうして私があなたのプロフィールを言い当てられたか　小舞曲のステップの如く、順を追って話して差し上げます。あなたは、私が、あなたの情報を何も持ってないハズと言った。しかしそれが最初の問違いです。人体は常に、多様な情報を発信しながら動いている。匂いが、その1つにあたりますね。火薬の臭気から、推定されるあなたのご職業は限られてくる」

先生みたいな口調で、メヌエットが噛んで含めるように語る。

「そして、足音」

足音……？

「あなたは、この部屋に入る前に廊下を歩いた。私は当然、廊下の長さを知っています。体型にもよりますが、人間の歩幅は身長との強い相関関係を持つ。あなたの足音の回数、つまりあの距離を何歩で歩いたか――から歩幅が分かり、歩幅から身長が分かる。足音の響き方から、体重もおおよそ分かるものですよ」

「なるほど、オツムは良さそうだな。それで俺も確認が取れた。お前がメヌエットだな」

ずいぶん待たされたが、やっと辿り着いたぞ。最重要人物の前に。

この時点でキレそうなぐらい回りくどくてイヤミったらしい喋り方をする子だが、期待していいかもな。その推理力には。

ズバリ物事を言い当ててくるところはアリアに似てるが、アリアが直感だけで言うのに対し、メヌエットには論拠がある。いかにも血統書つきの名探偵って感じだ。

「これだから庶民は。『礼儀』という単語ぐらいご存じでしょう？」

「何のことだ」

「分からないのであれば小舞曲のステップの如く、順を追って話して差し上げます。女性に名乗らせる前に、男性はまず自分から名乗ること。これは最低限の礼儀です。私は知性の程度だけで人格を判断するほど愚かではありませんが……ここは私の部屋。礼儀を守っていただけないのであれば、ご退出願うしかありません」

姉もだが、妹もスーパーひねくれ者だな。ホームズ姉妹は。

名乗る順番ぐらい、どうでもいいだろうに。

しかしヘソを曲げられて色金の話を聞けなくなっても困るので、

「遠山キンジだ。お作法通り先に名乗ってやったんだから、お前もこっちを向いて名乗れ。客に背を向けっぱなしってのこそ、無礼だぞ」

俺は、そう告げた。

するとメヌエットは、きこッ……と、車椅子をゆっくり転回させつつ……

「ああ、あともう1つ。あなたについて推理できた事があります。あなたはあまり優秀な武装探偵ではない。問題がある。私が車椅子だからと油断している」

こっちへと、振り返った。

そこで俺は、息をのむ。

その見た目は……超カワイイ。さすがはイギリスの国民的美少女アリアの妹。アリアに引けを取らないぐらいの可愛さだ。美少女偏差値75ってとこだよ。しかしアリアとは片親だけが同じ腹違い

の妹という事もあり、その印象は少し違う。
まず、アリアも色白なんだが、メヌエットはもっと白い。白人の血が濃い事に加えて、日光をほぼ浴びない人間特有の青白さがある。
勿忘草色の大きなツリ目は、アリアと瓜二つだ。だが、圧倒的に――暗い。俺がクラスメートだったら、この女子に付けるあだ名は『ネクラ』だろうね。
ツーサイドアップに結った髪は、それ自体が薄く光っているかのように美しいプラチナゴールド。パスポートにあった昔のアリアの写真と同じだが、今のアリアとは色違いだ。
服は、お人形さんが着るようなフリフリでヒラヒラのドレス。葡萄酒色で、赤ちゃんの帽子みたいなボンネットまでかぶってる。ゴシックロリヰタ、とか言うんだっけか。そういうの。理子が見たら泣いて喜ぶおべべだな。
客人の俺に対するサービスのつもりか、それに武偵高のセーラー・カラーを模した襟を付けているのはご愛敬なんだが……そんな事より。
俺が目を見張った対象は、銃。
メヌエットは、最初から銃――占いイギリスの軍用ライフル銃を持っており、車椅子を転回させると共に俺に照準を合わせてきたのだ。その手を、瞬だけ銃から離し、キュッ、と車椅子のハンドブレーキも引いてる。発砲の反動で後退しないようにするためだ。
「……ッ……」
完全に、先手を取られた。武偵の俺が、探偵のメヌエットに。

緋色のシートに座ったまま――メヌエットは、
「初めまして。そして、さようなら。私はメヌエット・ホームズ。ホームズ4世ですわ」
――ナイス・トゥー・ミート・ユー、アンド、グッド・バイ――

ひと単語ごと丁寧に区切った挨拶を告げ、どんな素人でもライフルなら命中させられる7m半の距離で、さらに必中度を高めるスコープに片目をあてがい……

パウッ！

撃ってきた！

「――ッ！」

弾丸が命中した俺の額に、稲妻のような激痛がのけぞって尻餅をついた、俺、だが……

……生きてる。

痛みに頭を押さえた手にも、血はついていないというか、今の発砲音で分かったんだが、メヌエットのリー・エンフィールドは改造銃。しかも鳥撃ち用の空気銃だった。

だが、もし今のが実銃だったら――マジで殺せた。

「……ふむ」

何かに勝手に納得したような顔で、チャキッ……と銃口を上へ向けたメヌエットに……

俺が怒鳴ろうとした、そこにさえ先手を打つようにメヌエットは

「お姉様が見初めたほどの方ですから、あなたには何らかの特殊能力があるのでしょう。しかし今の弾を受けてしまうあたり、それを自らの意思で制御はできていないモードの事をおおよそ見抜いてきた。

――出会って5分もたたずに、もうヒステリア

やっぱり……油断大敵だな。この子は。

本人が言う通り、ただの歩けない女の子だと思ってると足下を掬われるぞ。

「私は通常、自身の半径５ｍ以内に男性を近づけませんが、男性は臭くて汚い。大嫌いですから」

ふてくされたような顔で銃を持ったまま、メヌエットはゴメンの一言もない。

「……」

俺はズキズキ痛む額を押さえる手の下から、恨みがましい目を向けた。

今のは痛かった。痛かったぞ。頭蓋骨にヒビでも入ったんじゃねーのかこれ。

「ご覧の通り、私は力ずくで何をされようと抵抗できない体です。あなたは若い男性ですから、この銃を携えたまま応接することをお許し下さいな。なお、この銃はＲ／Ｉ電池でポンプの空気圧を変えられます。ご挨拶の弾は１５０気圧で鳩が死ぬ程度のものですが、さてこれを７５０気圧にすると――先ほど申し上げた５ｍ以内では、22口径銃に匹敵する撃力を持つようになる。つまり、対人殺傷力を持つ銃になるという事です」

すぐ人に銃を向けて言う事をきかせようとするのも、姉のアリアと同じだな。

ご挨拶の弾って何だよ。発砲を挨拶にすんのはお前ら姉妹ぐらいだぞ。

だが……

「まあ持ちたきゃ持て。俺も今の撃ち方でお前の銃の腕は分かった。大した事ない。俺が銃を持ってる事ぐらい、お前ならもうお見通しなんだろ。撃ち合いにはしないハズだ」

と、俺も俺で暴力的に主導権を握っておこうとする。
「その辺を詳らかにするあたり、潔いですね。しかし私の武力がこの空気銃だけだと思い込むあたり、やはり武偵として二流です。きっとEランク、良くてDランクでしょう」
合ってるし。だが『正解』とは言ってやらんぞガキンチョ。
「……」
「……」
俺とメヌエットは、お互い銃を保有したまま――
攻めてジト目とジト目、ネクラとネクラ同士で対峙する。
しかし、見れば見るほどカワイイな。アリアよりも外人っぽいのと、その服装のせいもあって、本当に等身大のお人形さんみたいだ。
「そういやお前いくつなんだ」
「まあ。どこまで非常識な方なのでしょう。いいですか遠山キンジ。親しくもない女性に、数に関することを聞いてはいけませんよ。電話番号、体重――そして特に、年齢。今のは私が射殺するまでもなく叩き及的速やかにお手持ちの銃で自殺して詫びていただきたい程の非礼ですが――タイムリーな話題ですので、特別にお答えしましょう。昨日、14歳になりましたわ」
「結局言うんだったら余計な前フリすんなよ。14……ってことは、日本でいえば中2か。フン。日本語には中2病って言葉があってな、お前みたいな回りくどい喋り方をするのがカッコイイと思うお年頃って事だ。14ってのはそういうハズカシイ歳数で――」

「あら。14という数をバカにしてはダメですよ、キンジ。ノントーティエント数で最小の偶数。二十世紀を代表するサッカー選手ヨハン・クライフの背番号。日本麻雀での和了は14牌から成る。あなたは全ての数にもっと敬意を払い、興味を持たなければなりません」

俺がバカにするような事を言っても、小難しい事を言って受け流すし。

しかも呼び捨てにしてきやがった。それは欧米では無礼には当たらんけどさ。こっちを完全に見下してる。俺の顔から、こっちも失礼な事を考えてるのが読めるんだろうけどよ。

というか、この回りくどい喋り方。

これも、シャーロックによく似てる。いちいちカンに障るところとか。

「ところで、この付け襟は――東京武偵高の女子制服に揃えてみたのですが、あなたから見て色形に違和感はありませんかしら？　お姉様のご帰国を祝って誂えたものの……私はこの襟の実物を見たことがありませんので」

「……服全体で見れば違和感ありまくりだが、そこだけ見れば違和感無い」

「65点。明確で良い回答ですが、女性の衣服はその小石サイズの脳ミソでも構わないので隅々までフル回転させ、できるだけ褒めること」

とりあえず武偵高生の確認が取れたとあって、メヌエットは付け襟を改めて整えてる。

なんだよ65点って。誰がお前に俺のセリフを採点しろっつった。

「……アリアを祝うとか言ったがな、それはもうできんぞ。あいつは今ごろバッキンガム宮殿で王

子様のボディーガードでもやってるとこさ」
「私が推理した通りに状況が運んでいる、というわけですね」
「何がだ？」
「私、ロンドン警視庁（スコットランドヤード）、それと当家の武偵派にお姉様帰国の報を流して、殿下とお姉様を引き合わせましたの。私は跡継ぎ問題などに興味はありませんが、ホームズ家のお姉様のシンパからしてみれば、殿下とお姉様が仲睦まじくなれば大逆転手ですからね。トントン拍子に事が進めば、私も王太子妃（ロイヤルファミリー）の妹君。王家の一員になれるというのは、面白くない話ではありません」
「おいッ。一部は……コイツの仕業、だったのかよ。王子の件は。
「お前っ、アリア本人の意志を丸っきり無視して何やってんだよ」
「お姉様への嫌がらせは私の生き甲斐ですから」
「今アリアは重大な問題を抱えてるんだぞ。そんな暗い生き甲斐はよして――」
「暗い生き甲斐？　暗い顔のくせに」
「うるせえ。これは生まれつきだ」
「自覚はあるのですね」
「この……おちょくるのもいい加減にしろよ。俺は見た目より手が出やすいタイプだぞ」
「そういう見た目をしてますけど」
やんのかコラ。
と、のど元まで出かかったが……なんとか、飲み込む。

俺はメヌエットに教えを請いに来た立場だ。ここでいきなりコイツにヘソを曲げられて平和的に話が聞けなくなったら、事が面倒になる。

武偵流のやり方は、もう少しガマンだ。

「……俺はお前と口喧嘩しに来たんじゃない。色金の事を聞きにきたんだ。お前は色金のことを世界一よく知ってるらしいからな。アリアが緋緋神化しかけてる話も、ワトソンかアリア本人からも聞いてるんだろ」

「ええ。姫だの神だのと、お姉様は出世のチャンスに恵まれてますこと」

「俺は――それを止めるにはどうしたらいいのか、お前に聞くためにここまで来たんだ。手元には瑠瑠色金も用意してある。どんな事でもするから、お前は、どうすればいいのか教えるんだ。知ってるんだろう？」

「はい。推理できていますよ」

きこっ……

メヌエットは車椅子の車輪を片方動かして、ナナメを向く。そして、

「――でも教えません」

年齢よりずっと大人びたムードで、流し目してきた。

「何っ……？」

「まず第一に、お姉様は緋緋神になりたがっていないのです。お姉様を私の元から奪った、警察や武偵高――闘争に関わる組織などは辞めて、私

と、緒に探偵になればいい。恋も生涯避けて、修道女のように暮らせばよろしい。すなわち私にとっては、緋弾という首輪がお姉様に掛けられている事はむしろ歓迎すべきことなのです」

ワトソンが言ってたが、メヌエットは……

アリアが、大好き。

そのアリアを――自分のそばに置きたい、って事か。

「これは玉藻って奴の受け売りだがな、心ってものはそうそう思い通りに制御できない。お前のそばに縛りつけたところで――それでも何かのきっかけでアリアが緋神になって、乗っ取られたままになったらどうする。緋神は戦争を引き起こそうとしてるんだぞ」

「戦争？　キンジは第二次世界大戦のような国家と国家の総力戦、全面戦争をイメージしているのですか」

「そうだ。大戦争だぞ。ロンドンだってきっとまた火の海になる」

「それは先入観が過ぎるというものです、キンジ。政党政治が行われている現代社会では、それにはまず緋神がヒトラーのように結党し、コツコツと党員・議席を増やして日本かイギリスの政権を掌握し、国家を総力戦に導く必要がありますよね」

「……」

「仮にそれができたとして、たとえば日中か英仏で海峡を挟んだ全面戦争が始まったとしましょう。上陸部隊が用いる現代の機銃は1秒に10発以上、1分に700～1000発もの機銃弾を放ちます。つまり1日分なら、この部屋いっぱいの弾が要る計算になります。それを上陸戦と橋頭堡

の確保にかかる数日分　海の向こうの敵国まで輸送するとなると、輸送船が1隻要るでしょう。もちろん戦争は銃1丁ではできませんから、1万人の大隊で上陸作戦を行うのには延べ1万隻の輸送船が要される。1隻の輸送船には通常8方向からそれを守る護衛艦が必要なので、都合9万隻。それで、たったの数日分。全面戦争とは、大層お金がかかるものなのですよ。世界的不況に喘ぐ現代の各国が、そんな莫大な資金を捻出できるとお思いですか？」

「いや……思わないが……じゃあ緋緋神は、どうするつもりなんだろう……？」

アイツは二国忘みたいな超人同士の戦いで情熱を味わいたいとか香港で言ってたから、スイッチ1発で終わる核戦争とかも好みじゃないだろうしな。

「それも初歩的な推理ですよ。仮に私が緋緋神でしたら、テロリズムの応酬を狙います。民族問・宗教問での緊張状態――火薬は、世界中にありますからね。そこに小さな種火を入れて点火してやればよろしい。小さな引き金さえ引けば、武力抗争をしたがる、そしてさせたがる人々は自然と動くものですよ。国家より小規模な集団による局地戦を、テロの形で次々と引き起こせば良いのです。それは日本やイギリスに限らず世界中で起こし得る、新たな形の『戦争』となるでしょう」

民族対立や宗教対立を煽っての、泥沼のテロ合戦か。

それで各地域から超人戦士を引っ張り出して、戦わせるって筋書きは……ありえる、ぞ。

俺がさっきまでイメージしてた第三次世界大戦なんかより、ずっとリアリティーがある。

「……空恐ろしい話を、他人事みたいに言うんだな」

「他人事ですもの。テロは人の集まるところで起きるものですが、私、外に出ませんから。ニュー

ス番組を視る時間が増えるぐらいの影響しかありませんわ」

世界中でテロが起きようと、テレビ観戦を決め込んでスルーかよ。実際……誰もみんなそうなのかもしれんが、「しらない」と宣言するのはいかがなものかだぞ。人として。

アリアは緋神にさせないし、なっても問題ない。そこを理詰めで説明されてしまった俺は、なんとなく論破されちゃった感じもあるので……しょうがない。

――パートナーの妹さんなんでここまでは丁寧に応じたが、ここからは通常の武偵流でいかせてもらうとするか。その歪んだ性格を矯正する教育も兼ねてな。

「よしよし、分かったよ困ったちゃん。お前と喋ると言いくるめられるから、もう喋らん。これはアリアの――武偵としての俺のパートナーに関わる、重大案件なんだ。その秘密を知ってて言わないつもりなら、問答無用で口を割らせるまでだ」

ジーサードには『粘り強い対話と交渉が日本のお作法』、とか言った俺だが……

それでダメならキレて刀やらゼロ戦やらで突然襲いかかるのも、日本のお作法なんでな。

「ふむ。それも1つの作戦になるかもしれませんね。想定されるうち、最も愚かな作戦の1つですけれど。しかし、さて。喋らずに私の口を割らせるとなると……いかがなされるおつもりかしら？」

きゅん、と、メヌエットの手元のリー・エンフィールドが少し音を上げた。

さっき言った通り、空気銃のポンプ内圧を高めてるんだな。殺傷力を持つ気圧まで。

だが、むしろそれでいい。

武力で来てくれた方が、まだ俺に分があるだろう。
こいつは喋るだけで人を催眠術みたいのにかけて殺せるとか、アリアが言ってたしな。
アリアの戦姉・アンジェリカも、頭をおかしくされちまったみたいだし。
宣言した通り、ちょっと痛い目に遭わせて情報を引き出してやるさ。
銃は俺に対して脅しにならない。銃に頼れば、お前の負けだ。他にも武器があるんなら、出してみろ」
と、俺は拳銃をクイックドローできるよう開手になって……
堂々と室内をメヌエットの方へ歩き、さっき禁じられた5m圏内に侵入する。そして、さらに距離を詰めていく。3、2、1m。
だが、今度は俺が反撃してくる事が明らかなのでメヌエットも撃って来ない。
実際、この子の銃の腕前は後手に回りさえしなければどうという事はないレベル。
甘い構え方でモロバレだが、武偵高なら1年ってとこだ。ヒステリアモードでなくても、兄さんや蘭豹に殺人的な鍛えられ方をしてきた俺の敵じゃない。
とはいえまあ、相手は車椅子の女の子だからな。
妹を虐めたってんでアリアに後で風穴開けられるのもアレだし、軽く胸ぐらでも掴んで恐がらせてやるとするか。
「ヘタに動かない方がいいぞ。骨とか折れちゃうかもしれないからな」
そんな脅しと共に詰め寄った俺が、まず空気銃を奪ってやろうと右手を伸ばした時――

絶妙なタイミングでその銃を左肩に担いで避けたメヌエットは、右手だけを銃から離し、俺の右手と握手するように差し出してきた。

気がつけば『指切りげんまん』みたいに、小指と小指だけが絡まってる。

――その時。

（……う……おッ!?）

い、痛え！　なんだこれ！

メヌエットの僅かな動きで俺の小指が捻られたかと思うと、その動きに連動して手首が曲がらない方へ曲げられていく。

この激痛に、俺から瞬時に闘争心が失せてしまう。

痛い、痛い、痛い。それしか考えられない。逃げることも、できないぞ。指を振り解こうにも、少しでも力を入れたら手首が折れてしまいそうなんだ。俺自身の力で。

さらにメヌエットは綾取りでもするかのような動作で、俺の指をクイッと捻る。

「――あ……ぐッ！」

激痛が、今度は肘に届く。

俺は絨毯の床に膝をついた。つかざるを、得なかった。

痛みはそのまま肩に、背骨に、広がっていって――

とうとう俺は、ピンで留められたクモのように床にべったり張り付けられてしまう。

脂汗を顔に滲ませながら、車椅子に座ったままのメヌエットは……

それこそまるで、虫でも見るような冷たい目で俺を見下ろしている。
その涼しい表情には、どこにも力を入れている様子がない。
それはそうだろう。この腕や背、どうやってかは分からないが――全部、俺自身の力で曲がるように仕向けられてるんだから。
メヌエットはその起点を、『指切りげんまん』した俺の指に作っただけ。
たぶん――これは合気術、それも達人級の技。そういう系統の技術だ。
「ヘタに動かない方がいいですよ。骨とか、折れちゃうかもしれませんから」
さっきの俺のセリフをリピートしたメヌエットに……言われずとも、分かる。少しでも動けば、小指から背骨までの全部の骨が外れ、あるいは折れる。俺自身の力で。
そういう姿勢に、俺は、固定されちまったんだ。
「バリツは日本に発祥し、ブラジルで磨かれた『何でもあり』――全局面対応・完全総合格闘技の略称。座位でも仕合えるのは当然のことです。お姉様のバリツは打撃と投げ技が中心で、私のは極め技――関節技がメインですの。これはその1つ、『馬蔦』。曾お爺様が磨き上げた、ホームズ家に代々伝わる技よ」
こつ、と、リー・エンフィールドの銃口を俺の後頭部につけてメヌエットが言う。
「キンジ？　私はあなたのことを、少しだけ気に入っていますのよ？」
なら銃を突きつけんな。
「だから、私のお馬さんにしてあげましょう」

くりん、と、小指を僅かに捻られると――俺は操り人形のように、今度は左手と両膝で這うような姿勢に引き起こされた。激痛で、その姿勢しか取れなくされて。

そして、ズル、ズル……と、メヌエットの車椅子に体を寄せるように這わされる。

空気銃を車椅子の金具に掛けたメヌエットは、

「よいしょっと♡」

左手で掴んだ椅子の手すりと俺の右腕を支えにして、ぽふん、と、ちっちゃなオシリを俺の背中に乗り移らせてきた。自転車に2人乗りする女の子が、後ろの荷台に横座りするような体勢で。

「ほら。歩け。言う事きかなければ、脊椎折っちゃうから」

……殺される……！

その声が、俺の内側……本能の奥底から、圧倒的なリアリティーを持って聞こえてくる。

ち、ちくしょう……！　ああ、極められた右腕から伝わる動きで、這わされる。痛みに震える左腕と両膝の3点を床について、メヌエットを背中に乗せたまま。

「あッ……がッ……！」

痛い……痛い！

そのせいでまさに動物になったかのように、言葉を発する事もできない。

「おほほっ。情けないお馬さんね。ほら、部屋を這いつくばって、周なさい」

サディスティックに笑ったメヌエットは、俺を右腕のハンドルで操作して……

実際、アンティークの机の周りを丸く這わせた。そして車椅子の前で「どうどう♡」と優しくか

け声して、止まらせる。
さっきと同じようにして、緋色をした車椅子のシートに座り直したメヌエットは……
そこでようやく、搦め手を解いてくれた。
だが俺はしばらく、全身の痛みで動けない。
無様に車椅子の前に倒れたまま、右腕を押さえて呻くことしか……でき、ない。
そんな俺を、メヌエットが車椅子から見下ろしている。
「キンジ。先ほども言いましたが、私はあなたが気に入りました。歩けない私の事を心の中では見下しつつ、それを隠して取り入ろうとおべっかを使う者たちとは違う。ですからアンジェリカと同様、『殺すのはよそう』と思いましたの」
「こ……殺すつもりだった、のかよッ……」
「最初はまあ、暇つぶしにね」
サラッと言ったメヌエットが、きろっ、と、その蒼い目で俺を睥睨してくる。
――ゾクッ、と――
感じた。
そして分かった。
この感覚。
これは――殺気、だ。
国宝級の銘刀が……しかし鞘に収まってるような、そんな殺気。

銃やバリツだけじゃない。メヌエットは、まだ刃を隠している。その舌に乗せた刃を、抜かずにいてくれているんだ。

その刃は、俺を簡単に刺し殺せる。やはり銃弾もナイフも使わず、言葉で人を殺せる女なんだ。

この、メヌエット・ホームズという人物は。

銃や爆薬、刀剣や魔術、罠や新兵器。今まで、いろんな奴が様々な力で俺を殺しにきたが――メヌエットの力は、俺が想定した事もないようなもの。

銃を見たことのない武士がそれに手も足も出なかったように、俺はメヌエットの言葉の殺傷力に対処する手段が想定できない。抜かせたら、殺される。

その殺気のようなものだけは、分かるんだ。武偵としての、本能のようなもので。

「だってお前はお姉様を私から、そしてイギリスから奪ったカタキですもの。でも強いて言えば、私はキンジの分かりやすい性格と、ネクラそうな顔が気に入ったのです」

「だ、誰も、お前に気に入ってくれなんて頼んでないぜ……」

「そういうところもね。私と話し出した時と今とで、あなたは態度に変化がない。口調は恫喝しているようですが、それはお姉様の身を案じて焦っている心理の表出。キンジには、アリアお姉様の力になろうとして退かない真摯さがあるのです。そこも評価しましょう」

……偉そうな子だよ、ホントに。

メヌエットから逃げるように後退しつつ、やっと座り姿勢になれた俺は……

そのまま、あぐらをかいて腕を組んでみせた。

「……」

「あら、それは何のポーズ？」

「座り込みだ。色金について教えてもらえるまで、俺はここを動かないぞ」

こうなりゃ弱者の最終手段、嫌がらせでいくぞ。これも武偵は問々やる方法なんでね。

俺を気に入ったとか言っても、メヌエットはクサくてキタナイ『男』が嫌いらしいしな。

それに俺は外をほっつき歩いててMI6の00シリーズに出くわしたら、殺人許可証を行使されていつズドンとやられてもおかしくない身空。ここに居座るのは、石と鳥さ。

「あら、キンジにしては考えましたね。それで私も、いい事を思いつきました」

だが……そんな俺の薄汚いやり口を、むしろメヌエットお嬢様はお気に召したご様子。

きこ、と車椅子を少し揺すって、メヌエットは……

にやり、と、ネクラでイジワルそうな微笑を見せた。

暗い美少女がやると、ちょっと、ゾッとするような表情だ。

なんだ、イヤな予感がするぞ。ロンドンに来て以降、2回目の。

「あなたを、私のそばに置いておきましょう」

俺……地雷踏んだかな？　この作戦。

「色金について教えるまで動かないというなら、ずっと教えません。しかし、そうするとそれはそれで帰ってしまうかもしれませんので……『星システム』を導入しましょう」

メヌエットは、しゅぽ、しゅぽ……と、小さな駆動音を鳴らして車椅子を自走させる。

そしてデスクからメルヘンチックな飾り模様で縁取られた、白いカードを出した。
俺の所へ来て渡してきたそれは、無記入のネームカードだ。
「キンジが私に良いことをすれば、そこに星を描いてあげます。その星が10個貯まったら、緋緋色金について私が推理したことを教えてあげましょう」
……まだ教えはしないが、チャンスはくれるって事か。
こんなワガママ貴族のお遊びにつきあってるヒマは無いんだが……
だが、今までのとりつく島も無い状況よりはマシか。
……良いことって、何をすれば星をもらえるんだ」
「さあ」
「さあって何だよ。それを決めてくれないと俺が何やればいいか分からないだろ」
「太陽はなんで昇る？　月はなぜ輝く？　キンジは質問ばっかりの子供のようですわね。仮にも武装探偵を名乗るなら、ご自分で推理なさいな」
「太陽が昇るのも月が輝くのも単なる自然現象で、理由は無い。そんなもん推理できん」
「その通り。この世の多くの物事に理由などないのです。つまり――私がそこに星を描く理由も、描かない理由も、明確にルール化されるべきものではない。キンジはただ、私に良いことをすればいいのです」
良いこと……？　と、俺が眉を寄せた時……
ボーン、ボーン、ボーン……柱時計の音がした。

「ディナーの時間ですよ。キンジ」
きここ、と、メヌエットは車椅子の車輪を片方動かして……
取っ手のある辺りを、こっちに向けて止めた。で、
「押しなさい」
「星をくれたら押してやる」
「あら。この星システムが分かってきたようね。今後ずっと、私の求めに応じて車椅子を押してくれるのなら――さっそく、星を1つあげましょう」
そう言って、メヌエットは俺からカードを受け取り……
俺が立ち上がって車椅子のハンドルを掴んだら、自分は手元で真鍮のレバーを捻った。
そして、ぷしゅー。
車椅子の背面下部についてた蒸気機関みたいな部分から、白い煙――水蒸気と思われるガスを抜いてる。熱っ。
そうしてようやく、テーブルから取った羽根ペンで星印を描いてくれた。まずは1つ。
「ああ、そうそう。私に悪いことをしたら、星を減らしますからね？　キンジ」
骨の髄までイジワルそうな笑顔で半分振り返り、俺にカードを返したメヌエット――
つまりこの星システムは、この妹様の胸先三寸で星が増減するって事か。
いかにもこの性格がねじくれたお嬢様が考えそうな、大ざっぱで幼稚なシステムだな。
だが――だからこそ難しそうだぞ。ちくしょう。

簡易エレベーターに載せて、車椅子ごとメヌエットを1階へ運び……

例の博物室を、車椅子を押して進む。

俺もこうなっては星システムに付き合うしかないので、

（メヌエットに『良いこと』と思われる事をするためにも、聞き取り調査をしないとな。好みとか、趣味とか……）

と、何か取っかかりはないかと思って周囲を見回す。

だがこの博物室じゃ物がありすぎて逆にそれが分からなくなってしまい、困ってキョロキョロしていた俺の目に……妙な物が留まった。

貝殻を陳列した棚の上に、関係なさそうな賞状が額に入れられて置かれてる。

どうも小学校の徒競走で1位になった賞状みたいなんだが、名前は……アリアのじゃん。

「あれ、アリアの賞状じゃねーか。なんでお前が持ってんだよ」

賭けポーカーでもらったのです。お姉様が手に入れた良いものは、みんな私がもらう。あれらは全て、私がお姉様と賭けて勝ち取った戦利品なのですよ」

言われて改めて見てみると、棚の上には他にもトロフィー、メダル、クマのぬいぐるみ、衛兵の形をしたクルミ割り人形、珍しいキャンディーの缶など、幼少期からメヌエットがコツコツとアリアをやっつけてぶんどったらしい品が並んでいた。どんだけ負けてんだよ、アリア。

……アリアのものは私のもの、か。お前、ジャイ子みたいだな」

「ジャイ子はジャイアニズムの持ち主ではありませんよ」
日本のマンガの設定まで俺より詳しいし。どこまで博学なんだよメヌエットは。
あともう一つ、棚には岩場を写した風景写真があったので、
「あれはどこの写真だ？　あんなもんまで賭けたのか？」
メヌエットが行きたい所でもないかと思ってそう尋ねると、
「写真ではありません。油彩画ですよ」
そう言われて見てみると……ほんとだ。油絵じゃん。
「す、すげえ。超緻密だな。誰か有名な画家が、どこかの写真を模写したのか？」
「いいえ。デボン州ダートムアの風景を、記憶を元に私が描きました。10歳の時に」
この……写真と見紛うような絵を……しかも、10歳で？　天才だな。
白雪とレキに加えて、3人目の絵が描ける女子を発見だね。
「あれ。どこかで聞き覚えがあるな。デボン州ダートムアって。確か、アリアの……」
「お姉様の保有領地――バスカービルがある土地です。面積は11㎢で、化石の産地。私はそこに時々お邪魔して化石を採掘する権利を、これもポーカーでお姉様から貰っています。最近はもう飽きたので行っていませんが、あの絵はその採掘権の証に掛けてあるのです」
化石採集の何が面白いのか俺には分からんが、星採集の取っかかりは一個発見だな。
メヌエットは、賭け事が好きなんだ。
ていうか11㎢って。文京区や荒川区に匹敵する広さなんですけど、アリアのリアル領土。

「……お前、ポーカー好きなんだな。俺は弱いんで、ポーカーはしないが……どうだ？　あとで星を賭けて、俺と何かギャンブルしないか」

「まあ、お仕事熱心ですこと。でも、負けたら星剥奪ですよ？」

「やる前から負ける事を考えるヤツがいるかよ」

「うふふッ。賭ける前のお姉様も、よく同じ事を仰ってましたよ。ですが、考えておきましょう。キンジの賭け代となる星が、もう少し貯まったらですけど」

俺が星システムに愚直に付き合ってるのでゴキゲンなメヌエットを、食堂へ運ぶと……

純白のテーブルクロスに銀の燭台を載せ、食器を並べてたサシェ&エンドラが青い目をまん丸に見開いてビックリしてきた。

そのまま絶句して、俺とメヌエットの顔を見て、双子同士のソックリな顔を見合わせて、また俺とメヌエットの顔を見てる。

「……何がビックリなんだよ、お前ら」

クラシックなメイド装束の似合う美人姉妹に顔を見られるのも気恥ずかしいので、俺がボヤくと。

「い、いえ、メヌエット様が……笑顔でいらっしゃるので」

「お嬢様、お客様のご質問ですので申し上げますが何とぞ、お赦し下さい。私どもはアリアお嬢様が国を出られて以降……いま初めて、拝見したのです。お嬢様の笑顔を」

サシェとエンドラが狼狽する前で、メヌエットは「ふむ。そうだったかもしれませんね。ですが

手が止まっていますよ。働きなさい、お前たち」などと厳しく命じるのだった。

サシェとエンドラは職業メイドって感じで、クールだ。

おそらくメヌエットに命令されたお仕事だけをきっちりやって、プライベートな事には踏み込まないようにしてるんだろう。

まあ、機嫌を損ねたら銃やバリツや言葉責めで殺しにくるようなお嬢様だからな。と、夕食後メヌエットを押して部屋に戻る俺は、人納得する。

しかしだな……メヌエットの夕食。ありゃ酷かったぞ？

山盛りのサクランボとラムレーズンのアイスに、ブロックみたいなジャムが添えられた、花瓶みたいなサイズのプリンパフェ。

俺に出されたディナーはフィッシュフライとコーンスープとパン　質素だがマトモなものだったから、それはメヌエット自身が命令したメニューなんだろうけど。

「おいメヌエット。お前、さっきの晩メシは何だ。カロリーとか気にしないのかよ」

「気にしますよ。1食が3300キロカロリーを下回ると、低血糖症で失神しますからね。私は大脳新皮質の側頭連合野を通常の人間より遥かに亢進させて生きているので、多量の糖の摂取が必要になるのです。作家やゲーマーにも、甘党の大食漢が多いでしょう」

「じゃあもうちょっとバカになっていいから、マトモな食事をしろよ。俺は欧米人の食に対するアバウトさにはウンザリだ。医食同源って言ってな、食い物が悪いと体があちこち悪くなるんだ

ぞ。あれ作ってるメイドたちは何も言わないのかよ」
「言わせませんから」
「やっぱり、お前の言いなりか……」
「そうです。どんな事でも私が命令すれば聞きますわよ。試してみます？」
「人をオモチャみたいに言うな。そんな相手に身の回りの世話をさせてたら、堕落するぞ。古代ローマ人が奴隷ばっか使ってダメになって滅びたのは知ってるだろ。この屋敷だってキレイに掃除してはあるが、暗いし、風通しが悪いし、空気が淀んでて健康に悪そうだ。これもお前の命令だろ」
「ええ。私、外の空気ってキライですから。あとキンジ、ローマの奴隷制度は」
「歴史の授業は置いとくとしてだ、お前の生活力は俺以下って事だよ。いわゆる天才肌の人間には多いタイプらしいが……そういう暮らしを見てたんじゃ俺も息が詰まる。なので、お前の生活を良い方向へ導くために、俺のメイドを呼ぶ。明日からここへ勤めさせてやれ。これは賭けだ。そのメイドがお前の気に入る事をしたら、星1つよこせ。ミスとか悪さをしたら、星1つ減らしていい」
「私の生活を、良い方向へ？　今でも十分に良いと思いますけど。でも、キンジのメイドというのは私も興味が湧きますわね。よろしい。その賭け、受けましょう」
――よし。賭けと聞いてうまくノッたぞ。
俺がメヌエットと賭けをしても空振りしかねんが、リサを代打に立たせればホームラン間違いなし。

武偵高の男子寮で見たが、リサには女子に気に入られる神がかり的なスキルがあるからな。あのアリアにすら瞬時に取り入った神業、また見させてもらうぞ。

メヌエットの部屋で、他に何か星を取れそうなネタは無いか考えていると……

俺に手伝わせて、なんでか車椅子からベッドに自分を座り直させたメヌエットが、

「キンジ。ブーツを脱がせて。私には自分ではできませんから」

そんなお願いをしてきた。

「ん？　ああ、いいけど……」

と、俺はベッドの前で片膝をつき、茶色い編み上げブーツから靴紐を外していく。

「このブーツは脚を締め上げているの。お医者様がそうするようにとの事ですので。でも、夜には外していいのです。ほら、ちゃんと前を向いて。左足も脱がせなさい」

メヌエットは、こつん。俺の頭をアンティークのパイプ――チェリーの精油をスプレーした綿を入れ、香りを楽しんでいるらしい――で叩く。

「……」

まあ、そういう事なら手伝うけどさ……ううん。なんだそのパイプ。

普通の男なら『いいニオイだなぁ』で済む香りなのかもしれんが、女子スメルにヒス的トリガーを引かれる系男子の俺にとっては危険な香りだ。甘酸っぱい。女子力が高すぎる。

それで女の子を意識させられた上で、ブーツを脱がせたりしてたら――

しまった！　さほど中が蒸れてなかったのが不幸中の幸いだが、少し吸っちまった。
外したブーツから香った――これまた女の子丸出しな、メヌエットのアンヨの甘い香り。
現代社会では恥ずかしいニオイとされるものだが、つま先や腋下といった人体の部位が匂いを発するのは……動物だった頃の人類が地面や空中に体香を残し異性に出会いやすくするための、いわばフェロモンだからだ。なので現代でも女子の上履きとか靴とかを盗む男は後を絶たない。
ていうか、なんで女子って万国共通で頭のてっぺんからつま先までいい香りさせてんの。この世は闇だぜ。
などと、一層メヌエットを女子として意識してしまってから改めて見上げると……
目の前が、これまた大変な光景になってる。
つまり俺は今、ベッドに座った女子の前に片膝をついて頭を下げてるわけで。
メヌエットはブーツを脱ぐために膝まで厚手のスカートをたくし上げており、水平方向、その奥は――スカートの影になってるから、ほぼ見えないんだが
露わになった、眩しいほどに真っ白で温かい、しかし本人の意思では動かせない足。
（……『ご覧の通り、私は力ずくで何をされようと抵抗できない体です』……）
って――いやいやいや！　そんな事は人として絶対に考えちゃいけない事だぞキンジ！
キンジ？　いま、なにを考えているのかしら？」
ナナメ上から掛けられた声に、ハッと顔を上げると――
メヌエットはスカートを抓み上げ、ニヤニヤと俺を見下ろしていた。

こ、コイツめ。俺をからかって楽しんでたんだなッ。

「お前、わざとかよこの位置関係。ウソだろ、医者に言われたなんてッ」

「だって、少し気分を高めさせてあげないと次の命令をスムーズに聞けないでしょうし」

「何だよ、次のって……」

「服を脱がせてくださいな。下着まで全部。そしてバスルームで全身を洗ってちょうだい。恥ずかしいとは感じませんから、ご心配いりませんよ。貴族と平民は、別の生き物です。あなただって、犬猫の前で着替えることは恥じらわないでしょう」

メヌエットは涼しげな顔で、両手を『抱っこして』みたいなポーズで前に出してくる。

それ――『脱がせろ』――のポーズって事かよ……!?

「人浴介助してくれたら星1個あげましょう。してくれなければさっきの星を1つ剥奪」

「ちょっ……!」

いきなりの展開に、俺は慌てて後ずさる。そ、そこに星を賭けてくるか……!

「さあ。早く」

メヌエットは碧眼を色っぽく細めて、手をフリフリ。俺に服を脱がせろと促す。

マ、マジでそれ、やんなきゃならんのか。だが星は色金問題の解決に繋がるものだ。

アリアのために、やらなきゃ――なのか。

だがその妹に、そんなことをッ……と、俺がテンパっていると。

「フフッ。キンジの、いくじなし」

メヌエットはニヤァと目を細め、
「冗談ですわよ。入浴はいつもサシェとエンドラに手伝わせてますので、ご安心を。でも着替えは持ってきてもらおうかしら。ネグリジェはそこの引き出しの中央、下着は左」
背中を曲げて、クスクス笑ってる。
もう怒る元気もなくて、ゲンナリとうなだれる俺は……
星を減らされたらマズイので、言われた通り引き出しをまさぐって着替えを出す。
赤いレースのショーツだわで、血流に悪い。ほんとに何なんだよ、この14歳は。天才なだけじゃなくこれがまた暗くなきゃ向こう側が透けて見えるような薄っすいネグリジェだわ、数万はしそうな魔性の女のタマゴ、俺の天敵じゃねーか。
ほこほことチェリーみたいないい香りをさせ、髪を可愛く三つ編みにしたメヌエットは、俺がバスルーム前のカゴに放置してきたネグリジェにガウンを重ねて戻ってきた。
浴室ではメイドさんたちも裸でメヌエットを洗ってたらしいので、俺は余計な事を考えないようメヌ部屋の壁ぎわに座り、某国民的モンスターたちを151匹数えてたよ。
「ただいま、キンジ」
楽しげにそう言ったメヌエットは、座り込み中の俺に背を向けて……
かちゃかちゃ。かちかちっ。デスクトップのパソコンで、ネットゲームを始めたぞ。
「……」

黙って後ろから見てると、『ムニュエ』というHNの、ゲーム内のメヌエットは……
本人とは似ても似つかぬ、水色髪でショートカットの元気っ娘キャラ。
中途半端にファンタジーが入った学園モノっぽい世界観のゲームらしいが、その世界でバスケットボールやらクリケットやらの対戦をしちゃ好成績を上げてる。
「……お前、ゲームも上手いんだな。だが夜更かしすんなよ？」
「このゲームは日本製で、プレイヤーの多くも日本人の女子なのです。時差があるから、夜にならないと友達がなかなか来ないの」
こっちを振り向きもせず語るメヌエットは、このネトゲにハマってる感じだな。
しかし今また星の取っかかりになりそうな単語が出たぞ。友達と来たか。
「何人ぐらい友達がいるんだ、そのゲームのプレイヤーに」
「そんな事、キンジに関係ないでしょう」
「分かったぞ？　いないんだろ。お前もアリアと同じで、友達作りがヘタそうだからな」
「神に誓って、います」
「じゃあ何人だよ」
「……1人です」
ぷーっ。やっぱりね。ネトゲ世界ですら、1人しか友達がいねーでやんの。
だが笑うとまたお馬さんゴッコの刑が待ってる。まだ笑うな。こらえるんだ。
「まあ友達は数じゃないからな」

「100%同意します。人は100人の悪友より、1人の良き友を持つべきですからね。ほら、この子ですよ。モモコというHNです」

と、メヌエットがハート型のカーソルでポした『モモコ』ちゃんは……

ふわふわしたオレンジ髪の、女の子女の子した感じのキャラだ。

といっても女子向けらしいこのゲームはキャラデザの女子力が高くて、どんな子なのかピンとこないな。お花とかリボンだらけで、みんな似通って見える。

もっとこう、みんなナイフとか銃とか装備しないのかね。

「……会ったことはあるのか？」

「日本とは距離があるでしょう」

ゲーム画面の中でのメヌエットは、とったか自分の足で走り回ってる。

それを操る現実のメヌエットはマウスさばきも堂に入ったもので、ネトゲ廃人候補って感じだよ。

ラクロスを終えたメヌエットはモモコと日本語の文字入力でチャットをし、「ふふっ」「もう、エッチね」などと時々独り言してる。ゲーム世界の自分になりきり、没入してるみたいだ。

そのジャマをするのも無粋なので、俺は黙ってて……携帯を出し、起動時に見えたゲームタイトルとモモコというハンドルネームで検索をかけてみる。

このメヌエットと友達になれるという非凡なモモコさんは、すぐ見つかった。

ツイッターのアカウントがあったぞ。鈴木桃子。本名かは知らんが、平凡な名前だな。

（うまくすれば、コイツから星取りに繋がるような……メヌエットの攻略法が聞き出せるかもしれないな）

こっちはこっちで高難度のゲームみたいな自分の現状に、ため息していると

そっちのゲーム内でのメヌエットはモモコとほっぺにチュウし合ってから、バイバイ。

ゲームからログアウトして、現実のメヌエットは満足げに、息ついてる。

そして寝るつもりなのか、部屋の奥のベッドに向かって車椅子を自走させていった。

じゃあ、俺もおいとまするか。

「明日もいや、緋緋色金の事を教えてもらえるまで毎日来るからな。俺は武偵として借金取りをやった事もあるが、ヤクザよりしつこいって評判だったんだぞ」

と、俺が立ち上がって言うと――

「もう深夜ですよ。外は危険です。この部屋に泊まっていきなさいな」

「おい。お前さっき男ぎらいとか言ってたろ。軽々しく男を部屋に泊めるとか言うな」

「そもそも私は、この家では応接室以外で男性に会った事もありません。つまりキンジは、最初から特例なのです」

「お前も男をクサい呼ばわりしたから言い返させてもらうとだな、この部屋は女ぐさい。俺はそういう所じゃ寝付きが悪いんだよ」

「泊まってくれなきゃ、星をどうしようかしら」

あくびしながら、また星システムをチラつかすし……腹立つなぁ……

だが、なんか俺もつられてあくびが出てきた。やっておいっ、もう夜中の2時じゃねーか。

「――お、おい。分かった、分かった。俺もそこの平日だろ。朝起きれなくなって、学校にチコクするぞ」

ネトゲで夜更かししたメヌエットに、俺が保護者のような事を言うと――

「今のは失言ですよ、キンジ。私、学校の話はキライです」

「でも義務教育とかあるんだろ」

「私に必要だと思いますか？」

ちょっと怒った顔をこっちに向けてきた、メヌエットは……

義務教育が『無い』とは答えなかったな。

ネットゲーマーで、不登校児でもあるのか。時代の最先端を行ってるな。

だが……その不機嫌な表情で読めたぞ？　つまり、メヌエットが学校に行かなくなったのは――

「ははーん。お前、イジメられてたんだろ。性格がそれだからな」

俺が『やれやれ』のポーズで挑発するように言ってやったら、メヌエットは……

……黙った。

そして……

けっこうな時間、怒った顔のまま無言で俺を睨み続ける。

「そうよ」

と、ちょっと震え声で言ってきた。
あ……やっちまったかな。
「星1つ減らします。私は確かに2年前まで聖エレノア・シニアスクールという女子校に通っていました。ですが、日本の諺にもありますでしょう。『出る杭は打たれる』と」
「気に固くなったメヌエットの声に、俺は星勘定も忘れて……心配になってきた事を、聞いてしまう。
「……お前、反撃したな？」
「それがどうかしましたか」
「殺しちゃいないだろうな」
「殺してはいませんよ。ただ、もう学校に来ないようにと言いましたが」
コイツ……抜いたんだな。
一般人、それも少女相手に、その舌の刃を。
「ですがイジメとは不思議なもので、私に消火器を投げつけて車椅子から叩き落とす係の主犯格を消しても――その係が代わるだけで、行為は続くのです。地を這う私にボールを投げたり泥水をかけたりする人数も、まるで兵が補充されるように減らない。それを1人また1人消していくうちに……生徒は、どんどんいなくなって……最後には、それが私の仕業と気づいた学校側から言われたのです。『もう来ないで下さい』と」
過去のトラウマで大きな両目いっぱいに涙をためて、それでも気丈にそれをこぼすまいとしている

メヌエットは……

学校が、合わなかったんだ。

北池袋高校で落ちこぼれて孤立してた俺とは逆で、周囲より知的レベルが高すぎて。

だが、きっと学校には通いたいんだ。友達が、欲しいんだ。涙が、それを物語っている。この鈍い俺にも、それが伝わってくる。

頭が良く生まれすぎたせいで……

今やメヌエットが通える学校は、あんなゲームの中のまやかしの学園だけ。

友達も、データで作られたニセモノのメヌエットを見て友達になってる子だけ。

……そういう、事なのか……

サシェとエンドラに、自分をベッドへ運ばせたメヌエットは――

あれから俺とは一言も喋らず、そのまま毛布を被って寝てしまっている。

俺もイヤな事を思い出させてしまった引け目で、声をかけられないまま座って寝た。

セントラルヒーティングの暖房が壁に沿って有るので、そこに背を寄せていると……

暖かいというより熱くて、やはりあまり深く眠る事はできずにいるがな。

そんな、深夜3時頃。

「……う……」

メヌエットの呻くような声がして、俺は微妙に目を覚ます。

「……やめなさい……もう、やめて……いやよ、もう私は、あなたたちの……気に障るのなら、試験なんか全て、白紙で提出するから……！」

魘されてる。

さっき学校の事を思い出したせいで、その悪夢に魘されてるんだ。

「……痛い……熱いっ……！　誰か、誰か服の火を消して……！　私は、自分ではできない……！　ああ、車輪を壊さないでっ。私はそれがないと、どこにも……ひいッ……！」

ただ事じゃ無い感じなので、俺が立ち上がった時――どたっ！　と、メヌエットがベッドから落ちる音がした。

「メヌエットっ！」

叫んで駆けつけると、メヌエットはベッドの右脇から床に転落していた。

元から青白い顔を蒼白にして――今のが夢だったと気づき、しばし呆然としている。

落ちた拍子に、その動かない足は投げ捨てられた人形のように曲がり、重なり、開いてしまっていた。

「……うっ……」

受け身も取れずに落ちたからか、メヌエットは苦しげに身もだえしてる。

「ケガはないかッ。背中や頭は打ってないか!?」

そう言って駆け寄った俺よりも――とたとたたっ！　と階段を駆け上がって走ってきたサシェとエンドラの足音に慌てたメヌエットは、

「――は、入ってはなりません！　こっ……この私を見てはなりませんッ」

体をねじるようにして扉の方を向き、その向こうへ厳しく叫んだ。ひどい体勢のままで。

貴族の――しかも次期当主と目されている重鎮メヌエットは、家の関係者に無様な姿を見せる事ができないのだ。下々にナメられたら、おしまいだから。

サシェとエンドラもお嬢様の命令だし、あと夜中に男女が同じ部屋にいるわけだしで、いきなり入ってくることはしない。

「お前たちは戻りなさいッ。誰が上がってこいと命じましたか！」

金切り声を上げたメヌエットに叱られて、メイドたちの気配はおずおずと廊下を去っていく。

となると助けられるのは俺しかいないので、手を貸そうとすると――

ぱしっ。と、メヌエットは俺の手を叩いて払った。

「手助けなど要りませんッ。わ、私は……自分で上がれますから！」

そう言って、ベッドのシーツを掴み――か細い腕で、体をうーんとねじり――なんとかベッドに寄りかかって座るような体勢になれたメヌエットは、右足、続けて左足を両手で運ぶようにして乱暴に閉じる姿勢に持っていく。

「……はぁ、はぁ……」

その時点で息切れしていたメヌエットは、歯を食いしばり……

今度はベッドに這い上がろうと、全力でシーツを引っ張っている。

だが無情にも、その動きではシーツがズリ落ちてくるばかりだ。体は、全く上がらない。

「くっ……くっ……」

と、髪を振り乱して頑張るメヌエットだが……どう見てもムリそうだった。

なので、俺はバリツが怖かったものの――

その軽い体を、持ち上げてやった。

肩を貸すだけじゃ上手くいかなさそうだったから、お姫様抱っこで。

「いやっ！　いやっ！　触れないで！　私は自分で上がれると言っているでしょうっ！　お前、私が足が悪いからって――」

プライドの高いメヌエットは、今度は顔を真っ赤にしてパニックになってる。

だが、これなら馬蔦が来る恐れもなさそうだ。

「本当に自力で上がれそうなら、助けないつもりだったけどな。たとえ健常者が相手でも、誰かがムリしてたら助けるもんだろ。俺はお前を特別扱いしてるつもりはない。つまらん意地を張るな」

と言う俺の胸や肩に、メヌエットは――ぽかぽこぱかぽこ！

ハンマーパンチを連打してきた。このリアクションも、アリアとそっくりだなぁ。

だが、打撃技とは密着した状態では15%程度の威力しか発揮できないものだ。それでもアリアのパンチは本物の金槌で殴ってくるような破壊力があったが、メヌエットのは痛くも痒くもないね。

と、油断していたら――こつっ！　メヌもちょっと狙ったのか、俺の顎を掠めるようなアッパーがうまい角度で入っちまった。

瞬フラッと来て、よろけた俺は――どさっ。

ベッドにメスエットを押し倒すような形で、前のめりに倒れちゃったよ。

「……っ……！」

仰向けになったメヌエットは、その小さな体に覆い被さるような姿勢になった俺を……

「最低ですわッ……！　軽蔑しますわ。この私に、いたずらしようというのですか」

じわぁ、と、涙を浮かべた青い瞳で睨み上げてくる。

メヌエット本人から、そしてベッド全体から、サクランボのような叮憐な香りが漂う。

「いや、違うッ。俺はその、お前にヘンな事をしようとしたんじゃなくて……！」

と、俺が体を起こそうとすると――

メヌエットは、ぐいッ、と襟を掴んでむしろ自分に引き寄せた。

そしてアリアばりの殺人的な目つきで、しばらく俺にメンチを切ってから――

「本来なら、もう殺すところです。ですが……それなら、したい事をなさい。殺すのは、その後にして差し上げますから」

「し、したい事って……ッ」

「それはつまり、お姉様からキンジを奪うことになるでしょうから。お姉様が手に入れた良いものは、みんな私がもらう」

メヌエットは――

「それでよいのです。それで、公平なのです。お姉様は優れた肉体を持ち、自由に動けて、人々に敬愛され、こんな恋人まで　あれもこれも、手に入れてくる。私には何も無い！　こんな体に生まれ、この頭脳を恐れられ、誰からも嫌われて、偏屈者と呼ばれて、ここで　生を孤独に送る定め

なのです！　これではあまりに不公平でしょう！」

メヌエットは――アリアが、うらやましいんだ。

ねたましいんだ。同じ姉妹でありながら、自分の欲しいものを何もかも持っている――世界中を元気いっぱいに飛び回り、雑誌の表紙になるほど人気がある、自分とは正反対のアリアが。だから……

私はそのために、お前に会ってやったのです。お前が学校の話などしたから時刻は変更になりましたが、初日にこうなる推理も覚悟もできていました」

……俺を自分のものにしようとして、アリアから奪い取るつもりでここに縛り付けた。

アリア本人を王子に押しつけるという、周到な準備までして。

私は抵抗しませんよ。ですが、決して声は上げませんよ。私はお前を愛したのではなく、お姉様から奪うためにそうさせるのですから。私がお前の女になるのではなく、お前が、私の男になるのです。あの人の恋人は、これで私のものよ」

幼くても、女は生まれつき女――という事なのか、見た目よりませていたメヌエットは……ぎゅーっと目を閉じ、手を襟から離して、ばしいっ！　俺の両頬を同時にビンタするように挟み込み、いきなり――

キスしようとしてきた。

その薄ピンクの唇に、すっ……

と、俺は、立てた人差し指をあてがって制止する。

いつの間にか、すでに完全になれていた――ヒステリアモードの、優しさで。

「恋人、ねえ。1日8回発砲してくる恋人なんて、いるのかな」

そして、自分がキスしたものが俺の指だと――勿忘草色の瞳を見開いて気づいたらしいメヌエットに、苦笑いしてアリアの陰口を呟く。

「それと、メヌエット。愛もないのに……そんな事をしても、傷つくだけだよ」

まずは落ち着かせようと、優しい笑顔を向けた俺に……メヌエットは、

「哀れみも愛のひとつでしょう。この――哀れな私に、お前は情けをかけなさい。自分のひとつやふたつ、私に与えなさい……！」

どうも俺より高度な恋愛論を語ってくる。

そっちに話を傾けない方が、よさそうだな。年下だしアリアの妹だということもあって踏みとどまれているとはいえ、この子には魔性とでも言うべき異様な魅力があるし。

相手が天才児メヌエットでなくても、こういう時の会話は危険なんだ。

これはカナの言葉だが、会話とは男と女をつなぐ最初の接続。愛を語れば、話は情へ、情は躰へ次へ次へと、本能がその繋がりを強めようとするものだとか。だから、

「哀れ……か。自分を哀れむ感情が、君をそうさせているんだね。だが、俺はその感情を必ずしも悪いものとは考えないよ。自分が全てを持っていると思っている人間は、自分を正視していない者だ。完璧な人間なんかいない。だから人は努力もするし、いろんな事を成し遂げられる。そのためには、まず不完全な自分を正視する必要があるんだ。時には、自分を哀れむことも。メヌエット

は、それができている――成熟した人物なんだ」
俺は人生訓みたいな話をしながら、メヌエットを引き起こしてあげる。
手で足を寄せ、女の子座りになったメヌエットは……
ベッドの縁に腰掛けた俺を、ナナメ後ろから見つめている。
「逆に、何も持ってない人間もいない。メヌエットが言う通り、アリアはいろんなものを持っている。僅かながらだけど、俺もね。もちろんメヌエットだって、持っているんだ。持っている人は自分で持っていることを忘れてしまうものだけど、豊かな財産、高い知性――そして、こんなにかわいらしい姿も……」
ここで振り向いて、その金髪と白い肌の間に手をさしのべ……
そっと頬を撫でてあげると、ぱしっ。
メヌエットは俺の手を、手の甲で叩いた。叩いても、キンジの言葉で……私は3つの事が推理できましたわ」
それでいい。今夜、君と俺は、それで。
「お為ごかしの人生相談みたいな話はよしなさい。
まだ俺を睨むような眼差しで、その奥底までを見抜くようにしてくるメヌエットは
「1つ。キンジは本気で、私を哀れんでいない。この体を見ても、この暮らしを見ても、本当に哀れだと思わないのですか」
「思わない。何・つ」

「……2つ。私は今まで、私に本気で接する人物は――この世で、お姉様だけだと思っていました。ですがもう1人。今……キンジは私に本気で接している。恐れも、嫌悪感も、克服している。あなたは私のみならず、あらゆることに本気になれるのだわ。きっと――お姉様のためになら」

「女性の前で他の女性の話はしない主義だけど、姉妹とあれば特例かな。その通りだよ」

そこでメヌエットは、その眼から怒りの表情を、解いた。

そして俺から目をそらし、切なげな瞳を窓の外へと向ける。

ロンドンの空にも、星は輝いていて……

「……しばらくの沈黙の後、メヌエットは再び俺を見た。

どこか気持ちを切り替えたように、改めて、出会った時の落ち着きを取り戻した感じで。

「そして3つめ。それがあなたの特殊能力なのでしょう」

アリアと似た指つきで俺を指したメヌエットの目つきが、改めて鋭くなる。今までとは違った、本来のメヌエットのムードで。

小舞曲のステップの如く、順を追って話して差し上げます。あなたは数分前から口調や喋る内容、目つき顔つきが今までとは変調しました。脳神経系がサヴァン症候群のように亢進した状況と診ます。何らかの向精神薬を用いた様子は無かったから、それはあなたの内部で処理された――いわば、体質。それが瞬時には自らの意思で出来ないことも、既に判明しています。従ってそれは、目覚めてから変調するまでの間に起きた何かの出来事に対する心理的・身体的反応によって促され

た変化。そしてその間、起きたことは少ない」

「……しまった。つい……」

見せてしまってたな。この目ざとい子に、この自分を。割と詳らかに。

「……」

俺の額に、暑さによる反応とは異なる冷や汗が滲むそれを見て取ったメヌエットは、勿忘草色の瞳で俺の目を見つめ直し――

「ヒステリア・サヴァン・シンドローム」

推理を、語った。

「……参ったよ。たった半日で、それを見抜かれちゃったか。

さすがシャーロック・ホームズ4世。この子に隠しごとはできないんだな。

俺は何も言わず、微苦笑する事で――回答に、代えた。

「極めて珍しい特異体質ですから、推理に時間が要されましたわ。お姉様はそれを？」

「知ってるよ。メヌエットと違って、気づくまで10ヶ月かかったけどね」

「まあ、では僅かに先を越されていたのですね。ああ見えてお姉様も、やることはやっていたと」

「少し誤解があるかな。俺のこれは、その……興奮は相手が女性なので気遣って言ってしまってから――失言だと気づいた。

「――まあ。それでは、接触したところを見てみたいですわね」

俺の言葉にメヌエットはむしろ前のめりになってしまい、そんな事を言ってくる。

「その結果これから私とキンジが一緒になるのですから、もう星も要りませんでしょう。星を10個あげますから、それで……お姉様のもとから、私のもとにいらして」

貴族の子とあって、婉曲的な物言いだが……

メヌエットの欲求＝意味するところは、俺にも察しがついている。

「ここで星を使ってくるんだね。それには、逆らえないな」

「男女のこれは私にとっても、映像で見た事はあっても＝具体的に知れずにいた神秘のひとつなのです。その知識を得る絶好の機会を、みすみす逃がしはしません。ああ、あと……お手数ですけど、ひとつお願いが……映像によれば、女性は我を失ってしまうことが多いようですので……」

と、メヌエットが、

「……脚は、キンジが支えていてくださいね」

俺の背に触れてこようとしたところで＝

俺は、ベッドから立ち去る。

そして窓際に立ち、この国でも見えるオリオン座を眺めた。

「星が……綺麗だ。夜にあれを10個も取ってしまったら、ロンドンの夜景が台無しだよ」

そう言って振り返り、キョトンとするメヌエットに……再び、優しく微笑んでみせた。

「星はいずれ、お昼に働いて集めるとするよ。ロンドンのみんなに気づかれないようにね。だから＝もう、おやすみなさいませ。お嬢様」

貴族に従僕がするように、俺は胸に手を当てて、礼し……
改めて、壁際に向かう。それでも、近くにはいてあげようと思って。
メヌエットは……
ちょっとだけわざとらしく腕組みして、ぷく、とほっぺを膨らませた。
初めて年相応の、14歳らしい、子供っぽい仕草で。
「今までの人生で一番、お姉様がうらやましくなりましたわ」
そう言って、ぱたん。割とアッサリ改めて横になってしまう。
まあ、メヌエットの事だ。結局こうなる、ってことも……
――推理できていたのかもね。

早起きしてシャワーを浴びてから、メヌエットを乗せた車椅子を押して食堂へ向かう。
メイドたちに手伝わせて例のフリフリのドレスに着替えたメヌエットが……星カードを出しなさいというので渡したら、
「昨日お前は学校の話をしましたからね。星を1つ消します」
もうやだこのシステム。メヌエットの気分次第で増減決めるの、やっぱズルくない？
「あと昨晩のことは、黒星3つです」
「なんだよ黒星って」
「マイナスの星です。キンジは私をフッて、恥をかかせましたから」

ボールペンで3つ描いた雑な星をグリグリと塗りつぶして、メヌエットは頭にかぶったボンネットの庇の下から俺を冷たく見上げてくる。

なんだよその新ルール。

ヒステリアモード俺は気に入ってくれてんのに、ノーマル俺は不条理に虐待。この辺の手のひらクルー感も姉妹揃って同じだな。

星を稼ぐどころか黒星　借金を抱えてしまった俺は、ゲンナリとカードを胸ポケに戻す。

「……」

ふてくされて、1階の廊下を渡る途中……

ベーカー街の通りに面した窓からは、通学中の女子高生の一群が見えた。

曇り空の下、揃ってラクロスのスティックを担いでる。この国にもあるらしい、部活の朝練に向かうとこらしい。

チェック柄をした緑のプリーツスカートや白いブラウス、ライトブラウンのブレザーは……日本の女子高生と、似てるな。何が楽しいのかキャッキャウフフと笑い合ってお喋りしてるあたりも。何の悩みもなさそうで、無性に腹立つぜ。

「うるせーなアイツら……天気も悪いのに、ご苦労なこった。大雨降れ。ラクロスなんざ試合中止になっちまえ」

星カードの件でイライラしてた俺が、リア充女子たちにネクラな呪いをかけていると、

「そうなる可能性は、低くないですよ。雨は伴わないでしょうけど、今日は雷になりそうですか

ら。どんな試合中でも、ラクロスには雷鳴が聞こえたらそこで中断というルールがあるのです」

メヌエットはへの字口で、窓の外を敢えて見ないようにしている。

これは……自分も、やりたいんだろうな。部活。ゲームでもやってたし、ルールにも詳しいみたいだし。でも学校に通ってないからそもそもできない。何より友達がいないし。それで、拗ねてるんだ。

つまり不幸にも女子高生たちが通りかかったせいで、一層不機嫌になってるという事。

これではまた黒星が増えちゃうぞ……と、ビクビクしていると、

「……んっ……」

食堂に入る前の玄関そばで、メヌエットがくぐもったような声を出した。

「どうした？」

「どうもしていません。自然が私を呼んだのです、サシェかエンドラを呼びなさい」

自然が、メヌエットを……？　庭でも散歩したいって事かな。

メヌエットのために働く、すなわち星を稼ぐチャンスを逃したくなかった俺は、

「そんなら中庭がいいだろ。あのハーブ園が茂みみたいになってるし」

と、自然感のある中庭へのドアをガチャっと開くと――冬の寒風が当たってきた。

その寒さと今の俺の発言になぜか真っ青になった、メヌエットは……

「こっこの！　貴族の淑女に何という事をさせようとするのですか！」は、早くメイドを呼びなさい！　間に合わなくなったらどうするのッ！」

「俺だってお前に星をもらうために、生懸命なんだよッ。間に合わないって何がだよ？　手伝ってやるから言えよ、何がしたいんだッ」

「この馬鹿！　無能！　平民！　あっあっ、もう、ちょっと……は、早くメイドを！」

青くなったメヌエットは、メヌエットにしては珍しくマジでテンパって――びしばし！　庭の手前にあったホウキで俺を叩いてくる。この急激なヒートアップもアリアと同じだ。俺がホウキを防ごうと伸ばした手に、かぷうっ！　と噛みついてきたところも。

……ケータイで調べたところ、『自然（Nature）が私を呼んでいる（calls me）』とは……

要するに『トイレへ行きたい』という意味の、今日日使われない気取った隠語だった。

その後エンドラにダッシュでトイレ方面へ運ばれていったメヌエットは、真っ赤にした顔を両手で覆って泣いちゃってたよ。

朝からお嬢様を泣かせちゃった俺は、しかしここで機転をきかせ――

今度こそ俺を言葉責め＆射殺で完殺する的な顔でリー・エンフィールドを抱えて戻ったメヌエットに、未だに『自然が』の意味を分かってないフリ。「どこ行ってたんだ？」と、アリアで鍛えた『どんなに怖くてもシラを切り通す』スキルを発動させた。それに対し、カッカ来てるメヌエットは推理力も大幅低下するらしく「どっどこでもいいでしょうそんな事は」と空気銃を収めてくれたよ。

ここは、俺をアホだと見くびってくれたおかげで事なきを得たが……

こんなんじゃ遅かれ早かれ、カードが黒星で真っ黒になるぞ。

と、内心震え上がっていると――

「おはようございます！　ご主人様、お嬢様」

ここで心強い援軍が、サシェに導かれて玄関からやってきた。

メープルシロップのような甘い香りと共に、挨拶一発で殺伐としたホームズ家の空気を和らげた。

「リサ！　よく来てくれたな。メヌエット、紹介するよ。これが昨日話した俺のメイド、リサだ。リサ、こちらがアリアの妹、メヌエットお嬢様だ」

セーラーメイド服でニコニコ笑顔の、リサ――

第3のメイドがスカートを広げ、ぺこり、とお辞儀すると、

「まあ。かわいらしいメイドね。あなた、出身はオランダでしょう。そのヘッドドレスのフリルの折り方はアムステルダム南地区のメイド専門学校の伝統芸ですし、言葉に今風のホランド訛りがありますよ」

メヌエットは初対面の人によくそうしたというシャーロックのように、推理力のデモンストレーションをしてる。

「なんと聡く、なんと高貴で、お美しいお嬢様でしょう。心から敬服いたしましたと共に、お仕えできる幸せに深く感謝いたします」

エラソウに差し出されたメヌエットの右手の甲に、リサは小さく口を付ける素振りをし……実際

には口を付けないイギリス流のマナーを守った事も、メヌエットお嬢様のお気に召した様子だ。

リサはすかさずトランクを開き、

「先ほど、ワトソン卿のご自宅の庭でシナモンの葉より集めた朝露です。お近づきの印に、どうぞお納めくださいませ」

ガラスの小瓶に収めた僅かな水を、ワイロっぽく渡してる。

『朝露を美しい女の顔に付けると、より美しくなる』――イギリスの旧い言い伝えまで、よくご存じね。少しおべっかが過ぎるようですが、よろしい。使ってあげましょう」

よし。ツンツンした表情のままだが、メヌエットがリサを採用してくれたぞ。

実は満月の夜に死にかけると魔獣になって敵味方関係なく周囲を殲滅しちゃったりするお茶目な秘密もあるメイドなんだが、それはいくらメヌエットにもそう簡単に推理できんだろう。

これからしっかり働いて俺の作った黒星を返し、さらに星を稼げよ、リサ。

と、俺は出来の悪い亭主みたいな事を考えるのだった。

ワトソン監督をパクってリサを起用したキンジ監督の采配は、これが大成功。

イギリス式朝食とは普通、煮豆みたいなのとパンとオレンジジュースらしいのだが……

それはそれで栄養バランスの悪くないメニューを放棄して、リサはサシェと共に巨大なパフェをメヌエットに作ってきた。

しかしこれが味とカロリーを損なわず、きちんと六大栄養素をも摂取できるというリサ特製パ

フェ。しかも合成甘味料等は一切使用せず、全て自然食材から造られているという魔法のようなシロモノだ。

メイド力ストップ高のそれをペロリと食べたメヌエットは、

「パフェとは食の美術。芸術のひとつよ」

一般論でこのパフェを間接的に褒めるという回りくどいご賞賛。そこにヘコヘコ現れた俺のカードから「これを毎朝作らせなさい」とのお言葉と共に黒星を全部消してくれた。

それだけじゃなく、洋館の中のリサはまさに水を得た魚。

サシェ&エンドラに幾つか話を聞きながら、メヌエット家の各室をザッと見回したかと思うと……

タイムズ、エクスプレス、ミラー高級紙・大衆紙を問わず買ってきた各社朝刊から、メヌエットが興味のありそうな記事だけテキパキ切り抜いてリサ版スクラップを作った。

それをメヌエットが精油パイプ片手にフムフム読んでる間、今度は車椅子の横についてお髪をブラッシング。その手つきは美容師として見ても上位クラスで、メヌエットも凄く気持ちよかったらしく、「この朝の習慣を毎日させなさい」と星を1つ下さった。

――いいぞ。

ご主人様　俺の失点を、メイドがどんどん取り返してる。メヌエットもリサの星を俺のカードに付与することを疑問視するムードはない。『メイドの手柄は主人の手柄』という一見理不尽なシステムが、ヨーロッパでは通用するらしい。

昼食の準備が終わった頃には、サシェ・エンドラもリサを見てると勉強になるのかもうちのメイドをセンパイ扱い。

さらにリサは昼食中の、

「私は料理ができないの」

というメヌエットの発言を捕捉し、食後の、服が終わると言葉巧みにキッチンへと案内していった。

メヌエットが厨房に入るという事は天地がひっくり返ってもあり得ないと思われていた事らしく、サシェとエンドラは腰を抜かしてるよ。

「それではチェリー・タルトを一緒に作りましょう。お茶の時間が楽しくなりますよ」

「いやよ。そんな下女の仕事はしないわ」

などと最初は拒否っていたメヌエットだが、リサはそこも持ち前のトーク力で繋ぎ――あのわがままなメヌを、キッチンに留め置くことに成功している。

そしてボウルを泡立て器でカシャカシャやる動きで、袋みたいに両胸を包むデザインのセーラーメイド服内でリサの巨乳がフルフル揺れる様に……

「胸が大きいのは羨ましいわ」

そんなご発言をなさったメヌエット様を、また捕獲。

「いえ、このような胸は肩がこるばかりのものですが　この作業が二の腕と胸の筋肉に働きかけ、腋下のリンパマッサージをしたのと同じ効果があり、バストアップに繋がるとブリティッシュ・メディカル・ジャーナルの記事に書かれておりました。医学的な論拠は不十分でしたが、統計的には事実のようです。私の胸も日常的にこの作業をしていたため、こうなった可能性は否定できません」

「代わりなさい。それとその話、アリアお姉様には機密となさい。これでお姉様との差を広げ、悔しがらせてやりますわ」

などとメヌエットお嬢様がボウルと泡立て器を持ったものだから、サシェとエンドラは気を失って揃って真後ろに倒れ、俺が両手で背中を押さえるハメとなった。

「お望みでございましたら、豆乳やアーモンドも入れましょうね。これは成長期の女性の胸を大きくすると言われている食材です」

リサがそんな事を言うものだから、メヌエットは目の色を変えてタルト作りに本格参加。ブチブチ文句を言いながらではあるものの、やり始めたら始めたでオーブンにタルト生地を入れる所まで一緒になって手伝ってる。

「これで何分待つの」

「約１７０℃で30分お待ち下さい。その間に、固めに泡立てた生クリームとカスタードを作りま

しょう。その後、このパウダーシュガーを……」

「ふりかけるのね。どう振るの。こうかしら？」

凝り性なメヌエットは隅々までタルト作りをやろうと、勇み足で粉砂糖を空中に振る。

それが鼻腔にちょっと入ったらしいリサが――

「いえ、そうでは……っくしゅん！」

メヌエットから顔を逸らし口元を押さえた上でだが、クシャミをした。

その時、ぴょこん！

（……！）

出、出たっ。出ちまった！　金髪ロングの頭の上、扇子みたいにフリルを広げたメイドカチューシャの後ろに、ケモノ耳がっ！　クシャミでも出んのかよ！　ゆるいな！

どうもシッポも出ちゃったらしく、スカートの後ろ側もモコリンと膨らんだリサに……

「まあ！」

「もっ、申し訳ございませんお嬢様！　私ったら、うっかり大変な失礼を……！　お詫び申し上げますっ、んっ、んゆっ」

謝って頭を下げたリサのケモ耳を、メヌエットは碧眼をキラキラ輝かせて鷲づかみ。

それは人が耳を引っ張られるような事らしく、リサはちょっと悶えてるね。

「これはどうなっているの!?　かわいらしいわ。この耳の付け根の頭皮を観察させなさい。星を1つあげるから。ほら、倒れてないで早く天眼鏡を持ちなさい、サシェ、エンドラ」

これをうっかりで済ませようとしたリサもリサだが、俺の想定以上に浮き世離れしてるメヌエットお嬢様は、実はケモノっ娘でもある新人メイドに驚くでもなく興味津々。

そんなのを雇わせた罪で星を減らされるかと焦ったが、むしろ星を振る舞って下さった。

だが、リサ。お前、シッポの方は意地でも隠せよ。

バレたらスカートめくられて、オシリも観察されることになるんだからな。

イギリスには料理をいっぺん大量に作り、それをちょっとずつ食べていく習慣がある。なので、オヤツは3日連続でチェリータルトだった。メヌエットはすっかり自分で作った気になってて自慢げだったが、実質リサが作ったタルトなんで美味かったよ。

そのタルトをリビングで食べながら、3日目の昼過ぎ

(時間は……そろそろだな)

アンティークの置き時計をチラ見して、俺はメヌエットの車椅子の取っ手を掴む。

「あら。何かしら？」

「お前、昨日1回も外に出てなかったろ。気分が淀むぞ。1日1回は外の空気を吸えよ」

リサのおかげで、俺のカードには今や4つも星がある。初日に3つ、2日目に1つ。

しかしこの辺からメヌエットも出し渋りが始まってるらしく、今日はまだ0だ。

だが　俺も俺で、星獲得に向けては武侠憲章必勝5条の精神でもう新しい手を打ってある。

「外の空気なんか、排気ガスで体に悪いわ」

「まあまあ、そう言わずに。前に言ってたろ、賭け代が貯まったら――星を賭けて、何かギャンブルしようって。遅ればせながら、俺はお前にお誕生日プレゼントを用意したんだ。俺は星を4つ賭ける。勝てば倍付け、負ければパァでどうだ」

と、俺はリサがコツコツ貯めた4つの星を使った大バクチを持ちかける。

貴族が平民の前で見栄を張らなきゃいけないのと同じで、主人もメイドばかり働かせてゴロゴロしてちゃ面目が立たないしな。

「まあ。プレゼント？　どうせつまらないものでしょうけど、何かしら？　でも私も少し星を振る舞いすぎたと思っていたところよ。よろしい。その挑戦、受けましょう」

リサの内助の功をバクチで増やそうって発想は、いかにもダメ亭主って感じだけどさ。

よし、今回もノッてきたぞ。

「サシェ、エンドラ。外出します。肩掛けと膝掛けを」

肩掛けと重ねると暑くなるのでセーラー付け襟を外したメヌエットがそう声を掛けたら、双子メイドは「1年ぶりに!?」「お嬢様が外へ!?」とセリフを割ってビックリしてたよ。

白い息を吐きながら、今日は晴れてくれたロンドン・ベーカー街の歩道をメヌエットの車椅子をキコキコ押して、歩く。

1年ぶりらしいお外にも、メヌエットは特に感想ナシ。

おすまし顔で、シャーロックの形見のパイプからチェリー精油の香りをふかしてる。

「ここだ」

歩いて5分で着いた、そこは……

現代的なメリルボーン・ロードの角にある、ガラス張りの、お洒落で今風のカフェ。

「キンジに花を持たせるために敢えて推理しないようにしましたけど、さて何かしら」

メヌエットは眉を寄せて、俺をナナメ下から見上げてくる。

「えーっと……うん、あれだな。ほら、店の中。あそこでこっちに背中向けて座ってる、頭の左っかわに白い花飾りをした、黒髪ロングの女がいるだろ。俺と同い年ぐらいの」

「ええ、いるわね」

「あれがモモコだ」

という俺の発言に、「!!??」という顔をしたメヌエットは、大事なパイプを落としかけてお手玉してる。

「ネットで検索して、メッセージを送ったんだ。そしたらあっちも『ムニュエ』にすごく会いたがってくれてな。なんか金持ちらしくて、昨日のフライトで日本から来てくれた」

「おっ、お前、なんてことを……！」

俺の呼び方をキンジからお前に格下げしつつ、メヌエットは大慌て。

元々白い顔をさらに顔面蒼白にさせて、超テンパった目をしてる。

車椅子も、心同体でテンパったのか、ぷしゅー！　と下から水蒸気を吹いてるよ。

「ただ向こうも男嫌いで、俺には会わんそうだ。俺は、店外の――そこのベンチだが安心しろ。俺は、店外の――そこのベンチ

で、待機するから。なんか問題ありそうな子だったら、助けに行くよ」

俺が用意しといた『もうすぐ着く』というメールを送ったら、白いテーブルに姿勢よく座った女も携帯を取った。もう1度送ったら、もう1度。

「よし、モモコ本人だ。行ってこい」

「い、いやよ。いやよっ。ついてきて」

と、メヌエットは今までで一番の慌てっぷり。

貴族様のプライドはどこへやらで、青い目を半ベソにして俺に甘えた事を言ってくる。

「俺は会わないって約束で呼んだんだ。武偵は約束を守る」

「お、お前、言ったの？　私が車椅子だという事を」

「言ってねーよ。言う必要ないだろ。お前こそモモコに話してないのか？」

「……っ……」

……隠してたのか。

「わ、私は、自分が、学校に通っていて、しかもバスケットボール部のエースという事にしてしまっているのよ。チャットをしているうちに、そういう、その――ウソを一度つき始めたら、止まらなくなってしまって――学校中の人気者だとか、ラクロス部のエースも兼任してるとまで、最近は言ってしまっているの……！　彼女はそれを信じてくれているのよ！」

メヌエットはマジで緊急事態って顔をし、俺にその辺を洗いざらいぶちまける。

……通信だけだと、本当の相手は見えないからな。文通の時代から人類がやっちまってきた『理想の自分を騙る』という伝統芸を、このメヌエットもやってたワケか。

「じゃああれこれ正直に話すチャンスだろ。ウソは良くないんだから。ほら、行け」

と、俺はメヌエットが掛けていた車椅子のハンドブレーキを強制的に下ろす。

「彼女は知らないのよ！　私がこんな……エースどころか、自分の足で歩くことすらできない、車椅子の姿だという事をッ！」

「車椅子の何が悪いんだよ。それにお前のこれはオシャレでカッコイイ。自信を持て」

「私、お姉様以外の同世代の女の子となんか、何年も喋った事がないのよッ。彼女、高1だって……私は帰りますっ！　モモコにはお前から謝っておいて！」

とうとう逃げだそうと車輪を掴んだ、メヌエットの手を俺は、掴んで止めた。

「離して！　帰るわ！」

「ダメだ、会ってこい」

「いやよ、いやよ、推理できてしまうのよ。モモコはわざわざ遠くから来てくれたのに、出てきた私がこんな姿じゃ――彼女は私を嘘つきと罵るわ！　嫌いになるわ！　モモコは私の唯一の友達なのよ。それを失ってしまう！　私には、推理できてしまうのよ！」

「お前……推理して、それで終わりでいいのかよッ！」

俺も俺で、このメヌエットには腹が立ち――

逃がすまいと、その細い腕を掴む手に力を込めた。
「その推理を覆せ。自分に不都合な推理を、ひっくり返せッ。確かに、お前は推理の天才なんだろう。だがその推理は何のためにある。推理を踏まえて、いい方向へ動くためだろ。推理は答えじゃないんだ！　動いて、会って――作り出してこい、本当の答えをッ！」
「……ッ……！」
初めて見せた、マジギレした俺の剣幕に――弱気になっていたメヌエットは、柄にもなく黙って話を聞いてくれている。
「去年の7月時点で、シャーロックが生きていた事はアリアから聞いてるか？」
「……聞いているわ」
「そのシャーロックの推理だって、答えをひっくり返された事があるんだぞ」
「そんな――ありえないわ。私の知る限り、曾お爺様の生涯には一度だってそんなことは無かった。誰が彼の推理を覆したというの」
「俺だ」
「ああ……」
コイツもそこで急に納得するし。
「度を超した愚か者の行動は、推理できないのよ。お前がここにモモコを連れてくるとは、推理できなかったのよ」
「愚か者で悪かったな。だがそれで分かったろ。推理は絶対じゃない。神の予言だろうがスーパー

コンピューターの予測だろうが、好ましくない未来が見えたら、そんなもの覆せ。それを覆せるのが人間だ。行け。行って、失うのの逆に、作ってこい。本当の友達をッ」

――『本当の友達』、という俺の言葉に――

メヌエットの目には、とうとう、希望の光が差した。まだ9割がた絶望的な顔だけどな。

そこで俺が手を離すと、そこは貴族らしく、まずは少し乱れた髪とヒラヒラのドレスをキッチリ整えて――

「……」

さっきまで逃げるために掴んでいた車椅子の車輪を、震える手で掴み直した。

そして、カフェのスロープへと向かって進んでいく。

もう俺の介助に頼ることなく、自分の手で車輪を回しながら。

シャーロックの推理すら覆した俺に勇気づけられてか、いや、何より――本当に友達ができるかもしれないという希望を胸に、メヌエットは……

今、名探偵の自分がした『推理』という壁に、自ら立ち向かったんだ。

苦笑いしてしまうほど、戦う時のアリアとそっくりの――勇敢な表情で。

ガラス張りなんでよく見えたが、店内に入ってからのメヌエットはさすが貴族といった様子だった。堂々とモモコの前に出て平たい胸に手をあて、見とれてしまうように流麗な『はじめまして』の挨拶をしてから――

ウェイトレスが運んできたアフタヌーン・ティー・セットを前に、話し始めた。
最初はやっぱり意外だったらしく、モモコとやらも驚いた様子が分かったが……そこをヘンに差別するようなタマじゃないらしく、今はむしろ興味を持った様子でメヌエットと和やかに会話してる。
（まあ、メヌエットほど頭が良きゃどうとでも取り繕えるだろ。ウソついてた事ぐらい）
読唇するのも悪いから、そこは読まず……
俺は缶コーヒーでも飲もうかと思ったが、ここはロンドン。東京みたいに治安がいい町じゃないから、あちこちに自販機があったりはしなかった。
なので、ポケットに手を突っ込んでボケーっと座って待つ。
で、向こうは暖かくてオシャレなカフェで、お茶とお菓子を共にして喋ってる。
延々と。
……長ぇ。
待てど暮らせど、お喋りが終わる気配がない。かれこれ1時間はくっちゃべってるぞ。
今はもう、ゲームの話題とかで盛り上がってんだろうな。
俺はMI6のエリート軍団・00シリーズに見つかったら殺されかねない、イギリスに危険視されてる武偵。こんな所で素顔を晒して延々と座ってるってのは、いただけないんだが……入国時にワトソンが厳重注意してきた割に、ヤツらの気配がした事は一度もない。ケチな事を言う必要はな

いか。
そして……ゲーム仲間のガールズトークが2時間に突入したあたりから……
メヌエットに、変化が見られた。
笑ってる。
笑顔になってる。モモコもクスクス笑ってるみたいだ。女の子同士、楽しそうに。
……良かったじゃねーか。メヌエット。
お前なら、やればできると思ってたぜ。なんたってあの不都合な予測は全て（暴力で）自分の都合のいい方へ覆す、アリアの妹だもんな。
ってか、まだ喋んのかい。女のお喋りは長いんだな。寒いんですけどこっち。

夕方になって……
ようやく、メヌエットがカフェから出てきた。
俺がここにいると知らないモモコは、観光でもするつもりかハンドバッグ片手に石畳の道をリージェンツ・パーク方面へ去っていく。
結局後ろ姿しか見えなかったが、どっかで見たような気がしなくもない雰囲気だったな。モモコ。
とはいえ、俺は会わないって約束したし。素性を探るようなヤボなマネは、しないさ。
「……どうだった」

すっかり冷えた鼻をモミモミしながら、俺が帰ってきたメヌエットに尋ねると
「キンジの言った通り、なんとか、自力で推理を覆しましたわ。モモコも年を偽っていたから、それまで不確定だった要素が有利に働いたと言えなくもありませんね」
また回りくどいご感想だが、顔を見りゃ分かる。
名探偵のキリッ&貴族のツンツンな表情だが、嬉しくてたまらない様子は隠せてないよ。
その辺はまだ、14歳だな。
「まあ、オフ会が楽しかったならそれでいいさ」
と、俺が車椅子の後ろに戻ってまた取っ手を掴もうとした時
その車椅子が、くるっ。その場で、180度ターンしてきた。
それで俺に正面を向いたメヌエットは……
胸に片手を当て、凛々しく、同時に可憐な仕草で頭を下げてきた。
「素晴らしい誕生日プレゼントだったわ。ありがとう。キンジ」
そして可愛らしいアニメ声で言い、さっきのように愛らしい笑顔を上げてくる。
「よし、じゃあ星をくれ」
オフ会1回やらすのにえらい苦労した俺がすぐさま星カードを出すと、元のネクラ顔に戻ったメヌエットは――
「もう。粋なのか無粋なのか分からない人ですね。ですが、これはキンジの完勝でしょう。まさかプレゼントと仰っていたのが、『お友達』だったとは。星4つ差し上げます」

「これで8つだな。割り増しボーナスで、あと2個ぐらいくれないか？」

調子のいい事を言った俺の袖を、メヌエットは抱き寄せて……

「だって、そうしたらキンジはすぐいなくなってしまうのでしょう？」

と、また小さく笑ってベロを出すのだった。これもアリアとそっくりの、ドキッとしてしまうぐらい可愛い表情で。

3弾　大英帝国の刺客

それからメヌエットは、俺が誘うと割と積極的に外出するようになった。
リサがいるとはいえ、俺も四六時中あの屋敷にいたら息が詰まる。せっかくロンドンに来てるんだし、今日は市内観光でもしつつ星稼ぎのヒントを探そう。
そう考えて、リサ、それと武偵高の男子制服姿のワトソンも呼び出して……
メヌエットお嬢様の車椅子を押して、アビー・ロードくんだりを歩く。
ここはロンドンのカムデン区とウェストミンスター区を分ける道で、かのビートルズのレコードのジャケット写真に使用された事でも有名な道路だ。ジャケ写の通りに、右手をポケットに突っ込んだ俺、メヌエット、裸足になったワトソン、リサの順番に並んで横断歩道を渡り、通りすがりの観光客に記念撮影をしてもらったりもしたよ。
それが楽しかったので、調子に乗って「じゃあ次はタワー・ブリッジとかビッグ・ベンとか行ってみるか？」と半ば公私混同気味の俺がそんな提案をした、その時
「……っ……？」
俺たちのすぐ近くに、完全防弾車と思われる高級車・デイムラーＤＳ４２０が停まった。
明らかに、俺たちをマークしていた停まり方で。
俺も武偵の端くれなので、そんな事にいちいち驚きはしないが……
その車を御自ら運転していた人物には、驚かされたな。

キザったらしい白スーツに、目元を隠すようなサングラス。
――ハワード王子だ。
車を降り、ばすん、と手袋をした手でドアを閉じた王子は、ハンカチで鼻を押さえてる。
そしてこっちに向かって、
「この辺りは車通りが多く、臭くてかなわん。おい、お前たちが来い。余は、このような汚れた場所でなくとも歩きたくない。グズグズするな」
人差し指だけで、クイクイと手招きしている。
「ハワード……！　痛っ」
「まあ。なんという事でしょう。これはこれは。御名をお呼びいたせぬ非礼をお許し下さい。お忍びでありましょうから」
いきなり王子を呼び捨てにした俺の手をつねりながら、ゆくゆくは王家の一員になろうと企んでいるメヌエットが車椅子を自走させていく。
ワトソンもクリクリの目を飛び出させんばかりに驚いて、命令通り王子の方へ小走りに行ってしまった。
――キンジ。余はお前の事を聞きにきた」
やむなくリサと共に王子の方へ歩み寄った俺を、王子は尊大な態度でご指名だ。
「話す事はないね」
アリアの件で最初っからケンカ腰の俺に、ワトソンはハラハラした目を、メヌエットは微妙に睨

み目を向けてくる。

「キンジ。お前はアリアの恋人であろう」

王子が単刀直入にそんな事を言ってくるもんだから、さっそく俺はワンパン入れそうになったが……そもそもそれはメヌエットがしたのと同様の誤解だ。1日8発カレシを撃つカノジョがいたら、恋人って言葉の辞書の定義を変えなきゃならんだろ。

なので否定しようかとも思ったが、ハワードが無性に腹立たしかった俺は

「だったら何だ」

と、なぜかその素振りで話してしまう。それにメヌエットが俺を睨み、ワトソンが赤面、リサがニコニコしつつもちょっとイラッと額に青筋、と、三者三様の表情をする中……

「先日伝えたように、余はアリアを今しばらく武偵として使うが、いずれ妻とし、王家に入れるつもりである。お前はアリアを諦め、以後その名を口にせぬようにせよ。ＭＩ６に調査させたが、お前は組んでいた事が後にアリアの汚名となる人物のようだからな」

「まあ素晴らしい！　お姉様がプリンセスに！」

この流れを推理できてたくせに、メヌエットはわざとらしく嬉しがるフリ。

「しかし、お前とアリアは男と女。その仲を引き裂くからには、これを下賜する。平民は見たこともないような額であろう。これで、二度とアリアと会わぬと約束せよ」

と……王子は、クーツ（Coutts）銀行の小切手を俺に突き出してくる。

フン。過去のスキャンダルは、金で揉み消そうってことか。王族も俗なもんだな。

「いらん。たとえ1億円積まれたって、お断りだ」
「お前はポンド換算ができぬのか。この紙キレは、円にすればもっと高いぞ」
「そ……そういう問題じゃねえ。俺は金に困ってるわけじゃ……なくはなくもなくないが、誰とどう組むかはアリア本人が決めるべきだろ」
「――違う。この国では、平民は貴族の意志に従う義務があるのだ。それが、身分というものだ」
……ここまでキッパリ言い切るとは。さすが王子様はモノが違うね。
「天は人の上に人を造らずだぜ。その辺イギリスは日本より1世紀は遅れてるな。それにそいつは、武偵が一番やっちゃいけない事の一つなんだ。仲間を金で売るってのはな」
「なぜそうも頑なに、無礼な断り方をするのだ？」
ちょっと天然ボケなところがあるのか、俺が小舞曲のステップの如く順を追って話してやったのに、王子は小首を傾げてる。
「お前がキライだからだ」
ボケてるやつには、分かりやすく言ってやるべきだ。と、俺がぶっちゃけると……
アリアに相乗りして自分も王宮入りする計画を立てていたメヌエットが、
「――代わってお詫び申し上げますわ。この男は……」
間髪をいれずフォローしてくる。だが王子は、
「ハッハッハ。良い、良い。所詮は異国から来た平民の戯言よ。だが、奇遇にも――余も同じ。お

前が、大嫌いだ」

男の嫉妬丸出し、という顔で俺に毒づいてきた。寛大な言葉とは裏腹に、怒ってる。

「やっといい顔になったじゃねえか、E子サマ」

「その胆力、平民にしては上出来だ。では金は止めて、別の褒美をつかわそう。決闘だ」

決闘……？　これまた時代錯誤的な話だな。

だが暴力なら得意科目だ。武偵高に感謝する日が来たかもしれないな。

「今、ここでも構わないぞ。俺は素手で、お前には俺の銃を持たせてやる」

手の指をパキポキ鳴らすという、原始人みたいな威嚇をした俺を――E子が、鼻で笑う。

「立場ある余が自ら立つと思うか？　だが、これでお前は決闘を受諾したと見做し、余の代理人と戦わせる。――出よ」

と、E子が胸を張った数秒後、それまでも何度か車道を通っていた2階建てバスがまた通り……この場に、日、バスの影が差した。

それが通過して明るくなった、その瞬間――

「……ッ……！」

俺の隣に、同い年ぐらいの、1人のイギリス人男子が立っていた。

「E子。お戯れも、その程度に」

低くクールに呟いた、その男の接近に――出現されるまで、俺は全く気づけなかった。

何だ、コイツは……！

「……い、いつの間にッ……!?」

ワトソンも驚いてる。西欧忍者の異名を取るワトソンでさえ気づけなかったというのか。

リサとメヌエットも、その男を警戒する中――

「武偵・遠山キンジ。新進気鋭の有望株に会えて、嬉しく思う」

ベストもあるこなつ揃いの、ダークグレーのスーツを着たそいつが俺に語りかけてくる。

王子の方を向いたまま、俺と目を合わせずに。

「誰だ」

「ボンド」

そう名乗った男は、五厘刈りにしたグレーの髪、青と緑の中間色の瞳。

「サイオン・ボンド」

姓を名乗ってから姓名を名乗り直す、キザなスタイルで名乗り直した、サイオンは――純血のイギリス人といった風情の男。純日本人の俺と対をなすように、身長や体格は似ていて……そして、ニオイも似てる。日常的に銃を撃つ人間特有の、無煙火薬のニオイだ。

「MI6か」

「そうだ。00セクションのナンバー7」

出やがった、か。

イギリスが誇る世界最強の外事諜報組織、英国情報局秘密情報部（Secret Intelligence Service）の――MI6。

それはイスラム原理主義、共産主義、極左、カルトなどに潜む過激派テロリストを捜査対象とする、ここロンドンに本部を置く実質首相直轄の組織だ。

ワトソンに警告されて調べたが、ＭＩ６は内事諜報組織のＭＩ５と結託してＩＲＡとも戦い、防諜・クーデター防止のために内偵もやり、在英大使館との密通もやりたい放題で今や暴走気味の強権を振るっている。世界中から恐れられている、超武闘派集団なのだ。

そして何よりヤバイのは、人類最強の呼び声も高いＭＩ６の特戦隊――００セクション。

悪党がイギリスに指一本でも触れようものなら裁判抜きで殺して構わない、マーダー・ライセンス――『殺しの許可証』を持つ、超法規のエリートたちだ。

人数は不詳だが、数人しかいないと聞く――その1人は、こんな若者だったのか。

サイオンの出現に言葉を失っている俺の横から、ワトソンが、

「待て、待て……！　どういう事だっ、その役職のミスター・ボンドは……キミのような少年ではなかったハズだッ」

血相を変えて、サイオンに叫んでいる。

「少し外遊していた間にアンテナの感度が下がったようだな、ワトソン卿」

回りくどいのはイギリスの国民性なのか、そう前置きしたサイオンは――

「父は引退した。会った事は無いが、私は彼の書類上の養子だ」

「……っ……」

抑揚の少なく低い声で淡々と説明し、ワトソンをさらに驚かせている。

「サイオンは史上最年少で００セクションに選抜された、英俊。余も使ってみようと思い立ってな」

ヘラヘラと手駒の自慢をするＥ子は、無視して――

「俺も００シリーズの本物に会えて光栄だぜ。ルーキーとはいえな」

年齢からも新人だと分かるサイオンを、俺は睨みつける。

そんな俺にクールな瞥を返したサイオンは、

「……隠してるのか？」

小声で、返してきた。

「……ッ」

何の事を言われたのかは――

瞬コイツが流した殺気と、それに呼応した直感で分かった。

――ヒステリアモードの事だ。

こいつ。出会って1分で勘付きやがったか。メヌエットより早いな。

そして、今の……

カミソリのように鋭いナイフで、スッと俺の心臓を軽く、突きにするような殺気。

実際にも、サイオンはそうできただろう。そして俺は、切それに対応できなかった。

今の俺じゃ……秒殺どころか、コンマ数秒で殺される。

ヒステリアモードでも、きっと分が悪い。そんな相手だ。この男は。

――世界は広いぜ。俺と同い年ぐらいで、ここまで鋭利な人間がいるとはな。

「殿下。お言葉ですが、私はこの男と決闘に及びたくありません」

サイオンはE子に向かい、特に感情を交えない声でそう言う。

「ほう、何故にだ」

「戦力差がありすぎる。決闘の俎上に上げる以前の男かと」

「サイオン。命令に従わねば貴様を解任して、この任務を００８に与えるぞ。やれッ」

E子の、声で、

「……御意のままに」

俺の真横で、まだE子の方を向いたままのサイオンから

……殺気……ッ……来るぞ……！

００セクションは、イギリスのためになら何でもやる連中だ。そのイギリスとは、今、E子そのもの。その命令はどんなに理にかなわないことでもやる、愛国の鬼――

「トオヤマ、逃げろッ！　殺されるぞ！」

カカカカカッ！　と、肘、手首、手の甲と指から複数のカードナイフのような刃物・全身武器を飛び出させたワトソンが――

いきなり、その腕をムチのように振るってサイオンの首に飛びかかる。だが。

「ワトソン卿。失礼ながら、私は卿に用は無い。イングランド人同士が外人のために血を流すことはない」

サイオンは動く事なく、それを躱していた。
そのように、見えた。だが違う。術理を父さんに聞いた事があるだけだからヒステリアモードでも多分できないが、今のは琉球空手の王族だけが使う体術・御殿手に似ていた。
それは体幹・重心・正中線といった身体のバランスを、切崩さず動く技。動かずに動く体術なのだ。その動きを人間が認識できないから、盗む事すらできない秘中の秘技。
（ここに瞬間移動するみたいに現れたのも、それかッ……！）
それを裏付けるかのように、こつんっ、という音だけがワトソンの側頭部でしてすとんっ、と、ワトソンが座り込んでしまう。
し、失神してる。
ヒステリア・ベルセの俺でも苦戦した、ワトソンが……たった、1撃で……！
「ご主人様！」
リサが俺を抱き、その身を挺するようにサイオンへ背を向ける。
「どけ、女」
「言葉少なにリサを威圧する、サイオンの声」
「イヤです！」
金切り声を上げたリサの足下に、バツッッッ！
コンクリートを抉る着弾が。
地面に威嚇射撃をしたんだ。サイオンが。それが、後から分かった。

撃つ事に、全く気づけなかった。人は銃を撃つ前には、気配　発砲するぞ、という気を放つ。撃つという行為をすれば何かが起きるのだから、それは本能的に必ず放たれる。今まで俺が対峙した敵は誰も彼もが、あのシャーロックでさえ、その『気』を放った。

しかし、サイオンにはそれが無かった。

コイツにとっては、発砲する事が何でも無いことなんだ。人が呼吸する事を意識しないように、それにいちいち人が気づかないように、文字通り息を吐くように銃を撃ったんだ。

その、特質は……

人生全てを戦いに費やしてきた人間にのみ、備わるもの。戦う事が呼吸と同じレベルになるまで、戦闘行為に明け暮れる日々を休まず積み重ねた人間だけが身につけるものだ。

俺のヒステリアモードみたいに、隠し技で　足飛びに強くなるタイプじゃない。

威嚇射撃とはいえ、英国紳士が女性に撃つとは。手加減なさいな」

事ここに至って、メヌエットは王子の兵とはいえサイオンに貴族として苦言している。

だがサイオンは涼しい顔で、

「メヌエット・ホームズ女史、拳銃の使用は私の場合むしろ手加減だ。それとも、手加減しない方が良いか？」

リサの肩越しに見えたサイオンの左手には、道ばたでも平然とグロック18C改撃鉄の無いストライカー式の、ポリマーフレーム拳銃が握られている。

発砲音がしなかった所を見ると、最新の内蔵減音機構を組み込んでる。違法なものだが、コイツ

にはそんな事は関係無いらしい。アスファルトの砕け方から見て、弾もダムダム弾。ルール無視で凶行に及ぶテロリストと戦うコイツにとっちゃ、『何でもあり』って事か。

そして――銃を見せたって事は、それに頼るつもりはないって事だ。

という俺の読み通り、サイオンは何かを投擲してきた。

今度はリサに当たる軌道だったので、俺は――

――バッ！　と、リサと体を入れ替えてそれを腕時計で受けようとする。

するとその左手首に、ガチャッ……

……手錠が、填まった。

薄汚いブレザーを着ているのに、女の血で汚れた手錠では不満だったのか？」

と、サイオンが少し引っ張った、超硬合金らしい手錠のチェーンは……1mはある。

これは人を拘束する機能がほとんどない物だろう。片腕にしか掛けてこなかったしな。

俺は彼女を守る契約をしているんでね」

リサも狙って抱きついたんだろうが、その大きく柔らかく豊かで、母性的な香りのする胸のおかげで――ヒステリアモードになれた俺が、サイオンに正対して答える。

いつの間にか俺から少し離れていたサイオンが、

――なるほど。アドレナリンをコントロールするタイプか」

俺と同タイプの人間と戦った事があるような口ぶりで、低く呟く。

……いるのかい、他にも」

この病を持つ人間がどこにいるのか、ヒス的な口調で聞いてみようとしたところ……

「Yes there WAS one in cuba ああ。いた。キューバにな」

サイオンは、過去形で答えた。

いたが、もういない、って意味か。

いたものが何故いなくなったのか、聞くだけヤボだな。

やっぱりサイオンは、俺と同タイプの人間やめ人間を殺せるぐらいの実力の持ち主だ。

「殿下、お車へ。お召し物が返り血で汚れては、大事ですので」

サイオンは拳銃をスーツの胸にしまい、チェーンの先にもう1つあった手錠を

カチャッ、と、自ら俺とは逆の右手首に掛けた。

「チェーン・デスマッチかな。武偵高でも、時期流行ったけど、もう流行遅れだよ」

「今でもこの辺の悪童たちがよくやっている事だ。私たちも、それに見えるだろう」

チェーン・デスマッチとは――古代ローマの闘技場で発祥した、伝統的な決闘方法。

鎖でお互いの腕を繋いだ上で、武器を持って、あるいは素手で戦うスタイルだ。

特性は2つ。対等な条件で行われる事が分かりやすい、なるほど決闘に適した見た目と――絶対に、逃げられないこと。それもまた、目瞭然だろう。

「よし、よし。まずはお互い、口上が要ろう。対話を許す。その後、決闘を始めよ！」

仕切り屋な王子に命じられるまでもなく……うん、やってやるか。

元々何の恨みも無いサイオンとは戦いたくなかったが、今ワトソンとリサに攻撃された新鮮な恨

みができたところだからね。
「……教えておこう、遠山。父は旧ソビエトでもアメリカでも無敗だったが、冷戦時代の日本で1度だけ敗北を喫している。その相手は　遠山金叉。お前の父だ」
「それは俺に関係ないだろう。ある集団にも先祖の事を持ち出されてケンカを売られたが、血のつながりがあろうと父さんと俺は個人と個人。個人主義はおたくら西欧の教条だろ」
「無関係だと思いたいなら思え。1つ教えたので1つ尋ねる。俺は父から、お前に関わる仕事を1件引き継いでいる。イクスカリヴァーンを大英博物館に戻せ、とな」
「あれは……シャーロックから奪った、俺の物だ。どう使おうが俺の勝手だろう？」
「ニホンザルには物の価値が分からないのだな。女の前だからといって、粋がる事はない。速やかに在処を教えろ」
「女性の前で粋がるのは男の本能だよ。サイオンは粋がらないのかな？」
「俺には女がいたことがないのでな」
「……ちょっと、イメージと違うかな。先代さんは恋多き男だったって、有名だけど」
「先代はそれでよく女に足を引っ張られたようなのでな。俺に愛など生涯不要だ。それを人質に取られれば任務のジャマになる。俺が愛するのはただ1つ――イギリスのみだ」
女嫌いか。理由は違うようだが、そこもちょっと俺とカブってるな、サイオン。
さて、武偵高でも1年のころ何度かやったことがあるが……
チェーン・デスマッチの勝ち方は、先手必勝。

ダメージを負っても逃げて呼吸を整える事ができない性質上、先制打撃に成功すると、それを続けられるのだ。だから、

「ああ、そういえばサイオン。そのネクタイの柄だけど、よく見ると――」

俺は発言の途中で、ほぼノーモーションからの――

（桜花ッ！）

打撃の基礎中の基礎、正拳突きを放った。

ヒュボッ！　という轟音と共に、亜音速で。

バツンッッッッ！　と、初撃が見事サイオンの顔面に命中し――

がしゃんっ、と、チェーンが伸びた。

「――サイオンっ!?」

王子が情けない声を上げ、ワトソンを支えるリサが歓声を上げ、メヌエットはどっちを応援するか迷ってる感じだ。

死ぬ事はないだろうと思ったが、ゆら……と俺に向き直ったサイオンは、やはり大丈夫そうだ。

ちょっと鼻血は出してるけどな。

アビー・ロードを行く僅かな人々が、訝しげにこっちを見てきた中……とこ、とこ、と……俺の近くまで、追撃のタイミングが図りづらい例の歩法で歩み寄ってくる。

そして、

「……こうか？」

と呟き、バツンッッッ！　と、反撃の――こッ、これは、桜花……!?　桜花だ。
今サイオンは全身の骨格・筋肉を連動させて、亜音速の拳を当ててきたんだ。
チクショウ。軽々しく見せるんじゃなかった。
俺が閙から羅刹をパクったように、コイツは見た技をすぐコピーできるんだ。
見せれば見せるほど、取られるぞ。
と、俺が技に頼ることを躊躇った隙を逃さず――ドスッ！　ガスッ！
ただのボクシングのワンツーで、サイオンが殴ってくる。
だが、この一撃一撃が――重い。そしてコイツの歩法のせいで避けられない。連続してトラックに跳ねられてるようなダメージが、次々に蓄積していく。タイミングが掴めないせいで、橘花も出せない。コイツは殴る時にも一切、その『気』を放たないんだ。
（マズいッ……意識がッ……！）
一日退こうにも、チェーンがジャマをする。背に腹は代えられず、ルール無視で破壊しようとしたが――力が、入らない。こっちは丸出しの『気』を読んで、サイオンが妨害してくるからだ。
「――ご主人様ぁ！」
リサの悲鳴も、やけに遠く聞こえてしまう。
このままじゃ、マジで殺されるぞ……こんな道ばたで、出会って5分の男に……ただの、パンチだけで……！
倒れる事も許さず、チェーンで俺を引っ張り起こしたサイオンが――

「チェックメイトだ、遠山」

トドメの一撃を放つ前に、そう呟く。そのタイミングで、俺は――ゴキッ、と――自ら左手首の手根骨を外した。遠山家に伝わる、捕縛された際に使う自己脱臼術で。

それで、どさっ。と、倒れる。

倒れる瞬間に左手をわざと地面に突き、骨は入れ直したが……

「……遠山。前提を崩したな。殿下の命の決闘が、台無しだ」

サイオンが冷酷に俺を見下ろし、ため息と共にそう告げてきた。

「……ぬ……抜け出せて、しまう、鎖を用意した方にも、責任があるんじゃないかな？」

俺は口元の血を袖で拭いながら、よろけつつ立ち上がる。

その屁理屈のせいもあって、この決闘はウヤムヤな感じになってしまい

「殿下。このニホンザルには決闘という言葉の意味が分かっていないようです。まず英語を理解させてから、日を改めたいところです」

「うむ。これでは余もスッキリせぬなあ。しかしサイオン。このままともに立ち合う事すらできぬ男はどんなに貶しても構わぬが、金輪際、日本を悪く言うな。余の未来の妻はそのクォーターになる可能性があるのでな」

「御意に」

「ああ、つまらぬ」とアクビしつつ車に戻っていく王子を見送ったサイオンは……俺とすれ違う刹那、

「アリアは王子に譲れ。俺はお前を殺したくない」
五厘刈りの頭をちょっと寄せて、コッソリ小声で囁いてくる。かなり上手な、日本語で。
「……殺したくない？　何でだ。マーダー・ライセンスを持ってるんだろ、サイオンは」
「だからだ。お前には日本武偵法9条のハンデがある。それはフェアではないから、今は殺さぬよう手加減したのだ。分かって、退いてくれ。これは警告だ。次は――殺す。俺は卑怯者になる覚悟はあるが、なりたくはないのでな」
……ヒステリアモードの、俺を……手加減しても、のしちまう、男か。
いたんだな。この世には、こんなヤツが。完敗だよ、サイオン・ボンド。

サイオンに殴られたダメージとヒステリアモード後の倦怠感で、ボロボロのフラフラな俺がベーカー街221番地に戻ると
「痛快でしたわ、キンジ。私、殴り合う男性同士を生で初めて見たのです。現代の武士と騎士。とても面白かったですわ。今夜は興奮して眠れなそうなほどです」
メヌエットはリサにイギリス版の赤チンを塗ってもらってる俺に、脳天気なコメント。
「じゃあ星くれよ」
「4つもあげたばかりでしょう。すぐにはノーですわ」
雑なルールで、見物料も払ってくれねーし。
一方、意識を取り戻していたワトソンはサイオンにマジギレしたらしく、リバティー・メイソン

の組織力ですぐさまヤツの事を調べ上げてきていた。
イギリス国内の事とあって比較的過去を洗いやすかったらしい、サイオンは……
……幼少期にアイルランド共和軍の残党の爆破テロに遭い両親を失った、孤児だった。
その後ＭＩ６がヤツの才能を見抜いて、自分たちの後継者を育てる養成機関に入れ＝訓練を、上日祝日はおろかクリスマスさえ無しで12年間させた。その特訓メニューは不明だったが、その育成機関に入れられた少年の9割以上が『消えた』事になっている点から容易に想像できる。生存率1割以下の、生き地獄だ。
イギリスへの絶対忠誠を誓う洗脳教育と共に強靭な戦士に仕立て上げられたサイオンは、陸海軍や警察から引き抜かれる事の多いＭＩ６メンバーの中でも一匹狼なんだそうだ。
「アイツは人間じゃない。殺人マシーンだ。トオヤマ＝悔しくてもサイオンと戦っちゃダメだぞ。ＭＩ６＝あの悪の組織には、ボクらが苦情を入れておくから」
と、頭に包帯を巻いたワトソンは相変わらず激怒してるが……
手合わせした俺には、なんとなく分かる。
アイツは多分、悪人じゃない。やってる事に善悪の判断を入れないタイプだ。
ひとたび戦いの号令が掛かれば、どちらが正しいかなんか考えず、クールに戦う……
氷のような、男。そんな感じがする。
「これは初歩的な推理ですけど、小舞曲のステップの如く順を追ってお話ししましょう」
どうもさっきから機嫌の良いメヌエットが、車椅子で割り込んできて＝

「キンジはサイオンに勝てません。つまり仕切り直しての決闘では、キンジはサイオンに降参する。となればサイオンを代理人に立てた王子の勝利となり、アリアお姉様はキンジから離れることになる。従って、キンジは私のものになる事でしょう」

「初歩的な話だが、俺がなりたくない以上、お前のものにはならんぞ」

不機嫌な俺が仏頂面で言うと、

「いやよ、いやよっ、この楽しいキンジは私のものですわ。貴族は王族の意志に、平民は貴族の意志に従う義務があるのですっ」

と、痛む俺の体に手でしがみついてくる。貴族はみんな自己中だな。

「そして、私は王家の名誉です。とはいえハワード王子は、代限りの王でしょうから、私たちがそのまま王族として継続的に宮殿に住むことはないでしょうけれどね」

「……？　なんで、代限りなんだ？」

「私を診て下さる女医先生に聞いた、知る人ぞ知る情報ですけども。王子には体の一部に不全があって、お世継ぎを残す行為が全くできないのです」

「一部ってどこだよ」

「何となくお察し下さいな。淑女が言える部位ではありませんのよ」

パイプで俺の痛む頭をさらに叩くメヌエットは、教えてくれないが……まあいいか。

「それに、お姉様はキンジのそばにいた事で緋緋神に乗っ取られたのでしょう。お姉様を王家に預

けておけば、その問題もひとまず安心といえます。硬く警護されている王宮は、争いとも無縁な領域ですし。そこに私が入れば、またお姉様と共にも暮らせましょうし」

と、メヌエットがしてやったり顔で語る中……

……ジリリリン……ジリリリン……

と、古式ゆかしい金属ベルの音がした。クラシックな固定電話が鳴ってる。

サシェがそれに出てから差し出した受話器を、メヌエットが移動して取り

「……はい。はい。ええ。お姉様。キンジはそれはそれはメヌエットによくして下さっております

の。特に夜、お風呂上がりなどにも叮愛がってくださるのです。はい？　いいえ。同じ部屋で寝て

おりますよ」

……なんか……

ヤバくない？　その電話。

相手は誰だ。今『お姉様』とか言わなかったか!?

まさか、アリ、アリ……何あれこれ盛って話してんだよメヌエットっ！

「キンジ、お電話代わりますわ。バッキンガム宮殿のアリアお姉様からです」

やっぱりかよ！

痛みも忘れ、最近すっかり笑顔が板についてきたメヌエットが差し出してきた受話器に飛びつく

と――

うわっ。受話器が。耳に当てなくても聞こえてくるアリアの怒鳴り声で振動してるよ。

釣りたての魚みたいに、俺の手の上でビチビチ跳ねてるぞ。こりゃキレてるな。

「……アリア？」

と俺がこわごわ出た瞬間、ぎゃーす！　お説教が始まった。

『キンジ！　あんたサイオンとケンカしたらしいわね！　あいつは人類最強クラスの殺し屋なのよ!?　死にたいの!?　何やってんのよバカキンジ！　ていうか大丈夫なの!?　手足は全部ついてる!?　目つぶされたりベロ抜かれたりしてない!?』

どんだけ鬼なイメージなんだよ、サイオンは……

「ベロ抜かれたら今喋ってねーだろ。命は取られてないから心配すんな。それにＭＩ６と敵対してんのは今に始まった事じゃない。スクラマ・サクスも香港で無くしちゃったし」

『ったく……まあ、生きてるみたいで安心したわ。でもサイオンとケンカして死んでないってことは、またなったのね？　誰でなったの。メヌに何かしてたら大風穴開けるわよ。メヌごと』

アリアは今や、俺が性的興奮でヒステリアモードになれる事を知ってるからな。

めんどくさいなあこれ。そっちこそ元気そうだから、俺も安心したけどさ。

「……そんな事よりお前、玉の輿プロジェクトはどうなってんだよ」

ここで俺は奥義の２重掛け。話題逸らしと逆ギレを同時に放つ。

『た、タマノコシって。どうもこうもないわよ。昼は宮殿でゴロゴロして、たまに晩餐会とかの公務でハワードの警護。夜はホテルに戻って自主トレしてる』

「じゃあゴロゴロしてる普段と大差ないな」

『風穴。もう……あんたが絡むと何もかもぐちゃぐちゃになるわ。とにかく今は正攻法で色金に迫ろうにも迫れない、入り組んだシチュエーションだって事はもう分かったでしょ。あんたはしばらくおとなしくしてなさい。サイオンとメヌエットに日常的に接触してたら、命がいくつあっても足りないわよ！』

ガチャン！　ももまん切れなのか不機嫌窮まるアリアに、電話を切られちまったよ。

個人的にはアリアや白雪や理子がしょっちゅう湧く東京よりは、ロンドンの日々の方がライフの減りが緩やかだと思うけどね。だが、しかし……

（ちょっと危なっかしい感じだったな、アリア）

俺はイギリスに来てからこっち、悲しいかな的中しまくりのイヤな予感に眉を寄せる。

アリアは自分の緋緋神化のタイムリミットを意識して、焦ってる感がある。そこに今、解決のチャンスとも取れる王子の件が持ち上がり、そこに俺がある意味ジャマするような形でサイオンと決闘したもんだから、頭がぐちゃぐちゃしてるんだ。そんな声だったよ。

ああなると――アリアは、また意味不明な動きをして事態をより悪化させる習性がある。

宮殿前でアリアと接近した際には動きナシだった、緋緋色金と瑠瑠色金。アリア、メヌエット、星システム、ハワード王子、サイオン――

事態が複雑になってる事ぐらい、俺にだって分かってる。

だが対処すべき課題が増えすぎると、人はパニックに陥り易くなる。パニック状態では、物事の優先順位が分からなくなったり、むしろ何もしたくなくなってしまう。

だから……そういう時はいっぺんに全部の事を考えず、1つ1つ片付けていくべきだ。
10人の敵と同時に戦う事はできなくても、1人ずつ倒していく事はできるからな。まあ、これは父さんの受け売りだけど。
と、俺は――
アリアの命令をガン無視で、色金について教えてくれる気配のまだないメヌエットからまずは星を集めるために集中する事にする。
星はあと2つ。こっちはもう、解決に指が掛かってる。またメヌエットの機嫌を損ねて減らされないように気をつけつつ、渡りきるぞ。このロンドンに掛けられた、星の橋を。

4弾　時計台の双剣双銃（Quadler on Big Ben）

イヤな予感が、今度も当たったかもだな。

翌日の早朝、バッキンガム宮殿の侍女長から起き抜けのメヌエットに電話があり――

アリアが王子に何やら言い残して、いなくなってしまったと連絡してきたのだ。欠勤というより急に休暇を取ったような感じらしいのだが、行き先や期間を告げずに消えたから……スケジュール把握のため、実家に現れたら報告してほしいとの事だった。

「相変わらず自由なお姉様ですこと。しかし気になりますわね。この動き」

メヌエットもイヤな予感がするらしく、ちょっとアリアの居所を推理している様子だ。

それなら、そのヒントになるようなネタを得ようと――

すぐさま俺は、アリアの戦妹・問宮あかりに電話をかけた。すると電話はすぐ繋がり、

「おい問宮。お前、今も朝っぱらからアリアをストーキングしてるのか？」

『ちーがーいーまーすッ。これは身辺警護です。でも、はい。今も見えてますよ』

なんだ。拍子抜けしてしまうほど、すぐ見つかったよ。アリア。

「どこだ」

『カフェで、友達と朝ゴハンしてますよ？　おとなしそうな、かわいい女の子と』

やや悔しそうな声の問宮だが、アリアが女子といる分には王子の車にコバンザメしてた時みたいな殺気は放たないんだな。コイツもコイツでよく分からん女だ。

だが……

ちょっと、気になるな。アリアはメヌエットほどじゃないが、友達が少ない。それも、おとなしそうな子とは気が合わないタイプだろう。

「……その友達とやらの写真を撮れるか？　送れ」

『いいですけど、有料ですからね。武偵が武偵に依頼したわけですから。２千円です』

と、男には非協力的な問宮からのメールを、後で５００円Ｅ４枚握り込んだ拳で殴ってやろうと心に決めつつ――待つ事、しばし。

携帯に送られてきた写真は、アンティークなデザインのヒーターが設置されたオープンカフェで、紙袋を空席に置いて、軽食を食べながらコーヒーと紅茶をそれぞれ傾ける……

武偵高の女子制服姿の、アリアと……

日本の女子高生みたいなブレザーと、チェックのプリーツスカート、羽根つき帽の少女。

その少女の顔を見て、俺の血の気が引く。

（颱風の、セーラ……ッ！）

元・眷属の傭兵、今は覇美たち緋鬼一族に雇われている弓使い、セーラ・フッドだ！

セーラはイングランドの英雄ロビン・フッドの子孫。イギリス人だろうし、ロンドンにいてもおかしくはない。だが最近は富嶽に乗って東京上空にいたのが、このタイミングで帰国していたとなると――

鬼たちの、差し金だ。

鬼たちは、あれはあれで妙にアリアの居所を察知できている。まるで誰かが推理して、助言を与えているかのように。

きっと鬼たちはアリアの様子を定期的に見て、自分たちが待ち望む緋緋神の、本格的な降臨時期を計っているんだ。それが近いと判断されたら拉致されかねないぞ。

「問宮。もう2千円払うから、アリアを見逃すな。絶対に」

俺は慌てて、そう問宮に電話したが――

問宮曰く、アリアとセーラは店内に入ってそれから戻ってこないという。連れションの習癖がある女子高生らしい発想で『トイレじゃないでしょうか？』とか言ってるが、違う。

セーラが勘付いて、問宮を撒いたんだ。ここはそうネガティブに見るべきだ。

これ以上後手に回らないよう、俺はメヌエットに急いで状況を話す。そして、

「マズいぞ。もうアリアは連れ去られた様子だ」

自分こそややパニック気味になって言うと

「慌ててはなりませんよ、キンジ。連れ去られたなら、行き先に回り込めばよいだけです。それに事象を聞くに、『連れ去られた』と判断するのは早計です。事実はもっと不都合という可能性もありましょう」

サクランボの香りがするパイプをくわえて、メヌエットが窓の外を眺める。

「不都合……？」

と、俺がこの問題に眉を寄せた時。

さらなる出来事が起きた。
メヌエットの家に、招かれざる客が来たのだ。
サシェとエンドラが恐縮しまくりながら、リビングに案内してきた
高そうな白スーツにサングラス、白ヘビ革の靴を履いた長身の男が。
「――アリアはここにおらぬのか？　ああ、余には立場がある故、ここに足を運んだ事、口外するでないぞ。これは『お忍び』だ」
お忍びの変装がなっちゃいない、分かりやすいハワード王子様だ。
「アリアはここにはいないぞハワード。このクソ忙しい時に、俺たちはお前なんか相手にしてる場合じゃ……イテッ」
「これはこれは。朝も早くから、このような鄙びた館にお見えとは。先日に続けて拝謁が叶いまして幸甚。ハワード殿下は御自ら、アリアお姉様をお捜しなのですね。光栄です」
俺のケツをつねってから、ちょこん、とスカートをつまんでメヌエットは、礼してる。
「その通り。ＭＩ６やロンドン警視庁に言うとアリアの経歴に悪かろうし、何より余自ら見舞いにいってやりたいのだ」
「ふむ。お見舞いにと。お姉様はどこか具合を悪くされたと？」
メヌエットはハワードに気分よく喋らせて、そこから巧みにキーワードを拾っている。
「そのようだな。何やら『持病を治しに行くので、しばらく休暇を下さい』と、アリアは言い残して、余が『どこの医院に行くのだ？』と尋ねたら首を横に振ったのでな。自宅か親族の家で療養するようだな。何やら『持病を治しに行くので、しばらく休暇を下さい』と、アリアは言い残して、余が『どこの医院に行くのだ？』と尋ねたら首を横に振ったのでな。自宅か親族の家で療養す

るのかと思ったのだが」

「ハワード。それはアリアの仮病だ。あいつは超のつく健康優良児だからな」

何の役にも立たなさそうなハワードの情報を俺が切って捨てると、隣からメヌエットが、きっ……と、車椅子を鳴らして中央に出る。

「王太子殿下のお耳に入れるには恥ずかしい、初歩的な推理ですけれども。ここには知恵の回らぬEランク武偵もおりますので――小舞曲のステップの如く、順を追って申し上げましょう」

その目は――鋭い。普段のメヌエットよりも、ずっと。

あのイ・ウーでシャーロックも何度か、ほんの数瞬だけこういう目を見せた。それに、うり二つだ。あれは推理力を働かせる頭のスイッチをONにした時の目だったんだな。

「お姉様は嘘を上手くつけない人物。嘘の下手な者は後々の辻褄合わせを無意識に考慮し、言い方を変えただけの真実を語るものです。つまりは嘘になっていない、本当のことを。そして、お姉様に持病と言えるものはございません――心臓付近に埋まった弾丸に関わる問題以外には。お姉様はそれを『持病』と表現なさったのでしょう」

心臓付近に埋まった弾丸――緋弾。

それに関わる問題。

緋緋神の事か。

「それを『治す』ためには、お姉様が曾て盗まれたある物を複数集めなければなりません。それもほぼ集めきったようなのですが、最後の1つを持つ覇美という者が返還に応じないため――自ら、

取りに行くつもりなのでしょう。それが『行く』という言葉の意味」

……『持病』を、『治し』に、『行く』。それはつまり……

緋緋神化を防止するため、覇美から殻金を取り返しに、行く。そういう意味なのか。

なんで1人で突っかけやがったんだ、あのバカっ。俺を呼べばいいのに……！」

俺は、王子の前でも構わず拳銃をチェックしながらボヤく。

アリア、お前……助けて、って言ったくせに。

温室で約束しただろ。俺が味方してやるって。それなのに、なんで……！

キンジがお姉様に近づけば、サイオンも動く。お姉様はキンジがサイオンに殺されないよう、1人でも奪われたものを取り返せる方法――覇美の拠点への潜入を選択されたのでしょうね」

……潜入捜査……！

そんな事が1人でできるワケないだろ！　どこまで自立心ありすぎなんだよアリアは！

確かにアリアは元々ワンマン武偵。自分勝手に動き、事件を解決しようとする。

助けてやると言った俺が頼りにならないから、自暴自棄になって……

その悪い癖が、また出たんだ……！

ロンドンで、お姉様の身の回りの環境は変わった。お姉様は仲介人にそれを理由として話し、覇美の所へと案内させるつもりなのでしょう」

ハワードの手前、ここは少し説明不足だったメヌエットだが

俺には、その推理の意味も分かる。仲介人、すなわちセーラがコンタクトしてきたのを逆手に

とって……王子と結婚させられそうな身の上を語り『逃げたい』とでも言えばいい。

鬼たちにとってみれば、それは信憑性のある――かつ、鴨が葱を背負ってくるような話。

緋緋神になるまでは自分たちの所に来てくれなさそうだったアリアが、亡命先を求めているとあれば『じゃあおいで』だ。

そこまでは確かに、イージーな話だろう。潜入捜査を企むアリアの側から見ても。

だが、そこからが難しすぎるんだ。仮に、覇美たちの仲間になったフリで鬼のアジトへ潜入できたとしても……そこで閻、津羽鬼、セーラ、その他の鬼共に守られた鬼の大将・覇美の腹から殻金を取り返し、無事脱出して、玉藻のいる日本に戻らなきゃならないぞ。

……クソッ……

アリアが1人で突っ込んで行って、周囲がそれを追っかける。

去年の4月、バスジャックの時と同じになったな。だが――

「メヌエット。その話が正しいなら、俺はお節介と言われようとアリアを救出しに行くぞ。とてもじゃないがアイツ1人で突き崩せるヤマじゃないんでな。今ならまだ、止められるハズだ」

いま俺が出ていってアリアを攫い返せば、アリアの逃亡話はお流れになるだろう。

だが下手を打つと、セーラと戦わなければならなくなる可能性がある。

セーラは狙撃手――弓使いで、魔女。俺とは最も相性が悪い敵だ。

ゲームで火属性のキャラが水属性のキャラに挑むように、実力の差以上に不利になる。

「この仲介人は、俺にとってハイリスクな相手なんだ。好んで戦いたくはないが、戦うとなるとそ

れなりに覚悟がいる」
俺は携帯を取り出し、メヌエットにセーラとアリアの写真を見せてやる。
「お前の話は、あくまで推理だ。その覚悟を決めてこのヤマに挑むからには、今の推理が本当だという証拠――確証が欲しい」
チャキッ、と銃をコッキングしてホルスターに収めた俺に
「確証は、あります」
メヌエットは、強い意志のこもった、勿忘草色の瞳を向けてきた。
「――妹だから、分かるのです」
俺は――
「何よりの論拠だ」
と、一言だけ返す。よし。アリア奪還作戦を決行するぞ。
とはいえロンドンは広い。まずはそこからアリアの行き先を捜さなければならない。
案の定、問宮はアリアを見失ってしまったようだったので
どうもこの俺より頭が悪いらしく、メヌエットの話をよく分からないままに聞いていたらしいハワードに、
「ハワード。このままだと、アリアは攫われるぞ。いや、自ら攫われようとしてるらしい。お前の力で警察でも動かして、居場所を探れ。そこに俺が行くから」
半ば解説してやりながら、そう言ったところ……

「お前はさっきの余の話を聞いてなかったのか？　余には立場がある。未来の王太子妃となるアリアにもだ。この件に警察など使えば、スキャンダルになろう。断る」

「スキャンダルとか気にしてる場合じゃねえんだよッ。いいからお前たちは速やかに余をアリアの所へ案内せよ。いいから」

「とはいえ荒事になりそうな雰囲気だ。余もこれを持ってきて良かったと思うぞ」

と、これもアリア以上に自分勝手なハワード。シロウト丸出しの手つきで装飾銃のリボルバー式拳銃を取り出し「安全装置はどう外すのだ？」などといじくってる。まるで意識できてない銃口がサシェや俺に時々向くので、

「危ねえな！　こんな所でセーフティを無闇に外すな！　トリガーに指を掛けるな！　それは発砲する直前と、発砲する瞬間だけでいいんだ！　陸軍にいたんだろお前ッ！」

そうだ。陸軍第8旅団の第29工兵隊、爆発物処理班にいた」

それなのに、なんでそんな事も知らねえんだよッ！」

俺が美術品みたいな拳銃のリボルバーを掴んで叫ぶと、

余が軍で修めたのは、爆発物処理の座学だけだからな。こんな危険な凶器には、周りが触らせなかったのだ」

ケロッとした顔で言ってくる。とことん使えねえなコイツ……！

「お姉様の居場所ですか。それは初歩的な推理で分かるものですよ」

一方、ここは頼りになるメヌエットが――

「先ほどの写真にあった喫茶店は、ホルボーン駅からサザンプトン通りを70m北へ行った所にあるフリー・ステート・カフェ。あまり公にしづらい面会をロンドンの中心街でしていたという事は、相手も市内に拠点があるのでしょう。写真の少女が所持していた紙袋は酒屋さんのもの。袋の大きさや皺から、ビンの形状も分かりますよ。最近ロンドンで流行している蒸留酒のシミーン・アルヒですね。セーラは酒を飲みますか」

「いや、富嶽でも他がみんな飲んでる酒盛りの席でも、飲んではいなかった。茹でたブロッコリーばっかり食う、偏食家の女だ」

「写真のテーブルにはサラダがあり、それに添えられていた茹で卵のスライスをセーラが取り除いたものが皿にありました。彼女はベジタリアン。シミーン・アルヒは牛乳や羊乳の乳糖をアルコール発酵させた乳酒、つまり動物由来の酒ですからね。これは、誰かの遣いで買ったものを運んでいると考えられます」

博学なメヌエットの推理で、分かっちまったが……と、なると……

「クソッ、いるぞ。鬼が。鬼は酒と米が好きで、それを暴飲暴食するんだ」

セーラだけじゃなく、鬼もいるんだ。マズい。早く見つけないとッ……！

「先日の散歩で見かけましたが、カドゥガン・レストランの専用トラックに日本米の袋が納入されていました。あのレストランはイギリスの国産食材にこだわり、輸入品は大口の注文が無い限り使わない。そこが日本の米をわざわざ入れさせていたので、不審に思っていたところです」

よ、よく見てたなそんなの。しかもよく覚えてたな。

俺なんか、どこの道を歩いたかもウロなのに。
「そのレストランはどこにある」
「チェイニー・ウォークの先――テムズ川の岸にずっと停泊させている小型客船。それが丸々、カドゥガン・レストランなのです」
アリアの行き先を推理し終えたメヌエットは、車椅子を自走させて玄関方面へ向かう。
俺がその後を追うと、
「ベーカー街の紳士服店へ行きますよ。あのレストランは正装の客でなければ入れません。そのラフな制服では入店拒否されて、立ち往生する事になりましょう」
「いや、服なんか作ってるヒマは――」
メヌエットの左右について歩いて肩掛けや膝掛けをセットしていくサシェとエンドラの合間に頭を突っ込み、俺がそう言いかけると……
こつん、と、メヌエットにパイプで顔を叩かれた。
「我々は既に後手に回っているのですよ。ただ急いで無闇に突入しようというのは下策というもの。このケース、相手の隙を突く必要があります」
「隙？　鬼とセーラが同時に油断するタイミングなんて――」
「まあキンジ。初歩的な推理ですよ。万人が、いえ、全ての動物が油断するタイミングがありますでしょう。他に大切なものがあっても、必ずやそこから目を離すタイミングが」
「いつだよ？」

「お食事中」

メヌエットはそう答え、今までのように俺たちに促してではなく――

「A belly full of gluttony will never study willingly 飽食した者の頭は鈍る。米は最も消化吸収が早い食品の1つですし、酒も嗜むならそこが好機。敵方の注意が散漫になったところに、お邪魔しなさいな」

――姉のため、自ら、ホームズ家のドアを開いた。

既製服で、防弾繊維で、俺の体型に合うもの――

となると選択肢はほぼ無く、俺はメヌエットを見て朝から対応してくれた老店主に黒いスーツを着させられた。

これが体にピッタリくっつくタイトなジャケットで、撫で肩気味の肩線、狭い返り襟、後ろから見るとX形に見えるほど高めでキュッと締まったウエストの……純英国風スーツ。

しかも、3つボタンの真ん中だけを留め、袖口のボタンも1つ外すブリティッシュ流の着こなしも強要されるし。こんなんボタン取れてるようにしか見えんだろ。

「カッコつけすぎてて、逆に、だせえ……型も古いし……」

トドメに黒紫色の細いネクタイや白いポケットチーフでキメまくらされた俺がボヤくと、

「なんのなんの。お似合いですわよ？　惚れ直しましたわ」

一緒に道へ出たメヌエットは、マジでカッコイイと思ってる顔で見上げてくる。

そんなカッチョイイ俺に、メヌエットの命令でサシェとエンドラが乗って運んできた乗り物

は……なんと、チャリ。エコのため市民が使う、公共レンタサイクルだった。
しかも2人で漕ぐ、カップル用の超ダサいやつ。いまベーカー・ストリートにあったのはこれだけだったらしい。
電話で連絡したワトソンは距離的に車で来た方が早いとの事だったが、渋滞の多いロンドンでは車よりチャリの方がいいとの話で、やむなく俺はそれの前方サドルに跨がった。
けど……俺にはトラウマがあるんだよなぁ、チャリって。4月の、チャリジャックの。
しかもその後、バスジャック、ハイジャックが続いたんだ。
今回はそうなりませんように、と、遠いプロテスタント教会のシンプルな十字架に祈りつつ……
応、サドルの下に爆薬がない事を確かめてたら
「ほう。これが自転車か。余は乗ったことがないが、面白そうだ」
うわ。もうジャックされたぞっ。
白いスーツのE子が、後部サドルにハンカチを敷いて2人乗りしてきやがった。笑顔で。
「降りろよッ！　お前は来なくていいから！」
「お前も知っておろうが、アリアは強情だぞ。お前が戻れと言ってもアリアが聞かねば、どうする？　ついては余が命令して、アリアをこちらに戻す。貴族のアリアは余の命令には逆らえぬからな。さあ、早く案内せよ」
自己中なハワードはテコでも動かなさそうだし、メヌエットは王族の意志に逆らわないご様子。
なので、俺は——

「ああもう勝手にしろッ！　だがお前に何があろうと、俺は助けないからな！」

「余もお前などに頼ろうとは思ってはおらぬ」

などと唾み合いながら、本来は仲良し専用の2人乗りチャリでやむなく出発した。

朝日の中をレストランへ向かう道すがら、ハワードは文句たらたら。

1kmも走らん内から「足が疲れた、もう漕げぬ！」ときた。何でチャリで足が疲れるんだよお前。それからは完全なお荷物で、俺が立ちこぎしたら「速い！　危なかろう！」とズボンを引っ張ってズリ下ろしてきやがるし。もうこれテムズ川に捨てていいですか？　イギリス国民の皆さん。

そんなこんなで、どうにかメヌエットに教わったチェイニー・ウォークを走り抜けると――テムズ川の川岸に半永久的に接岸したまま営業しているらしい、クルーザー大の船上レストラン、カドゥガン・レストランが見えた。

桟橋からクルーザーへ渡る短いタラップには、『本日貸し切り』の札が掛かっている。

チャリを道端のサイクルドックに乗り捨てて、まずは相手の戦力を確認しようと岸から船の様子を窺うと……

船の前部甲板は、陣幕で広く四角に囲われていた。

さらにどこから運んできたのか、季節外れの桜が木ごと飾られている。

「あのハンギング・スクリーンは何だ。美しいデザインだな。余は気に入った」

「あれは日本人が宴会やるときに場を囲う、幕だ」
ノンキなハワードに、一応説明してやるが――
陣幕に染め抜かれた五瓜の家紋と、崩し字にした『無』一文字。富嶽で見た、鬼たちのエンブレムと同じだな。やっぱりイギリスに来てたって事か。鬼たちも。
そこに風が吹いて、陣幕のスキマから中の様子が見えた。
――いた。
朝っぱらから飲めや歌えの宴会をやってる、鬼たちが。
なぜかそこだけアフリカンなデザインの絨毯を敷いて卓座になり、ピラミッドみたいに積み上げた大量のオニギリを食ってる。
酒は日本酒が見当たらなかったのか、こだわりがないのか、洋酒ばかりだが。
（どうやら……日本とアフリカの文化を混ぜたような、独自の文化を持ってるみたいだな。鬼たちは）
風でけっこうチラチラ見える陣幕の中に、見えたぞ。俺のせいで、本角になっちまったイケメン顔の大女鬼・閻が。
「――人間五十年――」
ハスキーな声も聞こえてきた。
アフリカンな色柄の和服で、ゆったりと敦盛を舞っている様子だ。
そんな閻をポーッと赤くなって眺めつつ、朱塗りの杯で酒を飲んでいるのは――

俺と同い年ぐらいの見た目をしてるくせに、銀座のクラブのママさんみたいな黒留袖の花刺繍入り和服を着た、津羽鬼。細身でサディスティックな顔つきの、黒髪ロング鬼だ。

（……パワーの闇、スピードの津羽鬼……それと……）

もう1匹？　いや、1匹なのかどうか判然としない鬼がいる。

というのもそいつは、アフリカから出土したみたいなデザインの、タコの吸盤みたいな模様のある壺の中に入ってるからだ。

だが時折そのフタが開いて、中から痩せた褐色肌の腕が出てくる。その手がオニギリや酒を壺の中に入れては、皿や空き瓶が外に捨てられてるんだが……おっ。今、同時に腕が3本出た。ということは2匹以上が中にいるって事か。

昔ジャンヌが教えてくれたが、あれは確か壺。イ・ウーの天才技師だ。なるほど、壺の中で集団で発明をして、天才を演じてたってワケか。藍幇のココたちと同じシステムだ。

あと、1人で黙々とブロッコリーをミキサーにかけ、ジュースにして飲んでるセーラ。オエッ。あんな青汁以上に緑色の汁を、よくゴクゴクいけるな。

さて、この様子から見て鬼たちは

あのクルーザー・レストランを屋形船みたいに使って、海外旅行に来た田舎のおっさん状態でワイワイやってるわけか。米はイギリスではいまいち見当たらなかったんで、強奪せず店に金を払って集めさせたんだな。

元から享楽的なタチの連中だったが、確かに油断してるな。何が起きようと自分たちが人間ごと

きに負けるワケはないと思ってるからだ。
——そして、その鬼たちの車座に。
「いたぞ。アリアだ……！」
武偵高セーラー服姿で正座して、おにぎりをはむはむ食べてるアリア。ちょっとグレて不良グループに入ったみたいな顔をしてるよ。やっぱりどこか、自暴自棄な感じだ。
あいつ、あれは潜入捜査のつもりが、マジで鬼の一味になっちゃうかもだぞ。ヤクザやテロリスト集団に潜入してたら案外居心地が良くて、そのまま寝返っちゃう武偵もたまにいるしな。なおさら連れ戻さんと。
しかし……違和感ねぇなあ。鬼の輪に入ってるアリア。元々鬼みたいな性格だし。今やツノもちゃんとあるし。赤鬼ならぬ、ピンク鬼だ。
とはいえ香港で『呑むと泣き上戸』という恥ずかしい酒癖が明らかになってるからか、酒は飲まないでいる。
（鬼側の、戦力は……）
壺がいる分、医科研病院に来た時より多いってワケだ。
非ヒステリアモードの俺が1人でどうこうできる人数じゃない。アリアがこっちについても、かなわないだろう。絶対、戦闘に持ち込んじゃダメだ。
だが、戦闘は今こっちの予定にはない。
今回のミッションは、アイツらをやっつける事じゃないんだ。

やるべきことは、アリアの保護。いま突入して、負ける戦いをする必要は全くない。
メヌエットの推理通り、ヤツらが満腹になり酔い潰れるのを待とう。そうならなくても、問宮やワトソンを監視に付けて、チャンスを窺う道だってある。
よかった。早い段階で鬼とアリアの所在が割れた事で状況は、有利に動いてるぞ。
と、俺が侵入のタイミング、隠れ場所、退路などの検討に移ろうと船全体を見渡した時。
（……お、おいッ……！）
ちょっと目を離した隙に、ハワードが船へ入るタラップを、勝手に渡ってる！
そして貸し切りの看板なんか見えてないようなムードで、堂々と甲板へ上がっちまった。
王子は悪い意味で、怖い物知らずなんだ。いつだって他者は誰もが自分にひれ伏す、それが当たり前の人生を送ってきたから。
「――っ！」
俺は全力疾走で、それを追う。
だが陣幕で見えづらかった鬼たちの戦力分析に時間がかかったせいもあり、ハワードは俺よりずっと先に……鬼たちの宴会場へ、幕を一部引き開けて侵入してしまう。
突然の王子登場！　に、アリアがオニギリをノドに引っかけてえづき、
「どれも医者には見えぬが、お前たちは日本人のようだな。英語は分かるか？　アリアをこちらへ戻せ。今ならまだアリアと同郷のよしみで許しておく。アリアも早く戻れ」
胸を張って自分の要求だけを突きつける、そしてそれを誰もが受け入れて当然といった態度のハ

ワードは――

アリアを歓迎する宴に侵入した自分へ鬼たちがきっと今までの人生、人に敵意を向けられた事

（危ない……ッ！）

ハワードはもう、闇、津羽鬼、セーラ全員の殺傷圏内にいる。

このままだとヤツらはハエを払うように、王子を殺しちまうぞ。今すぐにでも！

どうやらあの場では一番の格下らしい津羽鬼がほとんど無いからだ。

動くつもりだ。もう猶予がない！

「クソッ！」

この緊急事態に、俺は――

タラップを渡りきって甲板に上がると、バッ！と陣幕を跳ね上げつつ中に駆け込んだ。

そして既に抜いていた銃を片手に、黒スーツ姿でハワードの前に出る。

「キ、キンジっ!?」

オニギリをお手玉しながら、アリアが赤紫色の目をまん丸に見開いて驚く。

俺の出現に驚いたのは、鬼たちもだ。

良くも悪くも、俺はヤツらのトラウマ。

闇と富嶽で戦って引き分けた、荒武者って事になってる。

なのでヤツらもハワードなんかに構ってる空気ではなく、注意をこっちへ向けてくれた。

杯を、傍らに置いた。

苦笑いして――

「気分良く女子会やってるとこをジャマしたな。だがジャマついでに、こいつと同じ要求をさせてもらうぜ。アリアを返せ。さもなくばお前らのツノを1本ずつヘシ折って、大英博物館に寄贈する。俺は宝物がらみでイギリスに借りがあって、ちょうど珍しい物が欲しかったところなんでな」

ヒステリアモードではない俺は、内心ヒヤヒヤしながらも脅しをかける。

だが鬼たちは脅しに屈する連中ではなく、

「ほう。汝も倫敦であったか。中々如何して、背広も似合うぞ。遠山侍」

舞い落ちる桜の花びらをバックに、閻がこっちにイケメン顔で苦笑しながら腕を組む。

「遠山……閻姉様の御角のカタキ……！」

津羽鬼はキバを剥き、傍らに置いていた鬼丸拵えの刀に手を掛けている。

しかし相手が俺とあって、閻の命令無しで襲いかかってくる感じではないな。

「アリアは自分の意志でキノクニに来るつもり。お前たちはフラれたんだ。帰れ」

セーラもジト目で、ぷく。ほっぺを膨らませて怒ってる。

「……」

壺はフタをちょっと開けて、メガネの下から目つきの悪い細い目で俺を見ていたが……

目が合うとフタを閉じて、巾に籠もった。

いま分かったが金髪のショートツインテールなんだな。少なくとも巾の1匹は。

「じゃあマヌケのお前らに教えてやるぜ。それはアリアの超稚拙な潜入作戦だ」

「ちょっ……！」

それをぶちまけた俺に、アリアはそれが事実だとモロバレの仕草で慌てる。

鬼たちとセーラはマジでアリアごときにノセられていたらしく、キョトンとしていたが――それで、一つ裏が取れたな。

「医科研病院のコンビニに出た時も、ちょっと思ったが……お前らには誰か、軍事顧問がいるんだな？　誰だ。教えろ」

鬼たちは、そこまで作戦高くない。覇美がそうとも考えられない。スパイを入れてくる器用さも無さそうだし、藍幇やリバティー・メイソンのような組織力も無い。

しかし、その鬼たちがこうもアリアの所に――ロンドンにいる事まで察知して現れたとなると、何者かが裏にいて助言を与えたと考えるべきだ。

そして……

その何者かは、この鬼たちをも使っているのかもしれない。もしかすると、極東戦役の宣戦会議の頃から。

今にして思うと、覇美が極東戦役に参戦してきた理由も不明確だったしな。

「問われて答えると思うは、如何にも太平楽。我が、其の名を告げると思うか？」

その存在だけは言外で明らかにした、閻は……

敵の、中隊長みたいな女鬼だ。

戦闘力は戦艦の如しで、津羽鬼からの信頼が厚いところを見るに人格者でもあるらしい。

だが、欠点も多い。自信過剰なところと、融通が利かないバカ正直さと、鬼に共通する状況判断の遅さと甘さ。

つまり先手を取りやすく、罠に引っかけやすいタイプ。

「思わない。だから吐かせる」

と、俺は戦うフリで言いながら――

閃光弾、音響弾、煙幕弾を仕込んであるベレッタのセレクターをバーストに入れる。

そして、『RA』とアリアにマバタキ短信号を送った。

作戦を暴露されておじゃんになったアリアも、俺の名付けて『ウヤムヤ3連射』で場が逃げる流れになれば自分でこっちに来るだろう。

鬼たちは強く、戦えば分が悪いが、俺とアリアで逃げに徹すればなんとかなるハズだ。

王子はマジで船から川に落としてやるぜ。少し頭冷やせ。人は皆虫けらみたいなものと考えてる鬼たちは、それをいちいち殺しはしないだろうしな。

と、泥縄ではあるものの、応の作戦を立て――

銃を恐れない鬼たちの目の前で、武偵弾を放とうとした時。

壺の中から、思ったよりカワイイ、訛った声が上がった。

「この遠山侍、やな予感がするわいや。此方が手傷を負いかねぬおん。遊ぶ要無しおん。欲っし手札――アリアはもう我らの手中よ。去ぬおん」

そう中から声を発した壺が、ごてん。と、横向きに倒れる。

そして、ごろごろっ、と……陣幕の下をくぐって、甲板を転がっていった。中で這ってハムスターの車輪みたいに回してるのか、あれ。

だが、敵の戦力が減ってくれるのはこっちとしては願ってもない流れだったので――

さらに誰かが退いてくれないかと、俺が発砲を一手待つ。

しかし――その一瞬が命取り。

それまで誰の気配も感じなかった、陣幕の反対側から。

マズいのが……宴会場に入ってきてしまった。

ロンドン中で、最もマズイのが……！

――殿下を誘拐するとは、その度胸には驚かされたぞ遠山。そして、愚かしさにもだ。あまりに愚かすぎて、俺の想定を超えていた」

三つ揃いのダークグレー・スーツにロングコートを重ね、手にサブマシンガン――

銃身を切り詰めたMP5Kを携帯した、サイオン・ボンドが……現れた！

この男の出現にアリアはまたまた飛び上がってビックリ仰天し、鬼たちも振り向いてる。

だがその視線をガン無視で、サイオンは俺だけをまっすぐ見据えている。

違うっ。なんで俺が誘拐したことになってんだ。ていうか今はハワードなんか――」

慌ててそう言い返す途中で、気づいた。

王子を誘拐した事になってるんじゃない。してるんだ、サイオンが。

サイオンは大英帝国に絶対の忠誠を誓っている。MI6に危険人物と目されている俺がハワード

に、すなわちイギリスに有害な行動を取りかねないと見做し……

次は殺す、という先日の警告の通り、もう難癖を付けて殺すつもりなんだ。

サイオンに、俺の視線が移った隙に。

パッ、と津羽鬼が消え

「うぁっ！」

陣の風が巻き起こり、桜の花びらがその軌跡を示す。アリアへ駆けたんだ！

アニメ声の悲鳴が聞こえた次の瞬間、津羽鬼はアリアを肩に担いでいた。

ぽん、と担ぎ直されたアリアは……気を失っている。

津羽鬼が超スピードを使った当て身で、失神させたんだ。

そのまま津羽鬼はバックステップで陣幕から退き、それを追うように闇も出ていく。

ヤツらは俺と戦うとムダにケガ人が出ると判断して、アリアを持ち逃げするつもりだ。

しまった。サイオンのせいで、ここも後手に回ってしまった。アリアが連れ去られる！

「アリア！」

俺が叫んだ時、今度は残されたセーラが俺とハワードの方を向いて立ち上がった。

そして今は弓の無いその手で、『あっち向いてホイ』みたいに横を指す。

絶妙なタイミングで横を指されて、俺とハワードはちょっとそっちを見てしまう……

いや、俺は引っかからないぞ。

これは俺が闇にやったような視線誘導だ。何をするつもりだ、セーラ。

と、俺がバッと首を振って視線をセーラに戻した瞬間。

「竜巻地獄（ヘルウルウィンド）――」[1]

小声で唱えながらのセーラが、ぐぐぐぐ……バッ！　と両腕を回した。仮面ライダーの変身ポーズみたいに。

その瞬間、ぶわあぁああぁっ！　と、セーラを中心に烈風が吹き上がり――

（……っ……！）

俺、王子、そしてサイオンに風速50mを超えるような爆風が叩きつけられた。

皿や酒瓶が飛び散り、飾られていた桜の木が倒れ、陣幕が四方に吹っ飛んでいく。

「……ッ！」

サイオンは薙ぎ倒された木を避けて船から飛び降り、俺は倒れないよう必死に踏ん張り、ひっくり返った王子は埃が目に入ったのか「目が！　余の目がっ……！」と藻掻いている。

風と共に、セーラはその場から消えており――

「……」

俺は、突風をくらう直前にチラリと……ではなく、おへソまで丸見えになっちゃってたセーラのプリーツスカート内部の様子に――セーラごめんと思いつつむしろ脳内で集中し、血流を促す。

よし、いける。そして一つ発見だ。チラでもモロでも使えるんだな、あれの光景は――

ヒステリアモードに。

どうやらセーラの視線誘導は、あの技をやるとスカートがひっくり返って中の白木綿＋ヘそリボン1つのアレが全公開になっちゃう事への対策だったらしい。

だが、決してそれを目撃する事が狙いじゃなかったものの……俺の動きは結果オーライ。

セーラ。今のは、君が見せた最大の失策だ。もう、なれたぞ。俺は――こっちの、俺に。

風使いの君は俺と相性が悪いと決めつけていたが、そうでもなかったかもしれないね。

テムズ川に沿った車道――

チェルシー・エンバンクメントに出ると、鬼たちは一列になって道を西へ走っていた。

そのスピードは皆人間離れしているが、津羽鬼は閻に合わせて走っており、自動車程度だ。かなり引き離されてしまったが、壺が転がる姿も、弓が入っているらしいトランクを抱えたセーラが追い風に乗って走っていく姿もまだ見えている。アリアの姿は見えないが、見えないという事はつまりあの壺の中ってことだ。

まだ、取り返しがつくぞ。と、俺が駆け出そうとすると――

ッバババババッ！

俺めがけて、ナナメ後ろ30m辺りからMP5Kの連射音が鳴り響いた。

（……ッ！）

キュキュキュキュンッ！　と、足下や近くの街灯で火花が弾ける中、俺はその場で身を捩ってトンボ返りを切る。

しかし、今の銃は他のサブマシンガンとは比べものにならない命中精度を誇るMP5K。

ヒステリアモードで回避しても1発命中コースにあった弾は、既に通常弾を薬室に入れ替えてあったベレッタでの鏡撃ちで防ぐ。

音源側、レストラン入口付近に返したその弾を目で追うと――

バサッ！　と、当然のように弾丸を防弾コートで払ったサイオンが、フェンスに片手をついて跳

馬のように車道へ移ってくるところだった。
さっきの竜巻地獄で船から落ちたと見せかけて、舳先にブラ下がってたんだな。
そこから復帰して、俺を追ってきたんだ。
クソッ。いま俺はサイオンを相手にしてる場合じゃ……！
――ッ！」
その時、ドゴオッ！
車道に出たサイオンを、ポルシェ９１１ターボ・カブリオレが撥ねた。
サイオンは車道を鬼たちとは反対側、ずっと向こうまで飛ばされてしまい
おっと失礼。Oh excuse me 友人がステキな身なりをしてたから、ついよそ見運転をしちゃったよ」
そのままそのオープンカーで俺の隣にバックしてきたのは、ワトソンだ。
イギリスで緊急車両を示す青色警光灯を、ボンネットの端に付けている。
向こうのあいつらが鬼たちだね。見た目ですぐ分かったよ。さあ早く」
俺を助手席に引き込むワトソンは、サイオンに先日の仕返しをした形になったな。
しかし人を１人撥ねておいて、この平常心。これで実は女の子なんだから恐れ入る。
助かったよ。だが、リバティー・メイソンとＭＩ６との関係も悪化させてしまったね」
元から悪かったものは、これ以上悪くならないよ」
車を鬼たち側へターンさせたワトソンのセリフを、否定するかのように
既にかなりマズかった状況が、さらにマズくなってしまった。

「貴様、サイオンに何をするかッ。だがその叱責は後だ、追え！」

リーダー気取りのハワード王子が、ポルシェの狭い後部座席に乗り込んできたのだ。

「なんでこういう困る動きをする時だけ素早いんだ、王子」

俺が王子をネコ掴みして車から降ろそう……とした時、車道で普通に起き上がってくるサイオンの姿が目に留まった。通りかかった大型オートバイ――アイボリー・ホワイトのトライアンフ・サンダーバードから運転手を蹴り落とし、自分が跨がってる。

……まあ、車に撥ねられたぐらいでリタイアする男じゃないだろうとは思ったけどね。

もうちょっとダウンしてようよ、サイオン。

「ちょっと荒い運転になるハズだぞ。しっかりドアグリップを掴むんだ」

俺は方針転換し、ハワード王子にシートベルトを掛けてやる。

こうなればサイオンの話を実行してやろう。ハワードを人間の盾にするんだ。

ハワードが後部座席にいるからか、実際サイオンもすぐには撃ってきてないしな。

バックミラーでサイオンの様子に気づいたワトソンが、舌打ちしながら空冷水平6気筒ターボエンジンを甲高く鳴らす。

テムズ川沿いのチェルシー・エンバンクメントはさほど交通量の多い道ではなかったが、今は朝の通勤時間帯。ポルシェは車の間を縫うように、ジグザグ走行せざるを得ない。

一方の鬼たちは、車を踏み越えてどんどん逃げていく。

アフリカン和服を翻す閻は裸足。その閻に合わせて軽く駆けてるような感じの津羽鬼は下駄。

それでも鬼の走行スピードは、人間が車を使ってようやく互角って事か。参ったね。

「スタッドレスタイヤにしてくれれば良かった」

ワトソンが呟く中、ポルシェのフロントガラスに――雪だ。だが対岸では降っていない。

車で追ってきた俺たちの脚を弱らせるために、セーラが雪雲を呼んだか。

雪の結晶を突っ切って鬼たちを追う中、「寒いぞ！　シートヒーターは無いのか！」と王子が喚いた時――

ポルシェの前方かなり先で、がぱんっ、とトランクを開けたセーラが、ぽむっ！

足下で空気のクッションを炸裂させて飛び上がり、闇の大きな肩に乗った。後ろ向きで。

その左手には既に弓が、右手には矢があって――

――ぴゅんっ――！

射ってきたッ！

俺はその矢を撃って防ぐが、セーラはその矢の真後ろに全く同じ軌跡の第2矢を隠して飛来させてきていた。しかし、

「……ッ！」

ワトソンが急減速したおかげで矢の相対速度が減り――俺は、銃弾掴みの応用で何とかその矢を掴み取る事に成功する。

しかしその急減速で、背後に聞こえる1600ccエンジンの重低音が大きくなる。

振り向けば、サイオンが吹雪を掻き分けるようにしてサンダーバードで迫ってきている。

バイクの方が有利な車を避ける機動も、さらに剣道の『見切り』のように最小限だ。
速いッ。真横につけてきた！
「――逃げるな」
ッタタタッ！
サイオンが照星・照門を使わない水平撃ちで狙いを、切つけずに俺を撃ってくる。
「じゃあ追わないでくれないか」
俺は自分めがけて殺到してくる弾を連鎖撃ちでいなしつつ、サイオンに正当なクレーム。
そこで車道の前方に、電車のように長い巨大なトレーラー車……コンボイ・トラックが見えてきた。
同じ方向に走ってはいるものの、高速走行するこっちから見れば止まっているも同然だ。
前方のコンボイへ急速に近づく中、サイオンのサンダーバードにポルシェの側面を当て、左に押しやったワトソンが――
コンボイの左側に出ると見せかけて、急ハンドル。右側に出た。サイオンはコンボイの左側を行き、俺たちはコンボイを挟んで右と左を平行に走る格好になる。
そこでワトソンが、スーパー・チャージャーを使う。衝撃に気をつけて！」と言うや否や……
ハンドブレーキの脇にあったトグルスイッチを、パチンッ、と入れた。
その瞬間、バンッ！　と、ジェットコースターのようにポルシェは数秒間急加速する。
「――おッおい！　速すぎるぅ！　加減せぬかぁ！」

E子が身を屈め、ポルシェがコンボイの先に飛び出た時には――

もう、サイオンのバイク・サンダーバードをずっと引き離していた。

コンボイの反対側で見えなかったワトソンに不意を突かれたサイオンが、眉を寄せた時。

今度は前から、ピュンッ！　セーラの矢がポルシェに飛来する。

「……ッ！」

俺の額を狙って放たれたその矢はもう掴めなかったので、左手の螺旋で払った時、今度は後ろから、ッバババッ！　ＭＰ５Ｋの連射音だ。Ｅ子が頭を下げたせいで露わになった俺の後頭部へ、弾が襲い来る。これをサイドミラーを見て背後へ向けた右手の銃で銃弾撃ちするんだから、やれやれ。忙しい。

――前門のセーラ、後門のサイオンか」

セーラとサイオンは両方とも、まず俺を始末しようとしている。それが相互にどうやら分かっているらしく、セーラはサイオンを、サイオンはセーラを射撃線に捉えていない。言葉を交わす事もなく、お互いにとっての敵――俺を挟み撃ちにしてるんだ。

「あうっ、い、痛い！　肩をドアにぶつけたぞ！　もっとソフトに運転せいッ！」

ドアグリップを掴んでるハズなのに狭い後部座席を転げるＥ子は、腕力も握力も弱いな。女の子より弱いぞ、きっと。俺も女の子より弱いから人のことは言えないけど。

とうとう俺のベレッタが弾切れを起こした、次の瞬間。

――ぴゅんっ！　バスッ！

超・流の射撃手同士が織り成す阿吽の呼吸で、セーラとサイオンが矢と弾が俺の頭へ同時に到達するようなタイミングで射って、そして撃ってきた。だがその軌道は若干左右に分かれていたので、

2人とも、遠慮無く頭ばかり狙ってくれるね」

俺は弾倉を再装填しながら、ここはやむを得ず桜花気味に、頭を振る。後頭部左側をサイオンの弾に、右額をセーラの矢に、それぞれ極僅かに掠めさせながら。

それでセーラの矢をサイオンに、サイオンの弾をセーラに飛ぶよう軌道修正してやった。頭突き送弾。石頭の俺が今考えた新技なんだけど、いきなり2発同時にできたね。

パッ、と俺の髪と血が雪降る空中に小さく舞い

「ひいっ！」

出血は僅かだったが、ハワードはドン引きしてる。男のくせに。

セーラは閙の『銃弾握り』で助けてもらったようだが、サイオンはセーラの矢を機動で避けてきらに撃ってきた。ちょっと、もはや王子にも遠慮してない感じで。

「……ッ……」

サイオンほどの腕前ならミスはしないだろうが、王子は戦いのド素人。素人は、プロが考えもしないような動きをする。それは事故に繋がるんだ。

だから、俺は

「ワトソン、ありがとう」
運転中のワトソンの頭を抱き寄せ、頬に、チュッ。小さくキスしてやり、
「ひゃう!?　ト、トオヤマっ!?」
テンパったワトソンのジグザグ走行に合わせて、ポルシェから側転を切って跳ぶ。
――空中で、コンバット・ロードしておいた空嚢弾を発砲しながら――
この追走劇を知らずに右折して車道に入ってきた、銀髪女性の乗る金色バイクに屈んで降り立つ。
「What!? Oh! Oh my――」
「ちょっと借りるよ」
ボンッ！　と広がった空嚢弾のクッションへと、抱き上げた女性を優しく落としてやりつつ――
ウォンッ！
アクセルを引いてワトソンとは手に分かれ、E子に笑顔でバイバイした。
このバイク、スズキ・ハヤブサGSX1300Rだな。それも鈍い金色のような銅色を用いたカラーリングの初代。
サイオン。そっちのサンダーバードとこっちのハヤブサで、猛禽類が揃ったな。
と、バックミラーをチラ見していたら――
――ざぁっ！　こっちも忘れるなと言わんばかりに、前方の闇が道端の露天で売られていたパイナップルの大カゴを車道側にぶちまけた。

道にバラバラと勢いよく転がってくる、パイナップルの群れ……

……の中に、パイナップルにチョイ似の九七式手榴弾が幾つか紛れてるッ。壺がフタをちょっと開けて、そこから道に撒いたんだ！

ドッ！　ドドウッ！　と、その旧日本軍の手榴弾が炸裂する中を、破片を避けつつ俺がスズキ・ハヤブサで疾走する。

ドリフト、スピン、ウィリー、パイナップルを踏んでジャンプ。ミラーに映るサンダーバードのサイオンも――俺と似たり寄ったりのバイク捌きでこの難所を通過してくる。

だが車なのでマトの大きいワトソンは右折して爆発を避け、一旦この車道から消えた。

回り込んで、再び戻るつもりらしい。

前方でまた爆発が起き、街灯の鉄柱が一本――グラリ――ドシャッ！

踏切のような状態で、横倒しになった。俺とサイオンの、すぐ前方で。

躱しきれない。それを悟った俺は、街灯の鉄柱と地面のスキマが1・2m程あったのを見計らいクラッチを切り、ギアをNにして、

「――よッ」

黒スーツの裾を翻してバイクから飛び上がり、ベリーロールの要領で鉄柱を飛び越えた。

同時に、そのまま無人走行するハヤブサは鉄柱の下をくぐり抜ける。

俺は上を。バイクは下を。それぞれ慣性の法則で併走し、鉄柱をやりすごした向こうで……

バッ、と、俺がハヤブサのシートに戻った。

街灯の踏切をクリアした俺を追う、サイオンは
思いっきり身を屈め、オートレーサーがカーブする時のようにサンダーバードを傾けた。排気管
が道に擦れて火花を散らす中、ブレーキングでカウンターステアを当て、スライド走法で鉄柱をく
ぐり抜けてくる。あれも諦めない男だな。
そして今の避け方の違いで――俺の方が変速の回数が多かったせいで、サイオンが俺に追いつい
た。ついに肉薄し、ハヤブサをMP5Kで仕留めようとしてきたが――
……チッ！
交差点の横断歩道を通過するところで、サイオンが急ハンドルを切って俺から離れた。
バックミラーで確認すると、騒ぎの中で逃げ遅れた妊婦を避けて走ったせいみたいだ。
……サイオンも人の子だね。だが、俺が追ってるのは――
テロの練習台にするかのようにロンドンの道を破壊し始めた、血も涙も無い鬼たちだ。
これ以上の町への被害は、武偵としても見過ごせないぞ。
とばかりに、今度は壺が遠くから手で投擲してきた爆弾を――
俺はハヤブサの上で宙返りし、セパタクローのように蹴り返してやる。
それは上手い具合に鬼たちの背後で炸裂し、ヤツらはちょっと躓いてる。
それでフタが、瞬大きく開いたんで少し見えたが、壺は腕にダイナマイトを何本も巻き付け、首
に各種の手榴弾をネックレスみたいにジャラジャラ下げてた。怖くないのかよ。
闇の肩に座ったセーラにもそれが見えたらしく、「怖くないの？」と言うのが読唇できる。

「かんしゃく玉が怖くて女武士がやれるかおん。花火じゃ花火じゃ、おん」

と言った壺が再び放り投げてきた爆弾は――

今度は体勢的に向こうまで蹴れなそうだったので、バイクの左ハンドルを握ったままのボレーシュートで、ナナメ後ろのサイオンにパスしてやる。

するとサイオンはサイオンで、シートに手を突いて爆弾を横蹴り。俺に蹴り返してきた。

「いらないよ」

「俺もいらん」

俺とサイオンは互いに読唇し、しょうがないので空中の爆弾を2人で撃って爆発させる。

ああ、また壺が爆弾を投げてきた。どんだけ持ってるんだ。

もうきりがないので、俺は――爆風を敢えて受ける位置にバイクを走らせ、ドウッ！　という爆発と同期してハヤブサを蹴り――

200kg以上あるその車体をサイオンに向けて滑らせつつ、跳んだ自分は……

ドサッ、と、今ちょうど車道に戻ってきたポルシェの助手席に収まり直した。

「おかえり、トオヤマ」

「ただいま。寂しかったかい？」

ドライブデートしてるようなノリで、俺はワトソンとウィンクを交わす。

ハヤブサを犠牲にした甲斐はあって、サイオンは急ブレーキ。再び俺たちより後方へと引き離されていく。

この辺でやっと壺も爆弾では俺たちを止められないと分かったらしく、とうとうそれを諦めたらしい。煙幕を焚いたぞ。

そしてそれは正解だ。俺たちは――もうもうと上がる、赤い煙の中……

ついに、鬼たちを見失ってしまった。

それなら耳で、とヤツらの足音に集中すると――チズウィック・ラウンド・アバウトという五叉路で鬼たちが散開していくのが分かる。

どこへアリアを連れ去ったか、分からなくするためだろう。

やむなく、俺たちはアリアを入れたと思われる壺が転がって行った方へと左折する。

まだ後部座席にいた王子は煙幕の中、「煙い！　服にニオイが付くであろう！」と騒いでる。こんな状況でも自己中を貫けるとか、これはこれでタフな気がしてきたよ。この人。

一方、サイオンは引き続き俺たちを追ってきている様子だ。

警察による封鎖が行われたらしく、道は空いてきたが――

「トオヤマ、あれだ！　なんて事だ。鬼め、よくもあんなバスを……！」

キュー・ブリッジを渡りに掛かったワトソンが示す方を見ると、テムズ川の対岸にある車道を爆走する黄色い小型バスがある。

その窓は割れており、車線も守っていない。明らかに異常だ。乗っ取られてる。

バスの窓から――壺が少し迫り出て、フタを開けた壺がこっちを窺うのが見えた。

そして、見えたぞ。壺の中で気を失ったままの、アリアも。

「やっぱり壺がアリアを運んでたんだ。あのバスに乗り込むから、真横に付けてくれ」
「OK、行くよ！」
ワトソンがアクセルを踏み込み、反対車線を逆走気味にポルシェが駆ける。
ロンドン市民たちが俺たちを何やら応援するように騒ぐ中、箱乗りでバスに追いつくにつれ……
俺の頬が、引きつる。
日本のものじゃないから気づくのが遅れたが、その黄色いバスは――
よ、幼稚園バスだぞ。よりによって。
中からは、英語で助けを求める幼児たちの声がする。
（チクショウ、早く止めないと……ッ！）
と、バスと併走する所まで来たポルシェの助手席から
俺は割れた窓のフチを銃で平し、警戒しつつ乗り込もうとする。が、そこでなんと、
「アリアはここか。よし。余の出番だな」
俺の服を掴んだ、ハワードE子がッ……後部座席から立ち上がり、併走するポルシェのドアと
窓、さらには俺を踏み台にしてバスの窓によじ登ってしまう。
「お、おいッ……！」
ポルシェに戻すとなると転落するリスクがあったので、やむなく俺はE子を押し上げて、緒に車
内へ人らざるをえなくなる。
どたっ、と、ハワードと縺れるようにしてバスに入ると……

恐怖に泣きわめく子どもたちが、車内の後ろ側に集まっていた。
懐かしの――バスジャックか。
しかもこれは悪者が乗っ取る定番の乗り物、幼稚園バス。自力で逃げたり作戦をジャマしたりしてくるリスクの少ない、子どもを利用した悪逆非道のバスジャックだ。
とはいえ医科研病院のコンビニでの様子から見て、鬼は人間を虫けらだと思っている。人間に対して、優しくも残酷でもない。必要以上の殺しはしない連中だ。中の子供たちを無意味に殺す事はしていないようだが――その前途ある命を、丸っきり軽視するだろう。なんたって、鬼だからな。
怒りに燃えて車内を見回すと、やはり鬩、津羽鬼、セーラはおらず――
運転手も窓から捨てられたのか、もういなかった。
その代わり、運転席の上では……
（……ッ！）
壺が天井からブラ下がり、フロントガラスを割って車の上へ逃げていくところだった。
運転席には、何やら急ごしらえの装置が蔦のようにビッシリ張り巡らされてある。
鉄パイプや針金、歯車やバッテリーが剥き出しで取り付けられており、破壊は容易そうだが――
シートの上に設置された、赤い粘土状の物体――何らかの可塑性炸薬が、それをしてはならない事を明確に告げてくる。
今、くきッ、とハンドルが操作されて道のカーブに対応した。
壺が上から遠隔操縦しているんだ。このバスを。

乗っ取ってから10分も経過してないのに……問に合わせの資材と、このバス内にあった物だけで自動操縦のシステムを整えたのか。さすがは元イ・ウーの技師だな、壺。いや、壺の中の壺たち。

あの壺も外観は原始的だが――実際は、高度な1輪車のようなものだ。外周にグルリとある吸盤のような模様は、事実シリコンか何かの吸盤。それで壁だろうが天井にだろうが張り付いて、回転しながら自由自在に動き回れるってワケか。

（クソッ、ハメられたか……！）

壺はオトリのような係で、このバスとアリアをわざと俺たちに見せて誘き寄せたんだ。

俺たちを爆殺できないと知ってる壺は、人質を取るためにこの爆弾を設置したんだろう。

それで俺たちの動きを封じた上で――閻たちと合流して、総力で潰してくるつもりか。

と、そこに、

「――トオヤマ！」

ワトソンのポルシェがバスの左側に回ってきたので、俺はドアを非常コックで開ける。

壺自身もこのバスに乗っているので、無闇に爆弾をバラ撒いてはこない――と踏んで、何人かだけでも子どもたちをポルシェに移そうとした時。

ギュンッ！　とバスが左に振られて、ポルシェに体当たりした。

車体重量の差で当たり負けしたポルシェが――

「あっ！」

ワトソンの声と共に、路側帯から縁石に乗り上げて派手に左前輪を跳ね上げさせた。

そのままポルシェは捻れるように横転していき、バスがそれを右に躱す。
エアバッグが飛び出す様子と共に、ワトソンのポルシェはバスの後方に消えていき……
……クソッ、事態がさらに複雑になったぞ。
壊れたポルシェを華麗に避けて、代わりにサイオンのオートバイが追いついてきた。
サイオンは開け放たれたバスのドアに掴まるとバイクを捨てて車内に乗り移ってくる。
そして、曰、ＭＰ５Ｋを俺に向けたものの――
「――？」
車内に子どもがいる事に気づき、何が起きてるのか分からない顔で銃口を下ろした。
俺はこういうトンチンカンな事態はしょっちゅうだが、コイツはもっとクールな事件にばかり当たってきたんだろう。空気が読めず、ちょっと困ってる感じだ。
だがすぐに運転席の様子には気づき、青緑の目で見渡している……が、ただ見ただけだ。
サイオンも俺と同じで、強襲戦の専門家。爆弾処理はできないんだ。
壺の装置がアクセルを踏み込み、バスが加速していく。もう時速１００kmは出てるぞ。
早く止めないと。だがそれにはまず、運転席の爆弾をなんとかしないと。しかし、俺とサイオンにはそれができない。どうする……！
「こら遠山っ。アリアはどこだ。おらぬではないか！」
ハワード王子が俺の耳元で怒鳴るので――
「ハワード！　アリアはあの壺に入れられて、バスの上にいるんだ――でも、今はアリアだけじゃ

ないッ、この子どもたちも助けないと！」

「それはお前たちが何とかせい。余が求めておるのはアリアのみだッ」

などと身勝手な事を言うハワードの……経歴を思い出し、俺は運転席の爆薬を指す。

「ハワード、これを何とかできないのかッ。お前、陸軍の爆発物処理班にいたんだろ！」

「その通りだ。だが、余は座学を修めたのみ。爆発物の実物になど触れた事はないのだ」

王子は首を横に振り、きちんとピンセットで整えられた細い眉を寄せている。

「――でも知識はあるんだろッ、やれ、やってくれ！　俺たちにはできないんだ！」

「き、貴様。余に命令するか!?　余は立場ある身。そのような危険な事、やらぬッ。第一、そのような下々の働きをしても、上――恩賞と名誉を下賜する立場の者が、王家の者にはおらぬのだ。余より上の者はおらぬのでな。従って、それは余の仕事になり得ぬ」

プイッと横を向いてしまった王子を、俺は、

「ハワード！」

再び呼んだ。そして肩を掴み、ムリヤリ正面を向かせる。

そして、掴まれて驚くハワードの青い眼を――まっすぐ見据える。

「お前、男だろ！　男には誰にも、どんなに危険だろうと、何の見返りも無かろうと――命懸けで戦わなきゃならない時が、人生に何度か必ず来るもんなんだよ！　お前の場合は、それが今だ！」

俺は、ドンッ、とハワードの背を押して運転席の方へ向かわせる。

「余、余は……ッ」

運転席の前でまだウロウロしているハワードに、
「――この子どもたちを助けられるのは、今、お前だけなんだ！　お前は王子なんだろ！　王様にもなるんだろ！　王なら、自分のためじゃなく――国民のために戦えッ！　この国の未来を背負う子どもたちのために、戦え！」
俺が、叫ぶ。
そこで、ようやく――
ハワードも、応は男だったらしく、「この無礼者めッ……！」と俺を憎々しげに睨んでから――その青い目を、キッと運転席の爆薬へと向けた。
そして潔癖症なために今まで付けていた白手袋を外し、ヤケクソ気味に窓から捨てる。
細かい作業をするため、素手になったんだ。
「……くそう。これは強力なセムテックスA式爆弾ではないか……！」
ハワードは王族にしては下品な悪態をつきつつも、シートの真横に片膝を付き、針金やケーブルを指でなぞり始めた。まずは爆弾の構造を把握しにかかってるらしい。
やってくれるんだな、ハワード……！
そのハワードが、
「――サイオン！　今はキンジの事はよい、アリアを取り戻せ！」
今のやりとりの間、俺とハワードを何度か交互に見ていたサイオンに命令する。まずは1つ、起爆装置のダミー通電線を外して窓から捨てつつ。

命じられたサイオンと、俺は未だ車道を暴走するバスの中で視線を交わし、

「……遠山。不本意だが」

「組むしかないみたいだな。サイオン」

日英武装職でタッグを組んでの、鬼狩りに乗り出す事になるのだった。

俺は両手懸垂で、サイオンはキザに片手懸垂でバスの屋根へ上がると……いたぞ。壺が。

「揚揚。何れすぐ死す、命短き者共よ。なぜ早々に死の安逸を選ばぬおん？」

バスの前方に出た俺たちとは逆の後方に陣取って、ショートツインテールの頭をフタの下からちょっと覗かせている。

それに問答無用でサイオンがＭＰ５Ｋを放つ寸前、バスが揺れた。壺が俺たちの動きを阻害するために操作したんだ。その動きを利用して、壺はゴロッと車の側面に待避し――そこに張り付いて、下から手榴弾を放り上げてきた。

「……ッ！」

俺とサイオンが左右に分かれ、爆発を躱す。

運転席の屋根が一部破壊され、車内で作業を続けるハワードが見えて――

俺は右、サイオンは左のサイドミラーにブラ下がったが、そこで壺がバスをジグザグに激しく振る。俺はバス停に、サイオンは標識にぶつけられそうになり、車の上に戻される。そこへ、前から

――ぴゅんっ！

セーラの矢が風を切る音がして、俺は屋根の上でダイブするような前転。それを躱す。
矢が飛来した、バスの進行方向を見ると……
そこには、これも乗っ取られたらしいトレーラー車――さっきのコンボイ・トラックが走っていた。車体重量が10tはある巨体を振り、左右の位置をこのバスが追突するようなコースに揃えていく。そのコンテナの上には、片膝をつき弓を水平に構えるセーラの姿が。
鬼たちが何をしようとしているのかは、すぐに分かった。
コンボイのコンテナの後部ドアは左右に開かれており、中から物が抜かれてスペースが作られてある。ちょうど、小型バス1輌が入れるぐらい。
荷台からは積み荷を搬入するための荷台用タラップが下ろされ、アスファルトの地面に引きずられて火花の尾を引いている。
「このバスを中に取り込むつもりか」
サイオンもヤツらの合流方法に気づいたらしく、MP5Kを向けたところで――
セーラが、コンテナの上を転がって逃げ、運転席のある方へと消えた。俺とサイオンが組んで動いてる事に気づき、2対1での撃ち合いは避けたんだな。
そっちに気を取られていた、俺とサイオンの間を――ゴロゴロゴロッ！
と、壺が駆け抜けていく。サイオンはそこに銃弾を浴びせたが、壺は防弾性。そのままコンボイのコンテナへと飛び込み、俺たちを待ち構えるかのように奥で立った。
お互い高速で走りながら、バスとコンボイは距離を詰めていく。

取り込まれたら――終わりだ。こんなに大勢の子どもたちを守りながら、鬼たちの集中攻撃に対抗する事はできない。俺も、きっとサイオンでも。

ヒステリアモードの頭脳でも解決策が見つからない、絶体絶命の窮地に立たされたその時――バスの動きが――

「ははははっ！　見たか子どもら！　これが王家の力であるぞ！」

――右に、逸れた。

コンボイには乗り込まないコースに。

屋根の破壊された亀裂から車内を見ると、見事セムテックス爆弾を解除したハワードが運転席についている。ハワード……！　お前も、やればできるじゃねえか！　偉いぞ！

「キンジ！　サイオン！　この子どもらは余に任せよ！　お前たちは、アリアを救え！」

と、車の運転はできる王子が――

今やハンドルも素手で操って、ピッタリとコンボイの真横にバスを寄せる。

「御意のままに」

王命を背に、サイオンはコートを翻してコンボイの背に跳び移る。

言われるまでもなく、俺もだ。高低差があったので共にワイヤーを使ったが、こっちがベルトに仕込んでたところを――サイオンのは、万年筆に仕込んだワイヤーアンカーか。

逃げ足は速いらしい王子は、すぐさま幼稚園バスをロンドンの裏路地へ避難させていく。

一方の俺たちがコンボイの後方に駆けて荷台の中を窺うと、もう壺の姿は無い。

コンテナの前方ドアから、運転席側に抜けたか。アリアを連れたまま。

「……遠山、後方2km。上だ」

サイオンが手短に伝えてきたので、ここには雪雲の無い青空を見上げると

……！

（――AH―1――！）

……攻撃ジェットヘリが、追ってきてるぞッ……！

たまたま演習をやってた感じじゃない。直線に、こっちへ向かってる。

AH―1――通称コブラは、世界で1000機以上が作られている攻撃ジェットヘリの傑作機。全長17・4m、最大時速227km、固定武装のM197ガトリング砲に加えて、TOW対戦車ミサイル8発、JM261ロケット弾ポッドを38連装した、戦うためだけに生み出された空の蝮だ。

ライカミングT53エンジンの強力なローター音が、迫り来て

ヒステリアモードの目が、操縦席の津羽鬼を捉えた次の瞬間。

――バリバリバリバリバリバリバリバリッ！

機首下に据えられた3砲身ガトリングが火を吹き、コンボイの荷台に弾を浴びせてきた。

「フン」

「――クソッ！」

無表情に鼻だけを鳴らしたサイオンと、叫んだ俺がそれぞれ荷台の上を駆け――或いは転がって、運転席の上へと避難する。2人同時に、ここなら撃たれないと判断したのだ。

案の定、そこの下には仲間がいるとあって空襲を中断したコブラは――
ローターの爆音を立てつつ、弾痕だらけにした荷台の上空に陣取った。
コンボイ共々、時速100km超で併走するように飛びながら。
そして頑丈そうなウインチから、フックのついた極太ワイヤーを垂らしてくる。
高速で飛ぶヘリから下ろされた重そうなワイヤーは、それでも後ろに靡き……
荷台の中を今度は後方へ抜けた壺をフックで引っかけ、壺に腰掛けたセーラ共々ヘリへ吊り上げていく。鬼たちは最初から、そうやって空を渡って帰るつもりだったんだな。
飛来する矢で牽制され、コンボイを左右に振られ、俺たちが発砲できずにいると――
壺はヘリの着陸脚に自らを壺ごとS字の金具でブラ下げ、セーラも壺の上に陣取った。
回転翼からの下降気流は、セーラが自分たちの周りだけ操って軽減しているらしい。
「チクショウ、逃げられるぞッ！」
AH1を見上げて叫んだ俺の耳に、サイオンの発砲音が届いた。
セーラたちにではなく、荷台後方に少し姿を現した――
青色の金棒を2本背負った閻に、撃ったらしい。
閻はすぐ荷台の中に引っ込んだが、開いたままのコンテナ後方のドアへ再びワイヤーが下ろされていく。
コンボイの遠隔操縦は壺がしているらしく、ワイヤーに合わせて位置を揃えている。閻が、ワイヤーの先のフックを掴みやすいようにと。

「そうは……させるかよッ！」

――ダッ！　と俺は荷台の上を後ろへ駆け、ちょうどコンボイの天井の高さぐらいまで降りてきていたワイヤーを掴んだ。闇がそれを取るよりも、早く。

そして、

「サイオンは、これがやりたかったんだろう？　アビー・ロードでの決闘は台無しにしちまったから、その償いをする」

さっきコブラが開けに開けたデカい弾痕の1つに、俺がフックを突っ込む。さらに別の弾痕に手を突っ込み、縫うようにフックを引っ張り出す。

そしてフックを、ワイヤーに引っかけて――ヘリとコンボイを、接続してやった。

どうだ津羽鬼。これでコブラはもう逃げられないぞ。それはこっちもだが。

「――ヘリとコンボイでの、チェーン・デスマッチだ。対戦カードは違うけどな」

破れかぶれの笑顔で立ち上がった俺に、サイオンは……

「お前はクレイジーな男だ。遠山キンジ」

半ば呆れたような表情で、クールに苦笑いしてるよ。

ヘリは――帰り道となる行き先があったのを、コンボイと繋げられたせいで道に沿って行かねばならなくなった様子だ。壺のラジコン操縦でコンボイを引き続き暴走させながら、やむなくヘリが上空に繋がった状態でついてくる。

がちんっ、がちんっ、と何度か上昇してワイヤーを引っ張ったが、引っ張ればフックがむしろ固

くワイヤーを噛む。ざまあみろ。そいつはもう外れないぜ。
ヘリは街灯や標識の支柱にワイヤーが引っかからないよう、右、左と、何度かムチャな動きもしなきゃならない。機体からは悲鳴みたいに、軋む音も上がってるよ。いい気味だ。
荷台の裏から顔を少し出して、この事態を見ていた閻は怒ってよじ登ってくるかと思ったが、荷台に引っ込んだ。
（……？）
弾痕から中を窺うと、閻は持っていた酒を口に含んで、ブゥーッ！　と手に吹きかけて滑り止めにしている。そして金棒を、野球のバッティングフォームのように構えて――
――ガスンッ！　と、内側から荷台の壁面上部を真横に引き裂いた。
俺はそれを撃とうとしたが、真上から振ってくる矢の防弾にジャマされる。
サイオンも同様だ。セーラを撃ってはいるが、壺の向こうに隠れられて落とせない。
その間に、ガスンッ！　ガスンッ！　と、閻は何度もコンテナを中から裂き……
コンテナには、次々と水平な亀裂が入っていく。
まるで内側から、缶詰を切り開けていくように。
（……しまった……！）
コブラが再び上昇を試みる中、俺は閻がやっていた事の意味に気づく。
メキッ、バリバリッ……！　荷台の天井が、後ろから前へ――
まさに缶詰のフタのように、剥がれていくのだ。

天井の後端に金棒を引っかけてブラ下がった、闇が……ついに、よじ登ってきた。今やコブラにワイヤー1本でブラ下げられて、空飛ぶ鉄板となったコンテナの屋根の上に。

コブラは慎重に、しかし確実に上昇してスピードを上げていく。

この鉄板フィールドが傾かないよう、重さのバランスを取るため、俺とサイオンは移動せざるを得なくなる。動きが極端に制限されるぞ、ここでは……！

片膝をついて、ガシャッ、と、靴に仕込んだ平賀さん製の鉤爪を出した俺の隣で――

サイオンも革靴の踵をガンッと足下に突き、同様のスパイクを出してる。

「スマブラみたいだな。こんなに揺れるフィールドでは、やった事ないけど」

「何だそれは」

「日本のゲームだよ。さてサイオン、徒手でいくぞ。闇には撃つだけムダだから」

「そうらしいな。ところで、あれは人間じゃなさそうだが、何だ？」

「日本の鬼だよ。戦った話は、きっとパブでウケるだろう。生きて帰れればね」

俺とサイオンが語る中――足のツメを鉄板に掛けた闇が、のし、のし、と進んでくる。

闇が中央側に移動した事で、シーソーのようにこっちが下がる。ので、銃をショルダーホルスターとバックホルスターに収めた俺とサイオンも、前進せざるを得ない。

有無を言わせずワイヤーの近くまで来た闇を、俺とサイオンが見据える。

足場は不安定で最悪だが、その条件はそっちも同じだ。こっちはヒステリアモードの俺とサイオンのタッグ。そっちは闇だけ。この条件なら勝てる。いくぞッ……！

と思った時、
「ちょっと待て」
と、金棒を背に戻した閻が手をパーにしてこっちへ向けた。
「上のトンボの様な乗り物、津羽鬼は操った事が無くてな。然も此の重き鉄板を提げては、飛ばす向きが儘ならぬらしい」
その手で閻は、極太ワイヤーを掴んでる。
「奮ッ」と力み、右手、左手、とワイヤーを引き下ろし、この足場を上げ始めた。見ればヘリのウインチも足場を上げにかかっている。
（どうした、何が……）
訝しむ俺の前に、サイオンも素早く歩み出た。
そして閻を手伝うように、ワイヤーを引っ張ってる。
「……ッ……！」
ようやく状況に気づいて、俺もワイヤーに飛びつく。そして閻、サイオンと共に――
もう何も考えず、足場を上げていく。間に合え、間に合えッ……！
というのも、俺たちは今――テムズ川に掛かる門のような形をした、幅２４４ｍ・高さ65ｍの巨大橋梁――
タワー・ブリッジの上を飛び越えようとしているのだ！
いや、ヘリはセーラの気流の力もあり、なんとかブリッジの上を飛び越せそうな感じだ。しかし弧を描くようなナナメに振られた俺たちの足場が……ぶつかるッ

……！

左右に建つゴシック様式のタワー間に掛けられた、高さ44mの空中橋桁に――

――ガシュッッ！

と、一瞬この足場が掠って、橋をコーティングしていた大理石が少し散る。

だが、な……なんとか、激突は免れたな。ここは敵味方無く、力を合わせたおかげで。

「……危なかった」

「お前のせいだろう」

「お前のせいであろう」

日本語で言った俺に続けて、サイオンと閻がそれぞれ英語と日本語で同じ事を呟き……

確かに今のはヘリとコンボイを繋げたクレイジーな俺のせいなので、ペコリ。

頭を下げ、謝意を示した直後――

――バッ！　と、俺は桜花のアッパーで閻を急襲した。

その拳を手のひらで受けた閻、そしてサイオンもワイヤーから手を離したため――

足場は落下していき、俺たちは数秒間無重力状態――空中で格闘する事になった。

閻の反撃の左拳を、サイオンが軍隊格闘技のような横蹴りで逸らす。閻の拳は俺の脇の下を抜け、その腕関節を俺が巻き込むように極めにかかる。閻は右の掌底で俺を狙ったが、ワイヤー、そして何と閻のツノを掴んで支えにしたサイオンが閻の右腕に両脚を搦め――

――どがんっ！

俺とサイオンが左右の腕を固定した状態で、闇を顔面から鉄板の足場に激突させた。
プロレスにもあるよな、こういうエグいツープラトン技。２人してスーツ姿でやるとは思わなかったけどさ。
バランスを取るため、鉄板の足場に立って少し下がった俺とサイオンはそれぞれ空手とボクシングをベースに、しかしどう見ても多流派の混ざったオリジナル格闘術の構えを取る。
コブラは巨大観覧車ロンドン・アイを避け、サザーク・ロンドン特別区上空を旋回するように飛ぶ。だがその飛び方は、墜落するほどじゃないもののフラフラしている。
どうやらこの鉄板をブラ下げている事に加え、今の緊急回避機動でどこか機関に不調が起きて思い通りに飛べなくなったらしいな。
闇は、ぶつけたらしい鼻をちょっと揉みながら起き上がってきて……
「汝らは、構わぬか？」
と、聞いてきた。
「何がだい」
闇と語る俺の方を、サイオンがチラッと見てきてる。
闇は、こつん、と背中に差した金棒をツメでつつき……
「鬼に金棒という様に、鬼と金棒は、心同体。此は我が肉の一部よ。然れど、得物は得物。空拳の汝らに魁け使用うは、若干疚しい故」

「いいよ。2対1だし。どうせ閻に銃は効かないし、俺のナイフは今とっても大事なんで、ちょっと使いたくないし」

「左様か。では心置きなく用いて参る。青砥六角、の上産話ともなろうぞ」

と……

閻は、背に差していた青光りする金棒を、右、左。左右の手で抜いて、剣道の二刀流でいう十字の構えを取った。2本とも前に突き出し、クロスさせるような構えだ。

イヤだな、その構え。俺のトラウマ超戦士、妖刀の静刃を思い出させる。

閻のニュー金棒、青砥六角は……前の金剛六角より、細い。だが片方20kgはありそうな、鈍重な武器には違いない。

「遠山。あの女の日本語は難しかった。英訳しろ」

「ああ、サイオン。あれは体の一部なんだってさ。だからこっちは素手だけど、あの棒を使っていいと言ったんだ」

「鬼にハンデを与えたのか。まさにクレイジーだな」

「あの鬼―閻はマジメだから、信じてるよ。サイオンが武器を使えば、不意打ちできるだろう。この会話も英語だから、たぶん彼女は理解してない」

「使わない。だが、お前が使えば使う」

なにその対抗意識。プライド高いなあサイオン。

「じゃあいつも通り、先手は俺で。あとは流れで、合わせてくれ」

と、俺は――実はこの愚直な闇がそんなにキライじゃないので、約束通りまずは素手で闇に駆け寄った。足場のバランスを取るため、闇も前進してくる。

何にせよ金棒は当てられたくないので、俺はその殺傷圏を潜ってスライディング気味の下段蹴りを放つ。同時に、俺の背後に一瞬隠れていたサイオンがジャンプし――

俺は踏みつけにきた闇の足のツメを躱しつつ、固い左足を抱えて足首固めに向かう。

跳び上がったサイオンは、闇が振り上げた金棒を足のスパイクでカカッと捌く。

そして俺と同様、巨漢を攻めるセオリー通りに肉体の末端――

腕を搦め捕るかと思ったが、違うッ。それはダメだ、サイオン！

サイオンは金棒を踏み越え、コートを翻して闇の背後に回り込んだのだ。

そして両腕を闇の首に掛け、絞め落とそうとしている。

対人技なら、裸絞めは文字通りの必殺技。だが、鬼には――

「――キャンセルしろサイオンっ！」

俺の叫びと同時に、ガブゥウウウウウウウッ……！

闇のキバが、サイオンの右前腕に突き立った。

サイオンはコート下に、俺と同じような合金製プロテクターを着込んでいたものの――

メキメキッ……！　と、そのプロテクターを闇は重機のような咬合力で破壊していく。

「……ッ……」

それにサイオンが眉を寄せた時、閻はサイオンの腕を食いちぎるのではなく咥えたまま、ブウウウンッ！　と、上半身の力だけで振り回した。
それで裸絞めを解かせ、サイオンの全身を自分の前に持ってきた閻が――バッ！　と、今度はサイオンを振り上げる。
放り投げられると考えたサイオンが、万年筆型のワイヤーアンカーを出す。
が、パキッ！　と音を上げ、万年筆は矢で足場に射落とされた。セーラの妨害だッ。
しかも、閻がサイオンを振り上げた意図は――放り投げるなどという、生やさしいものではなかった。
閻は俺を絡みつかせたままの左足を跳ね上げ――バッツンッッッッ！
振り下ろしたサイオンと俺を、超高速で激突させたのだ！
「――ッ……！」
ズルッ、とコートとプロテクターが脱げたサイオンが、重心の傾いた鉄板の足場を転げ落ちていった。コンマ数秒意識が飛んで倒れた俺は、もうそれを助けられない。
「サイオンっ――うッ？」
ぐい！　と、謎の力に引っ張られて――
俺もサイオンと共に、足場を引きずり下ろされていくぞ!?　その瞬間、ドガッッッ！
閻による追撃の青硅六角が足場へ打ち下ろされた。さっきまで俺の頭があった所に。
それで命拾いした俺は、

「！」

鉄板の端に指一本でギリギリ掴まって、ブラ下がる。

落ちたと思ったが……サイオンめ。ぶつけられた時、勝手に俺のベルトからワイヤーを引っぱり出して――空中に吊り下がってるよ。俺はそれで引っぱられたワケか。

しかし、あの瞬間によくそんな咄嗟の判断と器用な手技ができたな。つくづく超人だぜ。

「えーっと、闇。サービス終了」

調子よく言った俺は、片手でポケットから出した弾をイジって拳銃にコンバットロードし、ナナメ下のサイオン方向へ撃った。

シュッ！　とコブラから飛来したセーラの矢が、俺とサイオンを繋ぐ太さ0・5ミリのワイヤーを精密に切断する。

それと同時に、俺がいま撃った空嚢弾がコンマゼロゼロ数秒のアナログタイマー制御で炸裂する。ちょうど、サイオンの足下で。

チャンスを逃さないサイオンはそのエアバッグを蹴り、鉄板の足場に掴まってきた。

ちょうど、俺の隣にブラ下がる形で。

思いっきり傾いてしまった足場の向こう側へ闇が移り、傾きを戻す間に……

「サイオン、ありがとう。俺の意識が飛んだのが分かって、わざと落ちて俺を引っぱって助けてくれたんだな。おかげで、頭を潰されずに済んだよ」

「応、今の流れについてお礼を言っておく。しかしサイオンは正面を向いたまま、

「俺は自分が落ちないよう引っぱっただけだ」
クールな横顔で、そんなセリフを返してくる。
「ところで遠山、今の銃弾型エアバッグ。日本製か？」
「ああ。あるクラスメートに、亀有の町工場で作ってもらった」
俺の需品係が作った小型エアバッグは、携帯電話型だ。しかも手投げ式で使いにくい」
「……あとで1つあげるけど、複製には特許料がいるかもね。それと、はい落とし物」
と、俺はサイオンのスーツの胸ポケに、さっき落ちる途中で拾った万年筆型ワイヤーアンカーを見てから、
こっちは意外だったのか、サイオンはちょっと万年筆を挿してやる。
「さあ、大きなエアバッグが迫ってきたぞ」
あくまで冷静に、ようやく水平に戻ってきた足場に懸垂で上がっていった。
俺にもとっくに見えていた、『大きなエアバッグ』。
それはこの迷走飛行中のコブラと、それに吊り下げられた足場が一緒に突っ込んでいく空域そこに何十機も浮遊する、色とりどりの気球の群れのことだ。
「……ツイてないよ、つくづく。
あれはスタンステッド空港でワトソンが言っていた、競技バルーンの大会。
その真っ只中に、俺たちのコブラは旋回しながら侵入していくところなのだ。
「……ッ……」
車道では概ね平面にあった障害物が、この空域では三次元的に存在している。立体的で複雑な迷

路に入り込んだような状態。無数の気球たちが逃げ惑い、不規則に動き回るのも却って危険だ。風の影響も考慮しなければならない。そこを――

制御が不完全なコブラで、今まで操縦桿を握った事のない津羽鬼が通過できるだろうか。

気球は今や、死のエアバッグ。

あの1つにでもぶつかれば、命は無いぞ。ヘリ側も、俺たちも。もちろん気球の乗員も。

ウインチで足場を引き上げて、ヘリが少しでも衝突を避けようとするが……

（だ、ダメだ……！）

1つの気球の上を掠めるように、足場が当たりそうだッ。

為す術の無い俺と閻の目の前で、

「フン」

鼻を鳴らしたサイオンが、鉄板を駆けた。そして。

「サイオンっ！」

俺の叫びを背に、バッ！　と、足場を踏み抜くような跳躍を見せた。鉄板から飛び出し、気球めがけて。

それで鉄板の重心が閻側に大きく傾き、足場はシーソーのように斜めになっていき――

気球を、ギリギリ躱した。衝突しそうだった鉄板の片側を上げる形で。

だが、サイオンが。なんとか気球の上に片膝をついて着地したところを、セーラの矢に襲われた。回転受け身で避けはしたが、そのせいで気球から転落しつつあるぞ。万年筆型ワイヤーアン

カーも出せずにいる。
俺は自分が闇の攻撃圏外にいる事を確かめると、
「サイオン、掴まれッ！」
ベレッタに素早く籠めた、繊維弾を撃った。
俺が青く発光する滞空弾子を掴み、サイオンの胸に前進弾子が張り付き、1㎞径時で0・2tの張力を誇る複相アラミドの糸が俺とサイオンの間に渡される。
それが救命ロープだと瞬時に理解したサイオンが、化繊を防刃スーツの袖に巻きする。
そしてそこを手繰って、バッ！　と気球を蹴って足場側へ跳んだ——その時。
俺の背後、問合いの外から。
「覇ッ！」
闇が気合い一閃、青硫六角を片方ブーメランのように投擲してきた！
「ッ！」
想定外の中距離攻撃に、俺はそれを躱しきれず背に受けてしまう。
橘花でダメージは軽減させたものの、俺は足場から吹っ飛ばされた。
次の瞬間分かったが、闇の狙いは俺とサイオンを空中で激突させる事。
俺はサイオンに、サイオンは俺に、虚空でお互い飛びかかるようになる中——
クルッ、とサイオンが姿勢を変えた。
その靴底がちょうど、俺の靴底と当たるように。

「闇はお前に任せる」

と、サイオンはこんな状況下でも表情一つ変えず、俺の足の裏を蹴った。

俺もそれに合わせてサイオンの靴底を蹴り、俺は足場へ、サイオンは気球へ。

俺の体でセーラの視界から逃れた隙に、サイオンは万年筆を出しており――

バシュッ！　と、ヘリと足場を繋ぐワイヤーめがけて自分のワイヤーを打ち出した。

グルグルッ、とサイオンのワイヤーはウインチから垂れるワイヤーに絡みつき……

シュンッ！　ワイヤーを切ろうとしたセーラの矢を、バシッ！　サイオンがＭＰ５Ｋの弾で迎撃して……

さらに、シャッ、シャッ！　と矢が降り注ぐが、サイオンは単射のＭＰ５Ｋでその矢を１本ずつ処理していき……数秒後、ヘリと足場を繋ぐワイヤーに到達した。

サイオンは闇を俺に任せると言った。つまり、ヘリを襲うつもりなんだ。

それならサイオンがワイヤーを両手で素早く登れるようにと、俺は――

「たしか、弓は大事なんだよね。じゃあこんな感じで」

躍起になってサイオンを狙うセーラの隙に乗じ、９㎜パラベラム弾を放った。

俺の弾がセーラの弓――その弦を、ビィインッ！　と切断し、セーラが青ざめる中……

銃を背に付けたサイオンは両手でどんどんワイヤーを上がり、アッという間にコブラへ到達した。慌てたセーラが竜巻を放とうと腕を回し……かけて、また気球を掠めたヘリに風はマズイとキャンセルした時。

着陸脚に上ったサイオンが、脱いだジャケットをムチのように振るった。
その袖がセーラの足に巻き付いて、引っぱられたセーラは
こてんっ！　真後ろにひっくり返った。格闘戦が出来ないのが丸出しの動きで。そして着陸脚に掛けていたバンドをサイオンに撃たれ、呆気なくヘリから転落してしまう。
「あっ――――！」
叫んだセーラは意地でも弓を離さずに、パッ、パッ、と自分の周囲で空気を破裂させて方向を変えながら――この足場も避けて、落ちていき――ぼふっ。
かなり下を飛んでいた、レインボー柄の気球に大の字になって落ってる。
起き上がってこっちを睨み、怒って喚いているが……ロケットのように飛び上がる事はできないらしいね。ようやく1人、敵を戦線離脱させられたな。
なお、セーラは自分がローター直下にいる時は使えなかったらしい風の術を使って――
仲間のために、ヘリを押し流している様子だ。競技バルーンの会場から。
おかげでなんとかコブラは窮地を脱したが、ほぼ制御不能の状態でUターンするようにロンドンの中心街・ウェストミンスターの上空へと飛んでいく。
そのローター音には、今や酷い異音が混ざってる。このままじゃ墜落は時間の問題だぞ。
こんな都心部で墜落したら――被害は甚大だ。下で俺たちを見上げて騒いでいる市民や観光客たちに、間違いなく多数の死者も出る。
それに俺が眉を寄せた時、着陸脚に金具でブラ下がっていた壺が。

サイオンめがけて、手榴弾を投げつけたッ！

「……！」

ほぼ自爆に等しい距離で、爆音と炎が空中に炸裂する。

飛び散った手榴弾の破片が壺を吊す金具を破壊し、ヘリ本体も盛大に損傷させる。

――追い詰められたからって、なんて無茶をするんだ壺！　中にはアリアもいるのに！

爆発を避けるため、サイオンが身を丸めてヘリから落ちた

その瞬間、ドカッッッッ！　闇が青硅六角を足場の中央付近に振り下ろした。

俺がヘリからのワイヤーを固定させたフックを、破壊したのだ。

足場のフィールドが真下へ落ちるその瞬間、

「――ッ！」

俺の目に、斜め下に迫った塔のような建物が映る。

闇は鉄板を蹴りそこへダイブし、ヘリから落ちた壺もまた自分のそばで爆弾を炸裂させて落下方向を変え、金棒を捨てた闇に追いついてキャッチされてる。

俺も鬼たちを追うように鉄板を蹴り、その塔へ跳ぶ。

跳んだ時、理解したが――

このタイミングで闇が鉄板を切り離したのは、ヘリの津羽鬼を助けるためだ。あのまま飛ばしていたら、壊れたコブラは鉄板の重さを支えきれず墜落するのが確実だったからな。さらにサイオンがヘリを離れた事で、津羽鬼が安全に避難できると判断したのだろう。

――しかし。

ヘリから転落したサイオンはすぐさま、自分の背後に携帯電話型のエアバッグを放っていた。そして空中に広がったそれを足場にして跳躍し――なんと、コブラに戻っている。

つまり闇の読みは外れたわけだが、外れて当然だ。

あんな超人アクション、ヒステリアモードの俺でも出来るかどうかだよ。

ヘリに津羽鬼とサイオンを残し、俺と、壺を抱いた闇は――

ダンッ、ダンッ、と、それぞれ何だか分からない黒い鉄骨のような部分に降り立つ。

距離は、7mほど。

どこだ、ここは――と、周囲を見回して……すぐ、分かった。

この塔は何度も、テレビや映画で見た事がある。

世界・有名な時計台、ビッグ・ベンだ。

時刻は午前9時11分といったところで、時計の針はほぼ真横に開いている。

その短針の先に俺が、長針の先に闇が立っているのだ。

「……」

空の向こうではコブラの風防をサイオンが左拳で割り、中の津羽鬼に殴りかかっている。

そして狭いコクピットの中では自慢の超スピードも使えない津羽鬼から、操縦桿を奪い――蜘蛛の子を散らすように人々が逃げ惑う、気球大会の地上会場に不時着させていく。

闇が心配そうにそれを見やった、その時。

「爆発で……すっかり目が覚めたわ」
がばっ！　と――
――アリアが。
いきなり壺のフタを殴り上げ、壺を踏みつけながら上半身を飛び出させてきたぞッ。
そして至近距離から閑めがけて、二丁拳銃で発砲しようとしたが――
どしゃっ！　閑が壺を長針に下ろし、壺が傾いて文字盤に寄りかかるようになったんで、アリアは頭をぶつけ、やむなく……壺がアリアを捕まえようとした腕の勢いを利用して、真上へ飛び上がって脱出している。
そして時計台の1時を示す鉄柱を掴んで振り子運動し、次は11時を示す鉄柱に足を掛け、鉄棒の『ひこうき』の要領で短針――俺の側へ、降りてくる。
そして壺に笑顔を向けて、
「あら、何かしらコレ？」
と、指に掛けていた――
――手榴弾のピンを、フリフリして見せた。
「……！」
首を出してこっちを見ていた壺は、紅い瞳をまん丸にして驚き――
「どッ、どれだ、どれだ」
首に巻いた手榴弾のネックレスを慌てて確認したが――間に合わない。もうそれを外し、とうと

う長針の上へ這い出てきて、爆弾を満載した壺を自ら蹴り落とした。

――ドゴオオォオオオオッ！　……と空中で爆発した壺が内側から粉々になる中……これもアフリカンな色柄の貫頭衣を着た壺の姿に、俺はちょっと呆気にとられる。

手が3つ以上見えたから複数人いるのかと思ったが、壺には、腕が4本あったのだ。

だからバスジャックの時、あれだけの作業を高速でこなすことができたんだな。

気絶していた間、時間感覚が薄れていたらしいアリアは――

「……待った？」

ちょっと済まなさそうに、俺の方に流し目してくる。

「いいや？　……ははっ。なんだかカップルの待ち合わせ場所での会話みたいだね」

今の『ひこうき』のお陰で密かにヒステリアモードが強化された俺が、そう答える。

その受け答えで、俺が一連の流れのどこかで性的興奮したと悟ったアリアが……

「そそそっちのアンタなのねッ。どどどうやってなったのか、ああ後で事情聴取の後、風穴よッ！」

事情聴取の意味が全くない死刑宣告をして、から、怒り顔のまま閻たちの方に向き直った。

閻と、壺。

俺と、アリア。

ともあれ、最後は――2対2での決戦になった、って事だな。

「お前らは……見てはならぬものを見たおん。我の腕は旧き鬼には問々有ったものじゃが、今や我

のみ。どうじゃ、醜かろう。よくも、よくも引き出してくれた喃。怨、怨」

怒りにキバを剥く壺は合羽のような服の中から、ちゃきき、ちゃきき、ちゃきき、と山刀のような刃物を抜いて、上段に2振り、下段に2振り構えて見せた。

「――いや、壺。壺は美しいよ。全ての女性は、等しく美しいんだ」

俺に美しいと言われた壺は、そんな事を言われたのは初めてといった様子で……

キョトンとメガネの下の目を丸くし、顔を赤らめていく。

それにイラッと来たらしいアリアが、

「あの4刀流はあたしがやるわ。閉じ込められたリベンジ。アンタは閻を仕留めなさい」

と、ターゲットの分担を決めた。

うん。それでいいよ。打倒・閻は、サイオンにも任せると言われた仕事だし。

「……扨扨、アリア。次は逃げられぬ様、お前の腕を、脚を、減らしてやろうおん。壺はもう無かりせど、我が全ての腕で抱いてキノクニまで運ぶわいや」

ちゃき、ちゃき、と2刀ずつを左右で擦り合わせて鳴らし、壺がアリアを威嚇する。

だがアリアは無い胸をぐぐいと張り、異形の壺に平然と対峙していた。

「それはそれで温かそうだけど。壺、あたしにはあんたに対抗できる技があるわよ。でも、見た目が恥ずかしい技だから使いたくないの。降参してくれるなら、やらないけど」

「降参？　降参とな。うおっほほほ。鬼が人に？　ない、ない、ない」

壺はショートツインテールを揺らして笑い――それから、黙った。アリアを睨みながら。

「あっそ。じゃあ使うわ」
アリアは、右、左。
壺に合わせるつもりか、銃ではなく日本刀を抜いた。
だが、それでは足りないぞ。双刀で壺の刀を2本押さえても、あと2本はどうする。
しかし……4刀流の攻略は、アリアに任せよう。何か、手があるみたいだし。
何より、女性の意思は尊重するのがヒステリアモードだからね。
「……1度目はナオ・デ・チーナ。2度目は富嶽。3度目はビッグ・ベン。閻、俺たちのデートはいつも見晴らしがいい所でだね」
ゴトン、と鬼たちが乗る長針が1分下がり、俺たちの乗る短針が微かに上がる。
俺たちを乗せても正確に時を刻む、ビッグ・ベンは――今、9時13分。
閻はその長針の上で、組んでいた腕を解いた。
「善く善く生き延びおった。遠山。然れど汝は所詮、人よ。人は鬼より弱し。その定めに逆らい人が鬼に勝つ事、相成らぬ。弱肉強食は不変の摂理よ」
「じゃあ、俺が閻を倒す事で教えてあげようかな。その定めが間違いだという事を」
俺が一歩も退かない態度を見せると、
「……何故だ？　遠山。何故どうあってもアリアを――緋緋神様の御雛様を、手放さぬ？　汝の命を抛ってまで」
なにゆえ、と来たか。

「――愛ゆえに」

ちょっと閻っぽい感じで答えた俺のセリフに、わたっ、とアリアが短針から落ちかける。

が、持ちこたえた。よかった。ビッグ・ベンの時計の文字盤は、高さ55mもあるからね。

「愛……とな？」

「閻にもそれは、きっとあるだろう。君たち鬼は、人によく似ているから」

「……判らぬ」

「分からせてあげるよ。この戦いの、向こう側で」

「不要也や。我は覇美様の隷。御屋形様が御命じに、従うのみよ」

僅かに生じた迷いを抑え、そこで思考停止したように眉をツリ上げた閻

その目が、緋色の輝きをたたえてくる。

閻が――鬼が、本気になっていく。それが、伝わってくる。

閻は戦艦を丸々1隻その身に詰め込んだような、パワーの塊。明らかに津羽鬼や壺より屈強な、言うなれば純戦闘タイプの鬼だ。

その閻が、ぐ……ぐぐ……と、全身の筋肉に力を込める構えを取っていく。

人間の格闘術には絶対ありえない、猛獣のような構えを。

ナイフのようなツメを生やした両手のひらは獲物を捕らえる猛禽のように広げ、自分の正中線に沿って――右手は罷のように上段、左手は獅子のように下段に据えた。

タングステン　コバルト合金を上回る硬度を誇る牙を剥いた鬼の貌は、右に傾けている。俺が1

本折ったものの、まだ額の左側に1本残る犀のようなツノを前に向けるためだ。
そして、象のような筋力を蓄えた背中を虎のように撓め、ザッ、ザッ。
足元を蹴って、立ち位置を固定している。猛牛と同じ仕草だ。
対する俺は柔よく剛を制すの精神で、むしろ体に余計な力を入れず……
構えない構え、自然体を保つ。
散る桜、残る桜も、散る桜。汝は今なれど、我も何れ逝く。地獄で遭おうぞ、遠山桜」
散らせるものなら、散らしてごらん」
闇と俺が、最後にそう言った時――
――リーン……――……ゴーン……
……カーン……――……ゴーン……
ビッグ・ベンが、ロンドン中に響き渡る9時15分の時報を鳴らした。
その至近距離にいる俺たちの血を震わせる、轟音の中――
――ダッ！　先陣を切って、アリアが短針をまっすぐに駆けた。火の玉のように。
同時に、壺も細い足で長針を駆けてくる。音も無く、疾風のように。
続けてこれも全く同時に、俺と闇が駆け出した。先行するアリアと壺よりも速く、追い抜くように
に駆けて――2人の背後から、共に跳び上がる。
長針から跳んだ闇は海老反りみたいな体勢から、人間には無い鬼の固有技――
頭を前に全力で振る、全身全霊を籠めたツノによる刺突を繰り出してきた。

（絶牢――ッ！）

だがそれは俺にとっては未見技ではない。

鉄杭のようなツノを両手で包み込み、絶牢で全ての威力を奪い取る。手首から肘へ、肘から肩へ、背中へ、腰へと、閻の力を体内でリレーさせていく。

そしてその力を丸々込めた、反撃の膝蹴りを――バッ！　空中で放つ。閻の腹めがけて。

対し、閻は――

その力を、鋼のような腹筋で受け止めた。そして腹から背へ、背から肩へ、肩から肘へ。一切のロスなく、絶牢を絶牢で返してくる。絶花だ。

俺を左右から大砲の挟み撃ちのような爪撃で襲う、閻――

――その力を、俺が閻と両手を繋ぐようにして受け止める。そのまま敢えて両腕関節を押し潰させるように、右手を前へ、左手を後ろへ回す。それで挟撃力を回転力に変えて、今度は閻の左脇腹へ回し蹴りを放つ。絶花を絶花で返す、俺の3重絶牢をしてくる。それを俺が5重目の絶牢で蹴りに戻す。

絶牢が絶牢を呼び、ビッグ・ベンの中央で絶花が咲き乱れる。

俺と閻の中を、一撃必殺の打撃力が二重星のようにグルグル廻転し続ける。

その死力の渡し合いは、瞬間と瞬間のせめぎ合い。

技量は絶花に一日の長がある俺が上だが、閻は俺に勝る力量でそこをカバーしている。

となれば、心技体――残るは、心。気持ちに隙のある方が、敗ける……！

俺たちの真下、ちょうど長針の根元の辺りでは、アリアが壺と激突する刹那、

「……双剣双銃……！」

呟いて――そのツインテールを、操った。超能力だ。今の今まで、隠し球にしてたんだ。

ツインテールの先端が、スカート内から白銀と漆黒のガバメントを2丁とも抜き――

ガガンッ！　と、器用に発砲している。壺の構えた2本の刀めがけて。

「あなやッ!?」

全く予想していなかった銃撃に壺は2刀を弾き飛ばされ、壺が驚いた隙を突くアリアの双刀が追撃を掛ける。

ギギンッ！　さらに2刀を飛ばされた壺は丸腰になってしまい、

「――ひいっ！　閻姉っ……！」

飛びかかってきた双剣双銃のアリアから身を躱すように、長針の上に倒れ込んでいく。

その時――

俺と閻の均衡が崩れた。

「……壺ッ！」

眼下で敗れた壺を見て、閻が集中を僅かに途切れさせたのだ。

いや、閻は最初から心に隙があった。

サイオンに打ち負かされた津羽鬼を、心配していたのだ。

――仲間を案ずる心。
それは、今まで敗れる事などあり得なかった鬼にとって経験したことのない――
「――闇――それが、愛だ！」
ガキイイイイイイイッ！
鐘の音に匹敵する大音響がロンドン中に響き渡り、27重目の絶牢で放った俺の頭突きがとうとう闇の右額に炸裂した。
「――はぁうッ――――！」
どこか女らしい悲鳴を上げた闇が、ドサァアアアアッ……！　と……
アリアとすれ違うようにして、壺の上に――覆い被さって、墜ちた。数瞬、意識を失いながらも……それでも、壺を庇うように抱きながら。
「……」
アリアは、ぶわっ――と、ツインテールを広げて空力ブレーキにしながら……
鬼たちの上を跳び越し、とたた、くるっ、と長針の先で回れ右した。
アリアが壺に勝つ事を信じて託した、俺も――頭突きの反動で短針側に降り立つ。
4本の腕で、子どものように闇に抱きつく壺。壺を守り、敵に――すなわち俺たちに、背を見せている闇。そして、鬼たちを見下ろす俺とアリア。
その光景が――
この長い戦いの勝敗を、何より雄弁に語っていた。

「……対戦相手の分担、やっと納得できたよ。さっき使うのを恥ずかしがってたのは……理子を彷彿とさせるからかな？」

と、俺はアリアのツインテールを見つつウィンクを投げかける。

「他にいないでしょ」

アリアは、きゅるきゅる、すぽっ。拳銃をツインテールでレッグホルスターにしまった。

そして双刀も、セーラー服の背にしまっている。

去年4月のハイジャックで、『アリアの双剣双銃は本物じゃない』なんて理子が言ってたけど……とうとう、『双剣双銃のアリア』が完成しちゃったか。

これから双剣&双銃による俺イジメが激化しそうで、背筋に冷たいものが走るね。

「電話で言った自主トレってのはこれよ。ヒマだったし時任先輩にメールで教わってたの。ロンドンがアウェーのあんたには、負担を減らしてあげたつもり。閻、最初から心ここになかったし」

アリアも直感で、閻が津羽鬼を心配するあまり集中を欠いてた事には気づいてたらしい。

その、閻が……

顔を上げ、壺を支えるようにして起き上がってきた。目の色を、もう元の金色にして。

「……遠山。汝に教えを請う。何故に、我は今、津羽鬼や壺を心配するあまり、心に生じた隙。鬼になりきれなかったのだ」

その感情にまだ戸惑う閻に、俺は笑顔を向けてやった。

「愛ゆえに、だよ。鬼は皆、家族みたいなものなんだろう？　閻は仲間を思う家族愛を、最初から

持っていたんだ」

俺は、改めて答えを告げてやる。

鬼子母神――人の子を食らう母鬼も、自分の子を隠された時には半狂乱になったという。

愛する者を奪われた、その悲しみゆえに。

闇も、俺がアリアを助けたかった気持ちが分かっただろう。

「……愛……」

呟いた、闇は――

もう戦う意志を見せず、ロンドンの町の向こうに墜落したコブラを見つめていた。

「闇。さっき俺は、闇の『弱肉強食』に合わせるような事を言ったけど……本来、俺たち人間はその考え方をしない。強い者も弱い者も、愛を胸に、力を合わせて生きる。だからこうして栄えたんだ」

俺は闇に、美しく広大なロンドンを手で示しながら語る。

「――闇たちは人間と似た種のようだけど、その数はとても少ないように思える。鬼とは……滅びつつある種族なんじゃないのか？」

「……」

「愛を学んだ闇が先導者となって――もう、弱肉強食という考え方はやめるんだ。弱者を踏みにじる者たちこそ、滅びる定めにあるのだから」

俺の話を、闇は……ただ、黙って聞いていた。

分かってくれたかどうかは分からないけど、まあ、こんなところかな。お説教は。
そんな閣と壺の背中を、ぽん、ぽん。ちっこい手で励ますように叩いて、アリアが俺の方へ歩み寄ってきた。ビッグ・ベンの長針短針を、平均台のように渡って。
……ああ。アリア。
ようやくアリアと、再会できた実感が湧いてきたね。ここ、君の町で。
さっそくいつもの調子で、鬼たちに愛を実演してあげようかとも思ったが……
あまり感情を盛り上がらせると、また良くない形で緋緋神が出るからね。
「こらアリア。俺と離れて淋しかったからって、他の男についていっちゃダメじゃないか。シャーロックの時にもお小言したろう？　俺だけについてくるんだ」
俺は少し亭主関白に、厳しく接してやる。すると……
「つ、ついてってないわよ。いや、そう見えたかもしれないけど……」
アリアは、ゴニョゴニョ。顔を赤くして口ごもる。そして、
「でも、う、うん。キンジだけについていくわ」
上目遣いでそんな事を言い、言ってから『うわーけっこうスゴイこと言ってるあたし』的に赤面メーターを上げていってる。
こっちの俺には相変わらず、手も足も出ないんだね。アリアは。
「この国じゃ貴族は王族に逆らえない、なんてみんな言ってたけど――知ってたかい？　アリアはもうとっくに、王族なんだ。だから、逆らっても良かったんだよ」

「あ、あたしが王族？」
「――そう。俺の女王陛下さ」
俺がアリアの足元に跪き、騎士のように自らの胸に手をあてると――
ゴトン。ツッコミを入れるように、ビッグ・ベンの針がちょっと上がった。
そのせいか、それとも俺のセリフにドキッとしてか、アリアがコケてる。
こんな事で転落されては困るので、俺はアリアの手をそっと取って支えてやり……
ついでに小さく、その小さな手の甲にキスをしてあげるのだった。

競技バルーンの会場に黒いクラシックなタクシーで向かうのには、闇と壺もついてきた。
会場の芝生の上ではコブラがグッタリと拉げており、その傍らにサイオンと――手錠を掛けられ
正座して、悔しそうに目を閉じている津羽鬼がいた。
「……津羽鬼！」
闇が裸足でドスドス駆けてくる足音に、津羽鬼が立ち上がる。
そして当たり前のように手錠を引きちぎり、はしっ。闇と抱き合った。
津羽鬼はよっぽど闇に会いたかったのか、抱かれた途端にホロホロ泣き出しちゃったよ。
周囲に沢山いた警官たちが2人を取り囲み、警棒を突きつけ……俺とサイオンも、応、身構えた
が……なんかこれ、こっちがワルモノみたいな光景なんですけど？
なんだろうねその、闇と津羽鬼の熱い抱擁。鬼ってこんなロマンチックな種族だったの。

だがまあ、鬼たちも俺やサイオンが睨んでいる限りこれ以上は暴れないようだ。
なので、俺は――
「津羽鬼に殺人許可証を行使しなかったんだね、サイオン。ありがとう」
サイオンの隣に立ち、そこに礼を言っておいた。
「何がありがとうなんだ」
「武偵法9条のある俺と『殺す』『殺すな』で、後からトラブルにならないよう――気を遣ってくれたんだろう？　それとも、英国紳士は女性を手に掛けない、って事かな」
俺の言った事が両方とも図星だったらしいサイオンは、ちょっと黙ってから……
「違う。今日は髪型がきまらなかったからだ」
クールな顔のままで、妙な事を言ってきたな。
「髪型がきまらない日は、あまり殺さないようにしている。気分が乗らないからな」
マジメ、徹のサイオンは、どうもウソが下手らしいね。そもそも五厘刈りじゃん、君。
だがこれは、サイオンのジョークかも。ブリティッシュ・ジョークは難解というからね。
だからとりあえず、俺はそれが本当かどうかは置いておき――
「とりあえずは、これにて一件落着かな？　しかし、サイオンは本当にスゴイ男だよ。今気づいたけど、これだけの大捕物をやったのに……汗ひとつかいてないね」
「このぐらい、先代のナンバー7に比べれば一件に数えるまでもない」
「じゃあもう一件。どうする？　俺との決闘のこと。王子の命令だから、サイオンもウヤムヤなま

まにはしておけないだろうし」
俺がその件に触れると――
「やめておこう。お前を、殺したくない」
意外な回答が、返ってきたな。
「逃げるのかな」
「そう受け取ってもらって構わない」
「サイオンはウソが下手らしいね。本音を言ってくれ」
――俺は、お前が気に入ったんだ」
これもクールな表情を変えないまま、サイオンは
「お前ほどの男なら、いずれまた俺と会うだろう。
掛けさせてもらう。その時は力を貸せ」
「考えておくよ。じゃあ俺がまたイギリスで困った
「考えておく。ただし次来る時は、イクスカリヴァ
質問なのだが」
「？」
「遠山キンジ。お前は一体、何者なのだ？」
青緑の目を俺に向けて質問したサイオンは、少し
でも、良かった。それには決まり文句があるんで
ね。

「――ただの高校生だよ。ちょっと偏差値低めで荒っぽい学校のね」

俺がそう答えると、サイオンは……

小さく、笑ってくれた。良かった、良かった。

「キンジ。お前とは友人になれる気がする。父の事があろうとな」

俺を初めて下の名前で呼び、右手で握手を求めてきたサイオンに

「じゃあ今回の件は、今度こそ――これにて一件落着、って事で」

俺は、1人の男を信頼した証として、握手で応じた。だが……

「右手で握手したね。サイオンは左利きだと思ったけど？　左手をケガでもしたのかな」

「いいや」

「じゃあ、何でだい」

「実は右利きなんだ」

「……なんでまた。ずっと左手で銃を使ってたじゃないか」

「あれは世界中の全員に、ハンデを与えているんだ。俺は、強すぎるからな」

ってことは――

アビー・ロードでの殴り合いは、ハンデにハンデを重ねた上でだったんだな。

今度こそ、参ったよ。サイオン・ボンド。

あと、案外面白い男でもあったんだな。君は。

サイオンは確かに左手首にしていたチャールズ・フローシャムの腕時計を見て、

「デスクワークの時間だ」

俺と警察に鬼たちを押しつける感じで、クールに立ち去っていくのだった。

（……じゃあな、サイオン）

会場外の車道を横断していったサイオンの背を、通りかかった2階建てバスが隠し――バスが通り過ぎた時、もうそこに、サイオンの姿は無かった。

5弾　小舞曲（メヌエット）を御一緒に

「お疲れ様でした、ご主人様！」

ベーカー街に帰って事のあらましをメヌエットに話した俺は、リサの淹れたチェリー・ティーを飲みながら……そのリサが作ってくれた夕刊各紙のスクラップに、目を通す。

リビングのソファーから立つのも億劫なのはヒステリアモードが切れたせいと、閹との絶牢合戦の後遺症（しょ）だ。音速クラスの打撃を27回も打ったり受けたりすりゃ、そりゃ全身がバキバキになりますわな。

「……」

しかしこの新聞記事の数々。バスジャック犯を逮捕！　ってとこまではいいが、全部が全部ロンドン警視庁（スコットランドヤード）の手柄（てがら）って事になってるんですけど。

俺は密入国者だし、ワトソンはリバティー・メイソンの人だし、サイオンは諜報員だし、アリアと王子にはお立場がありますんで、昔けないのは分かるけどさ。ズルくね？

しかもこれ、犯人たちの写真。全員見た事もないヤツらの顔じゃねーか。ＣＧで適当に作ったな？

俺がいたせいか、鬼たちはおとなしく連行されてったが……

セーラあたりが手引きして、逃げたんだな。アイツら、きっと。

ここでも警察は不祥事を隠し、マスコミは嘘八百を並べ立ててるワケだ。ていうか攻撃へ

リが飛び回ってた件がなんで映画撮影の墜落事故で済んでんだよ。雑だなオイ。

（とはいえ、まあ……）

もう鬼たちは暴れるムードじゃなかったし、事も分かってるだろう。文昔に調印したワケじゃないが、一時休戦ってことだ。

シャーロックの形見のルーペを持って、

「どうだ、今回の件は？　もちろん星をもらえるよな？」

俺が星カードを出すと、

「ふむ。まあよろしいでしょう」

メヌエットはプスッとパイプからチェリーの香りを吹き上げている。

そしてサシェに持って来させた羽根ペンで、星を描いてくれた。1個。

「1個かよ」

納得いかん。なんでこれだけの大バトルがリだって、キンジ1人で解決した事件ではないようですし。その結果が、この謎のアラブ人たの耳を観察させるのと同価値なのか。

俺と同じ事を推理したらしいメヌエットが、でしょう？　聞けばセーラ・フッドは捕り逃がしたぐうの音も出ない俺が口をへの字にした時……ちの顔写真です」

ジリリリン……ジリリリン……と、古式ゆかパイプで新聞記事を示す。

それにまずエンドラが出て、受話器をメヌエしい固定電話から、ベルの音。

ットが渡してもらってる。

「お姉様。お話はキンジからお伺いしましたよ。まあ、もうお近くに？」

おっ。さっきとりあえず宮殿に戻ったアリアから、電話があったみたいだな。

「アリアが来てるのか？」

短い通話が終わったので、俺がフラフラ立ち上がりながら尋ねると。

「ええ。お2人とも、いらしてるようです。迎えにいってあげて下さいな」

そうメヌエットが返してきた。

（『2人』……ワトソンか？　あいつはポルシェがひっくり返った時にムチウチ症やったとかで、入院したハズだけど）

不思議がりつつ、俺は玄関から寒い表に出て……

英国式スーツから着替えた武偵高の制服で、夕方のベーカー街を行く。すると。

「……っ」

バス停の向かいの歩道に、セーラー服のアリアがいたのはいいとして。

着替えたらしい白スーツの――ハワード王子もいるぞ。

ベントレーが路肩に駐車してたから、いるかもと思ったけど。

俺は街灯の下の2人に近づき……

「……ハワード。幼稚園バスの件は、ありがとうな。あれ、タンコブあるな。どうした」

サングラスを外した王子の額に、コブがあるのを指さした。

「王錫で叩かれたのだ。それ以上は聞くでない」

王子も軽々しく名前は出さなかったが、オイタが過ぎた彼にオシオキをした人物は……

じょ……女王陛下、ってことか。

王子様を折檻しちゃえる御方は、彼女ぐらいだもんな。畏れ入ります。

苦笑いした俺に、

「キンジ。余はまず、お前に――謝罪しよう」

ハワードはそう言って、白い帽子を脱いで胸にあてた。

「余はアリアに一目惚れし、公私混同の挙げ句、お前からアリアを奪おうとした。だが今日の事で、余はお前がアリアを真に愛している事を知った。そして、実は初めから知っておったのだ。アリアもまた、お前を真に愛している事をな。そこに余が入る隙は無かったという事だ」

いきなり、そんな恋愛関連の話をしてきたもんだから……

「い、いや」

「あ、あの」

俺とアリアは揃って赤くなり、ハモり気味にゴニョる。

「否定するでない、余を誰と心得る。この国の王子であるぞ。この国で余が言う事は全て正しいのだ。そして――偉大なるイギリス王家の一員には、失恋をキッパリと受け入れる器ぐらいある」

と、相変わらず偉そうではあるものの……

「アリア・ホームズ・カンザキ。本日現時刻を以て、そちの任を解く。ご苦労であった」

ハワードは男らしく、アリアを諦めた。

ちょっと涙ぐみ、俺の方に行くようアリアを促した王子は
アリアが俺の横に立ったのを見て、イケメン顔で微笑んでみせた。涙を隠すように、夜だというのにサングラスを掛けつつ。
そして胸ポケットから、きちんと王家の封蝋印をした1通の封筒を取り出してる。
「アリア。余からの最初で最後の贈り物だ。受け取るがよい。それは国際武偵連盟への推薦状――実際に余の抱え武偵となるよりは承認まで時が要ろうが、仕えずとも余の名に於いてRランク武偵とするよう直筆してある」
それを受け取ったアリアが、驚きつつも礼を言おうとしたのを遮るように――
王子は俺に向き直り、肩を横からポンと叩いてきた。今はもう、手袋無しの素手で。
「そしてキンジ。お前へのMI6からの警戒は解かせた。英国の全空港も、終身無事通行できる権利を与える。どうやらお前は密入国していたようだが、我が国の外務省も警察も全く見抜けなかった事を恥じ、余の命に応じる形で揉み消す流れである」
「ハワード……」
「礼は要らぬ。これは詫びの印だ。これで詫びは完了したので、次は礼を言わせてもらう。お前は大事な事を、余に教えてくれたな。余が王子という立場にありながら、今まで自分の事ばかり考え、自分のためにばかり生きてきたこと……」
ハワードはサングラス越しではあるものの、俺にキッチリ正面を向いたまま……
「『王なら自分のためじゃなく、国民のために戦え』――下手な英語ではあったが、あの言葉は余

の胸に深く刻み込まれた。これからの余は、国民のために生きる。再び戦う時が来れば、勇敢に挑む所存である。あの時の、お前のようにな」

こつん、と、拳を俺の胸に押しつけてから――

「さらばだ、アリア。さらばだ、キンジ。お前たちは何やら大きな問題を抱えているようだが――お前たち2人なら、いかなる試練も乗り越えられるであろう。余が言うのだから、これも絶対である」

そう言い残して、王子は……空色のベントレー・アルナージに戻っていった。

その背に、アリアが仕儀正しく礼をして――

俺は少し笑顔になって、そんな……皮剥けたハワードを見送るのだった。

正式に王子から任を解かれ、自由の身となったアリアは――

ちょうど近くまで来ていた事だし、メヌエットの家に直行した。

緋緋色金の謎について、その推理を聞くために。

王子という後ろ盾を失ったアリアは、元のダメなホームズ4世。やっぱりホームズ家の関係者には近寄り辛そうなムードもあったが……

今は状況が状況という事で、なんとかその足はメヌエットの家へ向いている。

メヌエットは――俺が連れていけば、アポ無しでもアリアと会うだろう。モモコの一件以降、ちょっと外交的になりつつもあるしな。

ホームズ家とアリアの確執も、メヌエットを取っかかりに改善するかもしれないぞ。

と、希望を胸にベーカー街を歩く道すがら、俺がアリアに今までの話をすると……

「メヌったら。会うなり空気銃であんたを撃ったの？　ヒドイ子ね。その、ホームズ家がヘンな家で……驚いたでしょ。ホームズ家のこと、イヤになった？」

お前は会うなり実銃で俺を撃ったけどね。

と言いたかった俺だが、アリアが珍しく謝るような顔をしているのでそこは飲み込み、

「兄さんがいきなり俺に発砲してた遠山家に驚かなかったお前に、そう言われるとはな。まあ、変わり者の一家同士ってことだ。お前ん家と、俺ん家は」

ベーカー街221のドアを、俺がノックして――

サシェとエンドラが、出迎えてくれた。さあ、ホームズ4世姉妹のご対面だぞ。

リビングに入ったアリアを、リサに車椅子を押されつつのメヌエットが――迎える。

「お久しぶり、メヌ。あんた、しばらく会わないうちにキレイになったわね」

「お姉様もですよ。女は恋をすると美しくなると言いますけれど、さて」

「はあ(Whaaat)あ？」

いきなりそんな事を言われたアリアがテンパり、なぜか俺を突き飛ばす中――

「しかし、そのお相手はハワード殿下ではなかったご様子。キンジと共にここへいらしたという事は、王子をフッてきたという事でしょう。つまりお姉様は、この国に於ける人生最大のチャンスを

棒に振ったのです。正気の沙汰ではございませんわ」

「フッたとかそういうのじゃないわよッ。手も繋いでないし」

「私の思った通りの流れにはならなかったものの、どうあれお姉様はご無事だったご様子。これにて一件落着ですね」

メヌエットは鬼みたいに犬歯を剥いたアリアを、軽く受け流してる。さすが妹だな。

「いや、落着してないぞ。まだお前の推理を聞いてない。アリアを連れてきたんだから、最後の星をくれよ。それで聞かせてくれ、緋緋色金のことを」

「妹が姉に会うのは、ごく当たり前のこと。それで星を授けては、お姉様に失礼ですよ」

「誰にもなかなか会わなかったくせに。理ある事を言ってきたメヌエットに、俺は――

「じゃあ、お前、姉ちゃんの前でいい所を見せろよ」

「いい所？」

「俺とギャンブルだ。星を賭けて」

そう簡単には最後の星をくれないだろうと思っていた事もあり、メヌエットが大好きな賭け事を再び持ちかけた。そしてイチかバチかのコイントスでも提案しようとしたら、

「私が推理した通り、そうきましたね？　よろしい。ちょうどまた、私も最近お姉様から奪いたいものが出来たところです」

メヌエットは、むしろ俺を引っかけたような顔でそれを受ける。

「何よそれ」

への字口で尋ねたアリアに、メヌエットは
「キンジです」
――そんな事を、言い出したぞ。
「お姉様を懸けて王子とキンジが決闘したように、キンジを懸けて私とお姉様が勝負する。その勝負に、キンジは最後の星を賭けるのです。キンジから見れば、サイオンと同様――お姉様を代理人として立たせ、お姉様が私に勝ったら、お姉様はキンジを私に下さいな。勝負はポーカーで」
「お、おいよせやめろ」
「いいわよ？　こんな女癖の悪い男を賭け代にできるんなら、安いもんよ」
ちょっ……！
今までの人生、アリアはメヌエットにポーカーで身ぐるみ剥がされてるんだぞッ!?
と、俺が慌ててる間に――
俺の意志を丸っきり無視で、ホームズ姉妹は奥の部屋……いろんな楽器が置かれてある音楽室に、スタスタ&キコキコと向かってしまっている。そこで戦うつもりらしい。
ので、流れで賭け代にされた俺もワタワタとそれを追う。
有無を言わさず、始まっちまうぞ。ホームズ姉妹の対決が……！
そこそこ広い音楽室の中、シャーロックが遺した品らしいアンティークな丸テーブルに――その

曾孫(ひまご)が2人、つく。アリアはサロンチェアに座り、メヌエットは車椅子(くるまいす)のままで。

「ポーカーは3年ぶりですね」

「そんなになる？　でも、メヌと会ったら絶対やるカンがしてたわ。だから、はい」

と、アリアはポケットから自前のトランプを取り出す。

どこかで見覚えがあるその裏面は、細かいまだら模様。まだらの紐(ひも)――シャーロック・ホームズが解決した、有名な事件名に準(なぞら)えたものだ。アリアにしちゃ粋(き)だな。

「では、いつものやり方で」
「そうね。それがいいわ」
と、まず姉妹はトランプをシャッフルせずテーブルの上に広げた。神経衰弱のように、全て裏面に伏せた状態で。そしてそれを、両手で混ぜていく。2人はそうやって混ぜた中からカードを選んで取り、勝負をするのが常なのだろう。シャッフル時のイカサマ防止のため、ディーラー無しでポーカーをやる際には問々行われるスタイルだ。
カードを混ぜながら、メヌエットとアリアは……
「ところでメヌ、その鳥撃ち銃ずっと使ってるのね」
「お姉様こそ、まだ舶来の銃を使われているのですね」
再会してすぐ、銃の話だよ。イカサマしたら撃つぞって事だなこれ。
「あとこの家にあたしの服あるでしょ。あれ、あげるわ。日本で服を買いすぎちゃって」
「結構ですわ。お姉様のお洋服を着ると、私では胸周りがきついのです」
「くっ……精神攻撃ね？」
「いいえ。事実を申したまでです」
仲悪いなー。こりゃ確かに、あんまりくっつけない方が良さそうだねこの姉妹。
「ワイルドカードは抜いてあるわ。カード交換は1回よ。いつも通りメヌが先攻ね」
「いいですよ」
と、アリアとメヌエットは　アリア自身と俺の運命が賭かってるにも拘わらず、割と気軽に

カードをホイホイ取っていく。
「応アリアの後ろについていた俺が、アリアの手を見ると……
……ワンペア……っ。最弱の役しかない……！
――では、私は1枚ドローで」
と言って1枚だけカードを交換したメヌエットには、より強い役があると見るべきだぞ。
「じゃああたしは、3枚ドローよ」
後攻のアリアは揃ってないカードをテーブルの端に3枚置き、改めて――
今度は割とジックリ……赤紫色の瞳で、何やら……
うつろな目をして、カードのまだら模様を見た。テーブルの先、床を見るように。
そしてその目つきのまま、3枚を取り直す。
これにてカード交換は終わり――ホームズ姉妹は、早くも勝負の時を迎えてしまった。
「恥ずかしがり屋のお姉様が、よくなさること――赤面」
役に合わせて何かダジャレを言う習慣があるのか、そう言いつつメヌエットがオープンした手は……Q♥、J♥、6♥、3♥、2♥……フラッシュだ。
カード交換1回だと100分の1でしか作れない確率の、かなりの役をキメてきたぞ。
対する、アリアの手は。
「今日のこの家。メヌ、サシェ、エンドラ、リサ、キンジ、あたしで――満員の家」
……A♠、A♥、A♦、K♠、K♦……！

……か、勝ってる……！

フルハウスは確率的にも、役の上でも、フラッシュよりほんの僅かに強い役だ。

――勝ったぞ！　スレッスレの勝負だったが。

「……参りましたわ。さすがお姉様です」

素直に負けを認めたメヌエットは、ぷしゅー……と、車椅子から水蒸気を上げている。

「ほらキンジ。カード勝負は終わったんだから、今度はあんたの星カードを出しなさい」

振り返ってウィンクしてきたアリアに促されて、俺は星カードを出す。

メヌエットはそれに約束通り、10個目の星を描きながら

「でもこれからも、時々キンジを貸してくださいな。推理以上に面白い人物でしたので」

「ムカついた時はイギリスに宅配便で送るわ。その付け襟で首絞めてやって」

そんな会話を、ガサガサとトランプを手早く集めていくアリアとしていた。

そのアリアの手つきで、ようやくピンと来たんだが……

……イカサマだったみたいだな。今のフルハウス。

思い出したくない記憶だから封印していたが、このトランプは夏休みに理子が開催したゲーム大会『キャストオフ・テーブル』で使われたイカサマトランプだ。

その裏面の模様は、なんだか分からんまだら模様と見せかけて、ランダム・ドット・ステレオグラム。昔、時期流行った、両眼視差を利用し、目の焦点をずらすことで文字が浮き出てくる仕掛けの模様だ。

つまりアリアからしてみれば、カードは表になっていたも同然。それでメヌエットよりギリギリ強い役を作って、スレスレの勝利を巧妙に演出したってワケか。

とはいえ、それを見抜けなかったメヌエットの負けは負け。

イカサマがシンプルすぎて、頭の良すぎるメヌエットには分からなかったのかもな。

いや、もしくは――

メヌエットはアリアと俺の絆を推理し、実際に俺が王子から取り返して連れてきたのを見て……わざと、勝ちを譲ったのかも。

プライドの高いメヌエットは、あくまで勝負の結果として俺をアリアに返した――

と、しておきたかったのかもな。

だがそこは、謎のままにしておこう。

女の気持ちを一々聞くなんてヤボな事、この英国紳士の国で男がやるべきじゃないしな。

元・賭け代こと俺がそんな事を考える中、メヌエットは、車椅子を自らこいで……

音楽室の奥、舞台のようなダマスク柄の絨毯の上でこっちへ振り返る。

そしてその勿忘草色の眼を、微笑ませた。とても穏やかな、優しい表情で。

サシェ、エンドラ。私とお姉様が幼かった頃のように――ベツォールトのト長調、B・W・V、アンハング114番を。今日はリサも加えて、三重奏で」

そう命じられたサシェとエンドラが、心から嬉しそうにピアノと竪琴につき……リサも、礼して、棚にあったバイオリンを笑顔で取る。

その手を優雅にアリアへと差し伸べた、メヌエットは
「ではお姉様。小舞曲を御一緒に」
優しく微笑んで歩み寄ったアリアと、そっと、サシェ、エンドラ、リサが、俺も知っていたその有名な小舞曲を演奏し始めて……
アリアとメヌエットが、手を繋いだまま、ゆったりと踊る。
愛らしい、よく似た笑顔を向かい合わせながら。
車椅子には車椅子でのダンス作法があるらしく時にはアリアを中心に回りながら、時には波を打つように、しなやかに。
アリアのピンクブロンドのツインテールと、メヌエットのプラチナゴールドの髪が、空中に艶やかな曲線を重ねて煌めく。
なんて……なんて、美しいんだろう。
王侯貴族には悩まされっぱなしの俺だったが、こういうのが自然にできるのにはやはり脱帽してしまうね。さすが2人とも本物の貴族だ。
「メヌエット」
赤紫色の瞳を細めたアリアが、幸せそうに踊りながら妹の名を呼ぶ。
「なあに、お姉様」
「あなたが、大好きよ」
血を分けた姉妹が掛けた、その優しい声に

「――私もですわ。お姉様」

メヌエットも、優しい声を返した。今までで一番、幸せそうな笑顔で。

きれいだな。２人とも。

それを美しい姉妹愛が、より綺麗に見せている俺は……

温かい気持ちになって、ホームズ姉妹を眺めて。

曲とダンスが終わると、自然と拍手をしていた俺は……

「お姉様は全てに風穴を開けていく。ここ、ロンドンの退屈な日々にも」

そう言ってアリアを見上げてから、メヌエットは……

最後に俺の方へ車椅子ごと向き直り、約束通り、答えを教えてくれるのだった。

「――日本へ帰り、星伽白雪に会いなさい。緋緋色金の事は、彼女が全て知っています」

Go For The Next!!!

あとがき

はいどうも！　今年も赤松サンタがやってきましたよーっと！

だんだんローマ数字だと何巻か分かりにくくなってきてますが、緋弾のアリアの新刊をお届けいたします。

私もほぼ見たことのない表記ですが、XIX巻＝19巻です。

ほんと、最初に巻数をローマ数字で書くと決めた自分のところへタイムマシンで行って「アラビア数字にしろ！　こないだ本屋さんでIV巻とVI巻が逆に並べられてたんだぞ！」と、ドロップキックをしてやりたい気分です。

私自身、本棚に並べてみて「あれ、なんか違和感があるぞ？」と思ったらIX巻とXI巻が逆だったりして……すみませんねぇ、読者の皆さん＆書店の皆さん……

さてそんな中！　長らくお待たせいたしました！

その正体がずっと謎だった、緋弾のアリア『新プロジェクト』の1つの正体を、ここに発表いたします。

――『緋弾のアリアAA』のアニメ化であります！

前回のあとがきでもご紹介いたしましたが、『緋弾のアリアAA』は、アリアの戦妹・間宮あかりを主人公にしたシリーズ。女の子たちの可愛い日常シーンと、そこはやっぱりアリアたちの後輩

という事でカッコイイ戦闘シーンもタップリある作品です。

この業界には『かわいい＝正義』という公式がありますが、『かわいい＋カッコイイ＝大正義』であります（赤松中学の定理）。

このアニメに関しては今後、続報がどんどん出ます。ぜひ楽しみに待っていて下さいね。

なお、晴れてアニメ原作コミックとなる『緋弾のアリアＡＡ』は、来月９巻（IX巻）が発売となります。

コミックは私が原作で、現在ヤングガンガンにて好評連載中です。途中から読んでも割と分かるように書いてるつもりですので、ぜひ最新版も読んでみて下さいね。

しかも小説版アリアＡＡも発売される予定、と……いやー、これは流れ来てますね！

今までＡＡを買おうかどうか迷っていたそこのあなた！　買うなら今ですよ！

などと、最早ステルスする気が全く感じられないマーケティング、別名・宣伝をさせていただいたところで紙面が尽きました。

それでは、次はまた――星伽白雪によく似合う日本の花、桜が咲くころに。

２０１４年12月吉日　赤松中学

あとがき

■こんにちはこぶいちです！
今回の表紙もなかなかハードな
感じになりました。
気に入っていただければ嬉しいです。

それではまた次巻で
お会いいたしましょう！！

岡山